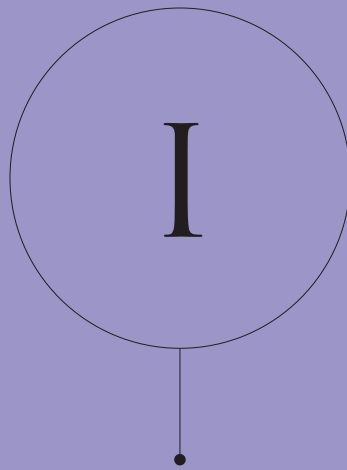


2022年度 JICA 教師海外研修 (教育行政コース) 報告書



目次

I	事業概要	・04
II	参加者・運営関係者	・07
III	研修スケジュール	・09
IV	海外研修視察レポート	・18
V	参加者レポート	・28
VI	付録	・114



事業概要

1. 背景

国際協力機構（JICA）は日本の政府開発援助（ODA）を一元的に行う実施機関であり、約150の国・地域で国際協力を展開している。日本国内においては、これら国際協力を通じて得た知見を生かし、「持続可能な社会の創り手」の育成を目指す新学習指導要領などの学校教育の動向を踏まえ、「教師海外研修」「国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」「施設訪問」「国際協力出前講座」「開発教育メールマガジン」「開発教育教材作成」など、国際理解教育/開発教育を支援する様々な事業を行っている。本研修は上記開発教育支援事業の一環として、全国の国際理解教育/開発教育に携わる学校管理職(校長・教頭)および教育行政関係者を対象に実施するものである。学校全体で開発教育の継続的な取り組みを実施するためのスクールリーダーの能力強化を目的としている。

2. 目的

誰もが安心して暮らせる「だれ一人取り残さない」社会づくりに関わる問題は、世界でも、地域でも、そして学校でも共通する課題である。

本研修は、このような背景を踏まえ、新学習指導要領の「持続可能な社会の創り手」の育成も念頭に、参加者は開発途上国の現状や国際協力の現状について、実際に途上国を訪問しJICAが実施している教育支援について体験し考える。また、参加者同士の意見交換や知見の共有を通して、スクールリーダーとしての力を高めることをねらいとしている。さらに、参加者が研修終了後も継続して、本研修で培われた教員ネットワークで情報を共有することで、各地域の学校教育関係者と共にさらなる国際理解教育/開発教育の推進を図ることを目指している。

3. 研修日程・場所

事前研修	2022年10月28日（金）9:30-18:00	会場：JICA本部（麹町）
海外研修	2022年12月23日（金）～12月30日（金）7泊8日	派遣国：エジプト・アラブ共和国
事後研修	2023年1月13日（金）9:30-17:00	会場：JICA市ヶ谷ビル
帰国報告会	2023年1月25日（水）16:00-18:00	オンライン

4. 主な内容

事前研修

- 研修の目的とプログラム全体の流れ
- 国際理解教育/開発教育推進について
- 研修テーマの共有
- 国際協力の現状と課題
- 派遣国事情、渡航について など

海外研修

- JICAエジプト事務所訪問、スタッフとの意見交換
- JICAプロジェクト「日本式教育の学校(日本式教育の実践)」等の現場視察
- 現地で活動するJICAボランティアとの交流
- 現地学校関係者等との意見交換
- 振り返り など

事後研修

- 研修レポートの共有
- 海外研修の振り返り
- 報告会に向けての準備

帰国報告会

- 基調講演
- 海外研修の経験、知見の共有
- 国際理解教育/開発教育の推進について

5. 実施体制

- 主催 : JICA広報室 地球ひろば推進課
- 運営事務局 : 一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト (GiFT)
(JICA地球ひろば・教員向け研修運営事務局)

6. 参加資格

以下の①～③のいずれかに該当するとともに、④～⑥を満たす方。

- ①小・中・高校、特別支援学校等の校長・教頭職の方(主幹教諭を含む)。
- ②都道府県・市町村の教育委員会(教育センターを含む)の指導主事の方。
- ③本研修の趣旨・目的を十分理解し、上記研修プログラムに参加可能であること。
- ④オンライン会議ツール(Zoomを想定)を用いた研修実施に対応可能であること(Wi-Fi環境、PCなど)。
- ⑤本研修を通じて得られた学び・成果を所属先及び各地域の教育委員会、各種教員ネットワーク
(研究会、勉強会等)の場において積極的に共有・紹介する意欲のあること。
- ⑥JICA国内拠点や各県所在のJICAデスク(国際協力推進員)等と連携・協力しながら、
開発教育/国際理解教育の普及促進に貢献する意欲があること。

II

参加者・
運営関係者

参加者

	都道府県	名前	所属	職名(担当業務)
1	北海道	杉島 亜紀	南幌町立南幌小学校	教頭
2	北海道	永洞 純一	札幌市立二条小学校	教頭
3	山形県	竹田 洋	山形県川西町立大塚小学校	校長(学校経営全般)
4	東京都	新井 誠司	和洋九段女子中学校高等学校	高等学校教頭(教務・進路・入試広報・21世紀型教育推進等)
5	神奈川県	櫻木 萌季	神奈川県立横浜国際高等学校	教諭(国際バカロレア、交通安全、生徒指導、文化祭等)
6	神奈川県	住田 昌治	学校法人 湘南学園	学園長、常任理事
7	長野県	高野 芙美	長野県教育委員会事務局 学びの改革支援課 高校教育指導係	指導主事(WWWLコンソーシアム構築支援事業、海外留学、教育課程外国語)
8	石川県	浅見 淳一	輪島市立河原田小学校	校長
9	三重県	伊川 昌弘	三重県教育委員会事務局 研修推進課 テーマ研修班	主任(教職員研修、情報教育、テーマ別研修)
10	兵庫県	石動 徳子	神戸市教育委員会 学校教育部学校教育課 こども日本語サポートひろば	指導主事(外国人児童生徒支援)
11	京都府	馬谷 陽子	京都市教育委員会	指導主事(京都市立開建高校開設準備・高校英語)
12	大阪府	山本 昌平	大阪市立新興中学校	教務主任、研究主任、指導教諭
13	島根県	泉 裕子	江津市教育委員会 学校教育課	指導主事(学力育成)
14	福岡県	小川 由有	福岡県教育センター	指導主事(若年教員研修、中学校外国語)
15	沖縄県	西表 りか	沖縄県教育庁生涯学習振興課	生涯学習班長(班の統括)

主催

国際協力機構 (JICA)	竹田 幸子	JICA広報部 部長
	畔上 智洋	JICA広報部 地球ひろば推進課 課長
	加藤 眞佐美*	JICA広報部 地球ひろば推進課
	井戸 奈央	JICA広報部 地球ひろば推進課
	笹川 千昌	JICA広報部 地球ひろば推進課
	諸橋 郁哉*	JICA東京 市民参加協力第一課 学校教育アドバイザー
	遠山 桂吾*	JICA中部 研修員

*海外研修同行者

運営事務局

一般社団法人 グローバル教育推進 プロジェクト(GiFT)	辰野 まどか*	代表理事
	忍 頼子	グローバル教育プロデューサー
	岩崎 沙織	グローバル教育コーディネーター

*海外研修同行者

III

研修スケジュール

(1) 事前研修 2022年10月28日(金) 9:30-18:00 会場: JICA本部(麹町)

開始	終了	プログラム	担当等
9:00	9:30	受付	運営事務局
9:30	9:40	【開会】主催挨拶	JICA広報部長 竹田 幸子
9:40	9:50	教師海外研修とは 事前研修のねらい	JICA広報部地球ひろば推進課 加藤 眞佐美
9:50	10:55	【アイスブレイク】 自己紹介(チェックイン)	ファシリテーション: GiFT 辰野 まどか
10:55	11:05	休憩	
11:05	11:30	【ダイアログ①】 今、この時代に、国際理解教育や開発教育を 推進する意味や重要性とは何か	ファシリテーション: GiFT 辰野 まどか
11:30	12:25	【ワークショップ】ストーリー・テリング	ファシリテーション: GiFT 辰野 まどか
12:25	13:15	休憩/昼食	
13:15	13:25	海外研修プログラム(予定)説明	JICA広報部地球ひろば推進課 加藤 眞佐美
13:25	13:55	【講義】 ・訪問国(エジプト)におけるJICAの取組(概要) ・エジプトへのJICA協力の歴史、今後のエジプトへの支援の方向性、安全管理等について	JICA中東・欧州部 中東第一課 課長 小森 明子
13:55	14:25	【講義】 特別活動を中心とした日本式教育モデル発展・ 普及プロジェクトについて	JICA人間開発部 基礎教育第二チーム 企画役 岩崎 理恵
14:25	14:40	【講義】(オンライン) エジプトにおける日本式公民館普及と社会教育 強化プロジェクトについて(草の根技術協力事業)	JICA沖縄市民参加協力課専門嘱託 大澤 明浩
14:40	14:55	休憩	
14:55	15:20	講義振り返り	ファシリテーション: GiFT 辰野 まどか
15:20	16:00	【ワークショップ】2023年のビジョンメイキング	ファシリテーション: GiFT 辰野 まどか
16:00	16:10	休憩	
16:10	17:00	【ダイアログ②】研修での探究テーマの共創と共有	ファシリテーション: GiFT 辰野 まどか
17:00	17:15	休憩	
17:15	17:25	海外旅行保険についての説明(安全管理含む) 質疑応答	ファシリテーション: GiFT 辰野 まどか
17:25	17:50	1日の振り返り(チェックアウト)	ファシリテーション: GiFT 辰野 まどか
17:50	18:00	閉会・事務連絡	



アイスブレイク



ダイアログ①



【講義】
エジプトにおけるJICAの取組



【ワークショップ】
2023年のビジョンメイキング



ダイアログ②



集合写真

(2)海外研修 2022年12月23日(金)～12月30日(金)7泊8日 派遣国:エジプト・アラブ共和国

【Day 1】 12月23日(金)	
19:30	成田空港集合
21:55	ドーハへ向けて出発(カタール航空 QR807)
【Day 2】 12月24日(土)	
5:55/7:55	ハマド国際空港(ドーハ) 着/発(カタール航空 QR1303)
10:40	昼食→ホテルへ移動、チェックイン→出発
16:00	ター公民館訪問 エジプトにおける日本式公民館普及と社会教育強化プロジェクト(草の根技術協力事業)
18:00	夕食→ホテル到着/1日の振り返り
【Day 3】 12月25日(日)	
9:00	JICAエジプト事務所訪問
10:45	教育省訪問 特別活動を中心とした日本式教育モデル発展・普及プロジェクト ・プロジェクト専門家からの説明 専門家:中島基恵氏
12:45	昼食
14:00	教育省訪問 特別活動を中心とした日本式教育モデル発展・普及プロジェクト ・教育省担当者からの説明 Ms.Navine(Advisor to President)
16:00	日本大使館表敬訪問
18:00	夕食→ホテル到着
【Day 4】 12月26日(月)	
8:00	エジプト日本学校(EJS) 訪問 【Group 1】EJS in Naser City 【Group 2】EJS in El-Shorouk 2
14:30	昼食
16:30	学校訪問の共有&これまでの振り返り (JICAエジプト事務所)
20:30	夕食→ホテル到着
【Day 5】 12月27日(火)	
6:00	アレクサンドリアに向けて出発
10:00	エジプト日本科学技術大学(E-JUST) 訪問
12:00	アレクサンドリア市街へ移動
13:00	カーイト・ベイ要塞、新アレクサンドリア図書館訪問
19:00	夕食→ホテル到着

(2)海外研修 2022年12月23日(金)～12月30日(金)7泊8日 派遣国:エジプト・アラブ共和国

【Day 6】 12月28日 (水)	
9:00	特別活動パイオニアスクール学校訪問 Sara Taqy-Allah Experimental Language School
12:00	昼食
14:00	カイロ大学小児病院訪問
16:15	振り返り (JICAエジプト事務所)
20:00	夕食→ホテル到着
【Day 7】 12月29日 (木)	
7:00/8:00	朝食→ホテルチェックアウト/出発
9:00	ギザ観光 (ピラミッド・スフィンクス) /昼食 国立文明博物館訪問・ハンハリーリ市場散策
15:45	カイロ国際空港へ移動、チェックイン
19:40	ドーハに向けて出発 (カタール航空 QR1302)
23:45	ハマド国際空港 (ドーハ) 着
【Day 8】 12月30日 (金)	
2:00	成田へ向けてドーハ出発 (カタール航空 QR806)
17:55	成田空港到着→検疫・入管・税関→解散



ター公民館での交流



学校訪問でプレゼントを受取る参加者

(3) 事後研修 2023年1月13日(金) 9:30-17:00 会場: JICA市ヶ谷ビル

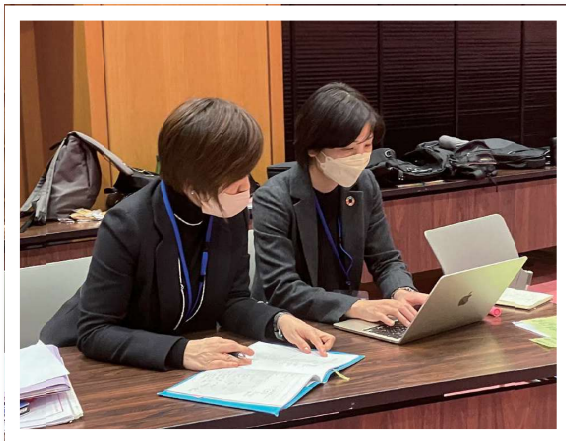
開始	終了	プログラム	担当等
9:00	9:30	受付	運営事務局
9:30	9:40	【開会】 ・主催挨拶 ・事後研修ついて	JICA広報部地球ひろば推進課 加藤 眞佐美
9:40	10:10	【アイスブレイク】	ファシリテーション: GiFT 辰野 まどか
10:10	11:00	【ワークショップ】海外研修の振り返り①	ファシリテーション: GiFT 辰野 まどか
11:00	11:10	休憩	
11:10	12:00	【ワークショップ】海外研修の振り返り② ・今、この時代に、国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性とは何か ・国際理解教育や開発教育を推進するために学校教育・教育行政できることとは何か	ファシリテーション: GiFT 辰野 まどか
12:00	12:45	昼食	
12:45	13:15	JICA地球ひろば見学	
13:15	14:30	【報告会準備①】 ・報告会の趣旨説明 ・オンライン報告会の広報先についてブレインストーミング ・グループ分けおよびグループごとの準備 ①エジプトにおける日本式公民館普及と社会教育強化プロジェクト(草の根技術協力事業) 訪問先: ター公民館 ②特別活動を中心とした日本式教育モデル発展・普及プロジェクト 訪問先: EJS in Naser City ③特別活動を中心とした日本式教育モデル発展・普及プロジェクト 訪問先: EJS in El-Shorouk 2 ④特別活動パイオニアスクール 訪問先: Sara Taqy-Allah Experimental Language School ⑤海外研修での経験を踏まえ、国際理解教育や開発教育を推進していくために今後、行っていきたいことについて	ファシリテーション: GiFT 辰野 まどか
14:30	14:40	休憩	
14:40	15:30	【グループごとの発表内容(概要)の共有】	ファシリテーション: GiFT 辰野 まどか
15:30	16:00	【報告会準備②】 発表グループごとにブラッシュアップおよび本番までの準備についての確認	ファシリテーション: GiFT 辰野 まどか
16:00	16:10	休憩	
16:10	16:50	【1日の振り返り】	ファシリテーション: GiFT 辰野 まどか
16:50	17:00	【閉会】	JICA広報部地球ひろば推進課 課長 畔上 智洋



海外研修の振り返り①



海外研修の振り返り②



【報告会準備】
発表の構成を検討する参加者



【報告会準備】
参加者レポートを読み込む参加者



【報告会準備】
発表内容のすり合わせをする参加者



【集合写真】

(4) 報告会 2023年1月25日(水) 16:00-18:00 (オンライン)
 ~TOKKATSU-エジプトの未来を創る教育の挑戦に学ぶ~

開始	終了	プログラム	担当等
16:00	16:10	【開会】	JICA広報部地球ひろば推進課 加藤 眞佐美
16:10	16:40	【基調講演】 「エジプトの日本式教育TOKKATSUの現状と可能性」 國學院大學教授・元文部科学省初等中等教育局 視学官 杉田 洋氏	司会: GiFT 忍 頼子
16:40	17:40	【報告発表】 ◆海外研修の様子紹介動画 ◆視察訪問からの気づき、学びとそこから考える国際理解教育や開発教育の意義・価値について ①エジプトにおける日本式公民館普及と社会教育強化プロジェクト(草の根技術協力事業) 訪問先: ター公民館 ②特別活動を中心とした日本式教育モデル発展・普及プロジェクト 訪問先: EJS in Naser City ③特別活動を中心とした日本式教育モデル発展・普及プロジェクト 訪問先: EJS in El-Shorouk 2 ④特別活動パイオニアスクール 訪問先: Sara Taqy-Allah Experimental Language School ◆海外研修での経験を踏まえ、国際理解教育や開発教育を推進していくための今後の取組について	ファシリテーション: GiFT 辰野 まどか
17:40	17:50	【講評】 文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官 富高 雅代氏	司会: GiFT 忍 頼子
17:50	18:00	【開会】	JICA広報部 部長 竹田 幸子



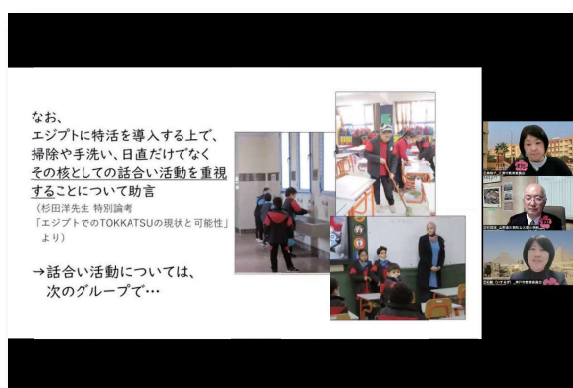
【基調講演】

エジプトの日本式教育 TOKKATSUの現状と可能性



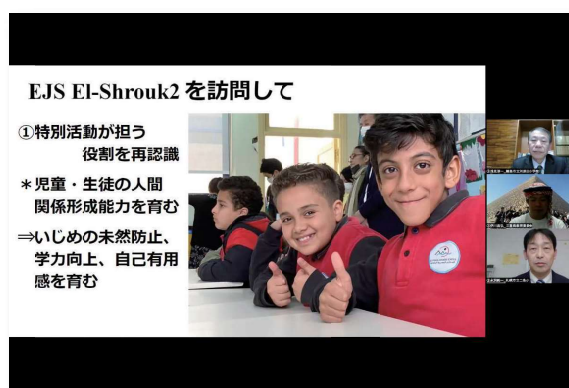
【発表①】

訪問先：ター公民館



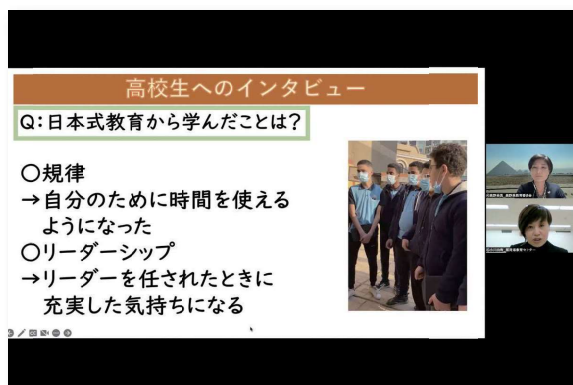
【発表②】

訪問先：EJS in Naser City



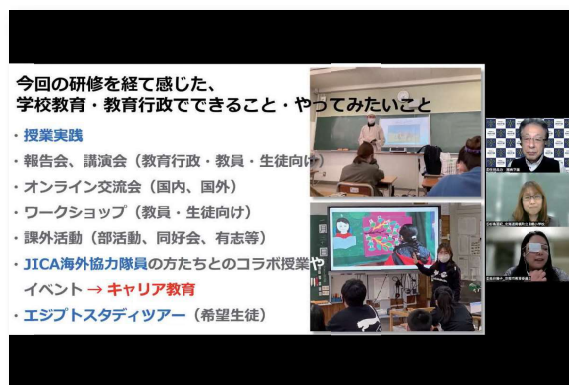
【発表③】

訪問先：EJS in El-Shorouk 2



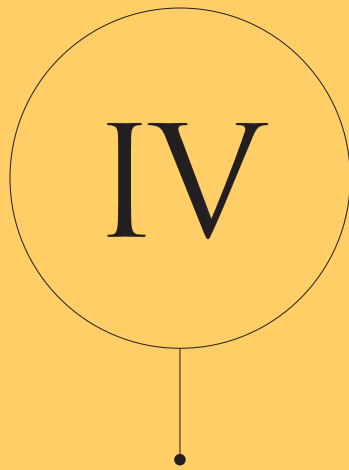
【発表④】

訪問先：Sara Taqy-Allah Experimental School



【発表】

今後の取組について



海外研修視察レポート

訪問先：ター公民館

訪問日：2022年12月24日（土）

JICA沖縄が委託している草の根技術協力プロジェクト「エジプトにおける日本式公民館普及と社会教育強化プロジェクト」の現場であるター公民館を訪問。エジプトの生涯教育の取組を学ぶ機会となった。

到着すると、グローバル公民館代表のモハメッド・アブデルミギード（ギド）氏をはじめとしたスタッフの方々に温かく迎えていただき、視察と交流がスタートした。3チームに分かれ、3つの部屋を移動して、ター公民館の活動についてのプレゼンテーションや、地域の子どもたちが参加する陶器作りのワークショップ、通訳サークルの活動の様子を聞くことができた。通訳サークルのメンバーは、日本語に興味を持ったきっかけや（大学で成績優秀者は15言語の中で、日本語か韓国語を選択できるという仕組みとのこと。またアニメや漢字が好きというメンバーもいた）、エジプトのアニメを独自に制作した話などをイキイキとしてくれた。皆、ボランティアで活動を行っている。

ギド氏からは、優秀な子どもたちだけにチャンスがあるのではなく、誰でも参加できるサークルとして、「集う・つなぐ・学ぶ」ことを大切にしている場づくりをしていると話があった。ター公民館では、人材育成、サークル活動、生涯学習の普及など、さまざまな活動に尽力しており、自立・自走できる活動を目指している。研修参加者からは、日本の各地域におけるコミュニティとの連携や、子どもたちの居場所づくり、防災教育、親の学び合いプログラムなどが紹介された。プログラム終了後にはお茶会が設けられ、公民館の方々と研修参加者との温かい交流の時間となった。



訪問先: 教育省 (PMU1/Project Management Unit)

訪問日: 2022年12月25日 (日)

JICAがエジプトで実施している技術協力プロジェクト「特別活動を中心とした日本式教育モデル発展・普及プロジェクト」の実施期間である教育省 (PMU/Project Management Unit) を訪問。JICA専門家の中島 基恵氏より、技術協力プロジェクトの概要およびエジプトにおける特別活動の意義・理念等の説明を受けた。

- 当初は道德の普及を考えたが、道德は国によって解釈が大きく異なるため、特別活動を実施することになった。
- 特別活動を実施しているエジプト日本学校 (EJS: Egyptian Japanese School) は現在51校あるが、日本の特別活動の中で、日直・話し合い活動・清掃の3つに絞って実践を重ねている。将来は全国の学校で特別活動を実施していく予定。
- 日直は特別の子どもの役割ではなく、すべての子どもが体験することで個々の自己有用感を高めることを狙っている。話し合い活動は、教員主導ではなく、子どもに主体性を持たせるようにしている。清掃は、保護者も含めてその意義の理解を推進しており、その結果エジプト側の認識が変化している。
- 特別活動は、今後もエジプト社会に大きく貢献をしていくと考えられる。
- カリキュラムの編成と合わせて、「Tokkatsu」の取組みが2018年から始まり、実践を積み重ねているところではあるが、実際に何をしたらいいのかよく分からない側面もある。そのため、教員がファシリテーターとなり、よりTokkatsuを推進するための指導者の育成を、フェーズ2として2021年より開始している。



訪問先：EJS in Naser City

訪問日：2022年12月26日（月）

カイロ近郊にあるEJS in Naser Cityを訪問した。登校してきた子どもたちは、朝読書や朝学習、体操等をおこなっていた。日替わりで担当する日直は先生と協力して出席者の確認をする。日直は特別な子だけがリーダーとなるのではなく、すべての子どもがリーダーとして活躍する活動となっており、子どもたちは張り切って、日直の仕事をこなしていた。

この日の訪問では、朝の会、日直、遊びを通じた学び、掃除などを見学した。学校では、整理整頓を促すために、子どもの靴箱には名前だけでなく子どもの写真を貼るなど、さまざまな工夫がみられた。

現在、エジプトの人口は1億人を超過しており、国民の平均年齢が24歳という若い国のため、若者への期待が大きい。そのために協働、自治・合意形成を学ぶ特活を取り入れたという。

EJS in Naser Cityを訪問して、日本の教育をとても誇りに思う反面、日本の教育現場で「日本式教育」とどのように向き合っていけばよいのかを改めて考えさせられた。

また、研修参加者から現地エジプト教員に対して、日本の特活その他の取組について発表を行った。日本での活動について、エジプト教員側からも様々な質問があり、双方の教員が特活を通じて経験を共有することができた。



訪問先: EJS in El-Shorouk 2

訪問日: 2022年12月26日(月)

EJS in El Shorouk 2は、全校児童150人(1学年30人x5学年)の日本式教育を取り入れている小学校である。歓迎を受けた後、校庭で子どもたちが体を動かしてウォーミングアップ、その後国旗掲揚を見学。続いて、Quiet Learningと呼ばれる静かな時間の中、読書などを行う時間を見学した。校長は海外出張で不在とのことで、そのまま授業を見学した。教室では、液晶モニターを使いながら、日直が身体を動かすエクササイズを取り仕切る様子などを見学した。コーヒープレイクの時間には、子どもたちが楽器演奏を披露してくれた。また、この学校で美術の教員として活動している協力隊員と交流することができた。

Tokkatsuクラスの話し合い活動では、SNSやインターネットの弊害について話し合いが行われた。まず、先生が寸劇を行い、それに対して子どもたちは、積極的に手を挙げ「寝不足になってしまう」「宿題を忘れてしまう」など、自分達の考えを発表した。

クイズ大会の内容等を話し合いで決める学級会の様子も見学した。クラスの委員長たちは紙で作った金色の王冠を被り、書記は銀色の王冠を頭に載せている。長時間の話し合いだったが、委員たちは、根気強くクラスメイトの意見を聞き続け、場をファシリテートしていた。

その後、研修参加者より、日本におけるTokkatsuのプレゼンテーションと現地教員との質疑応答を行った。そのほか児童たちの掃除の様子、整列して歯磨きを行う様子などを見学した。



訪問先：JICA エジプト事務所（学校訪問の共有&これまでの振り返り）

訪問日：2022年12月26日（月）

海外研修の中間ふりかえりの時間を設け、参加者がここまでに感じていることを共有した。その中には、以下のよう様々な気づきや思いが共有された。

- 先生に質問したら、子どもへの思いが同じでとても嬉しかった。
- ター公民館の皆の目の輝きが忘れられない。自分も感化された。
- 世界は知らないことでできている。知らないことだらけだと思った。
- 外とつながろうとするパワーに圧倒された。自分は何ができるか考えている。
- 特活でも、他の学習活動でも育みたいものは変わらない。日本人にとっては日常的すぎるからこそ、可視化する難しさを感じている。
- 日本をリスペクトしてくれてありがたい。誇りを感じた。

その後、El-Shorouk 2とNaser Cityに行った研修参加者同士で、それぞれの学校での経験や学び、事前研修で設定したそれぞれの探究テーマについての気づきや発見について共有した。

その後、JICA専門家として特活の技術協力プロジェクトに関わってこられた國學院大學教授の杉田洋氏、文部科学省初等中等教育局の安部恭子氏、日本体育大学の橋谷由紀氏との意見交換の場が設けられた。杉田氏からは「特別活動」というと英語では、別の意味にとらえられる可能性があるため「Tokkatsu」という言葉を用いることにしたなど、これまでの経緯や思いについてお話いただいた。参加者もそれぞれ自己紹介をし、貴重な時間を過ごすことができた。



訪問先：エジプト日本科学技術大学 (E-JUST)・カーイト・ベイ要塞・新アレクサンドリア図書館

訪問日：2022年12月27日（火）

エジプト日本科学技術大学 (E-JUST) は、日本型の工学教育の特長を活かした「少人数、大学院・研究中心、実践的かつ国際水準の教育提供」をコンセプトとする国立大学である。エジプト国側がキャンパスや施設の建設費用を負担し、日本側は技術的指導と研究・教育機材整備への支援を行っている。

E-JUSTでは理事長や教授陣との挨拶に続いて設立の背景や目的、活動内容、施設の詳細、学生の学びについて等、お話いただいた。その後、小グループに分かれて学生たちと交流したり、キャンパス内の図書館や研究施設、講義室などを見学した。E-JUSTでは、大学特徴や研究実績、リベラルアーツやゼミなど、研究開発における人材育成に着眼していることが感じられた。

E-JUSTを後にして、アレクサンドリア市内にあるカーイト・ベイ要塞を訪問。この要塞は、1470年に十字軍からアレクサンドリアを守るために建てられたもので、海に突き出した灯台跡に建設されており、風光明媚な場所である。あらためて、エジプトの歴史と文化の豊かさに触れることができた。

続いて、世界最古と言われる「アレクサンドリア図書館」（2000年以上前に存在し焼失）があった場所に2001年に建てられた「新アレクサンドリア図書館」を訪問。一度に2,000人収容することが可能な閲覧室は世界最大規模で、多くの書籍がデータベース化されており日本からもオンラインで閲覧することが可能。内部には、カーバ神殿の扉のカバーやナポレオンのエジプト遠征時に編纂された「エジプト誌」の原本や古代のアレクサンドリア図書館当時のものとされるパピルスなど、大変貴重な資料が展示されていた。



訪問先：Sara Taqy-Allah Experimental Language School

訪問日：2022年12月28日（水）

この学校は、Tokkatsuをパイオニア的に取り入れた学校で、語学を中心とした教育を行う学校である。まず、学校長からTokkatsuを取り入れたきっかけや、この学校には、幼稚園児から高校生までの子どもが通っていることなどの説明があった。また、私立のLanguage Schoolは授業料が高いが、公立のLanguage Schoolは費用が抑えられるため、入学できることは児童・生徒にとって幸運であるとの説明もあった。その後、グループに分かれて高校生へのインタビューや、小学生が作った歌の発表を見学した。また、研修参加者から、日本の小学校の1日の生活の流れや委員会活動、係活動、給食当番等を紹介し、エジプトの教員との質疑応答も活発に行われた。



訪問先：カイロ大学小児病院

訪問日：2022年12月28日（水）

カイロ大学小児病院（CUSPH）は、小児医療専門の公的医療機関かつ教育機関として、貧困層に対する小児医療サービスの中核的役割を担っている。近年の急激な人口増加と都市部への集中による患者の増加に伴い、日本の無償資金協力により拡充・改修を行った。この病院で活動する看護師の協力隊員から、病院の概要や活動の様子についての説明を受けた。その後、協力隊員と病院長の案内のもと、病院内を見学した。病気の子どもたちが少しでも楽しく過ごせるように、アニメのキャラクターが壁に描かれていたり、プレイルームが併設されていた。協力隊員は、現地に溶け込むために、エジプト人看護師と同じようにヒジャブを被り、白衣で活動しているとのこと。地道だが、確実に根付いている協力隊員の草の根の活動に感銘を受けた。

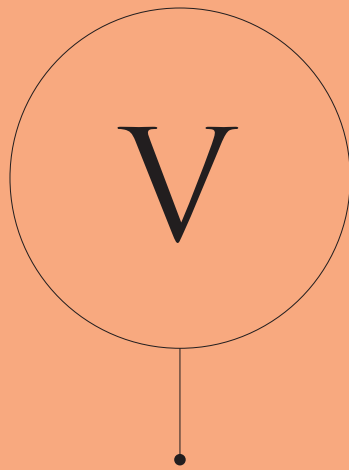


訪問先：JICA エジプト事務所（振り返り）

訪問日：2022年12月28日（水）

海外研修の締めくくりとして、この5日間を通して印象に残ったこと、周囲の人に伝えていきたい気づきや学びについて考え、お互いに共有する振り返りを行った。参加者からは、つながることやチームとしての助け合いの大切さ、「特活」の再発見、日本もエジプトも目指す子どもの姿は一緒、などが気づきとして挙げられた。また、帰国後に取り組みたいこととして、エジプトと交流し続ける、冬休み明け最初の授業でエジプト体験談をしたい、訪問したEJSへの贈り物作りをしたい、国際理解教育を学校や町でどう広めていくかを考えたい、指導主事会や協力してもらった学校で報告会をしたい、エジプトの大学生と生徒をオンラインでつなげたい、エジプトスタディツアーをしたい、といったアイデアが共有された。





参加者レポート

氏名	所属	職名	担当業務
杉島 亜紀	南幌町立南幌小学校	教頭	

1. ご自身がこの研修を通して探究したテーマについて、また、その探究から得た学びや気づきをお書きください。

探究テーマ: 多様性から学ぶ教育

気づき・学び:

● 多様性について

固定概念という枠を外して、相手をそのまま受け止める。ジャッジする必要はないということを改めて感じた。今まで何も気にせず多様性を認めると表現していたが、その表現に違和感を感じ、自分との対話を続けた。その中で気がついたことは、違いがあることが前提であり、いろいろな人がいて当たり前。幼い頃から違いをそのまま受け止める体験を積み重ねていると、違いに対してニュートラルな状態となる。多様性があるからこそ互いを思い合える気持ちが育ち、納得解を導いていく力が育まれる。結果、本人も周りも心地よく過ごせる社会が創られると考えた。少しオーバーな言い方かもしれないが、多様性というものが何かを生み出す創造の原点になるような気がした。

● 協働について

協働という形はひとつではないということを知った。学校という狭い空間をイメージしていた私は教室や体育館など同じ場所、同じ空間における作業と捉えていた。しかし、世界を視点に考えると、目標を共有し、その目標に向かって別々の場所で取り組むことも協働である。また、相手を知り対話ができる状態（互いにWin-Winの関係）である時に本当の意味での協働が成立すると考えるようになった。一方通行で協働しているつもりになっていないか、相手の声に耳を傾け互いに意思疎通しながら物事をすすめているか内省した。そして、協働の意味をしっかりと子供たちに伝えていきたいと思った。

2. 1の学びや気づきは、本研修におけるどのような経験や体験から得られましたか。

ター公民館で「目標をともにしていれば、日本とエジプトと離れていてもそれは協働だ」という言葉に納得。実際に取組をしている方々の言葉は重い。EJSでは、積極的に役割を分担し全員で掃除に取り組んでおり、子供達の中ではTokkatsuは日常的な活動として浸透しているように見えた。世界はめまぐるしく変化している。その中で教育改革に国全体で計画的・スピード感をもって取り組み、確実に成長しているエジプトの人々に触れることができた。他国の取組を単に推進するのではなく、エジプト本国におけるTokkatsuの意味を見出し、根を張り広がり続けている姿をみて、多様性や協働について考えると同時に、日本の特別活動について振り返る良いきっかけとなった。

3. 研修を通して、「今、この時代に、国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

日本における外国人留学生や日本で働く外国の人の数は年々増加し、今後ますます国際社会化が進むことは間違いない。グローバル時代を生きる子供たちにとって、幼い頃から世界に目を向け、世界で起きていることを自分ごととして捉え、考え、行動する力を身につけることがとても大切だと考える。

私は出発前エジプトの教育を知りたいと思っていたが、結果としてエジプトを知ることで「私はどう考えるのか」と様々な面で自分自身に問いかける日々となった。世界を知ることで日本を知る。着目するテーマはいろいろあるが、自らの気づきをもとに考え、対話を通して自分が今できることを考え、そして行動をする。一人ひとりが自分ごととして考えることが、誰もが幸せに暮らせる未来を創る第一歩となる。一人の取組は小さな一歩かもしれない。しかし、その一歩が波紋をよび、大きな原動力となる可能性も秘めている。世界という広い視野で物事を捉えることで、たおやかな心が育ち、協働する力が育まれると考える。

4. 年度内から次年度の業務において、開発教育・国際理解教育推進のために自分が取り組みたいことについて、主な3つを挙げてください。(所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定など)

- 本校における授業実践(提案型授業)
- 教職員への研修報告とこれからの教育に必要なものについての対話
- 子供と世界を繋げる教育課程の編成

5. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか?主な3つを挙げてください。

- JICA北海道と連携した教職員向けワークショップ
- カイロ大学で日本語を専攻している学生に小学生がインタビュー
- エジプト日本学校(EJS)の子供たちとZoomで学校紹介

6. 本研修への参加を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容(報告会など)。その際、使用した資料があれば、添付をお願いいたします。

- ①所属する町の教育委員会への報告
- ②所属校における職員への報告
- ③所属校における授業(全学年) *下記参照
- ④前任校における授業

〈所属校における授業(全学年)について〉

【授業】

総合的な学習の時間

【テーマ】

「違いを楽しむ」

【ねらい】

- エジプトの文化や生活を通して、世界の国の文化や出来事に関心を持ち、違いや同じことがあることに気づく。
- 他者とよりよい関係を築くために、違いを受け止めることや話し合うことの必要性に気づく。
- EJSのTokkatsuの様子を通して、自身の活動の意義を考える。

【授業の流れ】

スライドを見た子供たちが日本との違いについて発見し、疑問に思ったことなどを交流する。随時ICTを活用して個々に調べ、全体共有の際に教師側による説明を加えた。

【配慮したこと】

- スライドの言葉は最小限にした。
- 振り返りでは、言葉でうまく表現できない場合は絵で表現してもよいことを伝えた。(低学年)
- エジプトの通貨、パピルス、砂など実物を用意し、五感で感じられるようにした。

【子供たちの振り返りから抜粋】

- パピルスは竹みたいでほんのり甘いにおいがした。触てみるとパキパキして折れそうだった。(3年生)
- お金はポンド。触った感じが日本と違って絵も違った。(2年生)
- ポンドをドルに換算してから円にする方法がわかった。(6年生)
- 砂は日本より乾いていて全く湿気がなく、とてもサラサラしていた。(4年生)
- エジプトのことをもっと知りたくなった。(3年生)
- エジプトと日本では、同じところもあれば違うところもあって面白いと思った。(4年生)
- アラビア語について調べてみたい。(5年生) ※後日、家庭学習で調べていた。
- 私もいつかエジプトに行ってアラビア語で話してみたいと思った。(5年生)
- 通訳の人が日本語とアラビア語を話しているのを見て、どうやったらそんなふうに話せるようになるのか気になった。(6年生)
- 掃除や日直がないということに驚いた。日本の日直とかがエジプトで認められていることは知らなかった。嬉しいし、国で取り入れていることがすごいと思った。(6年生)

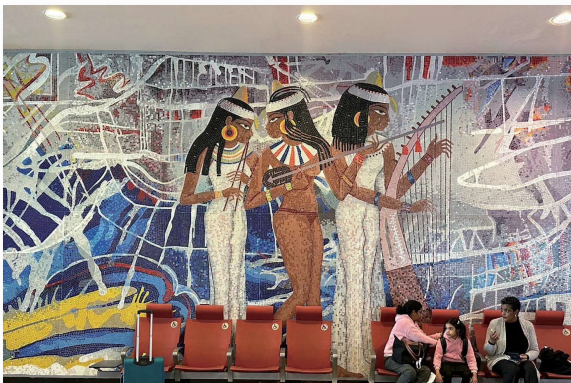
7. その他所感(研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか?どのような教育の場を作っていきたいか?など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。)

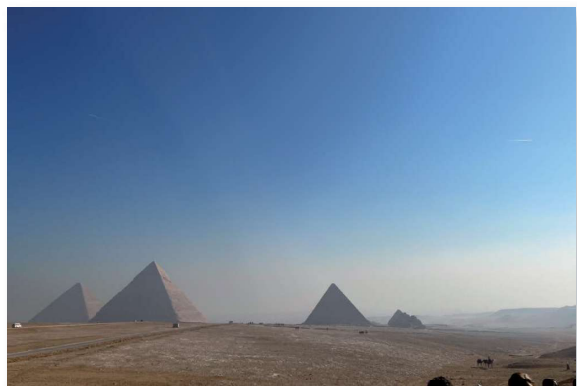
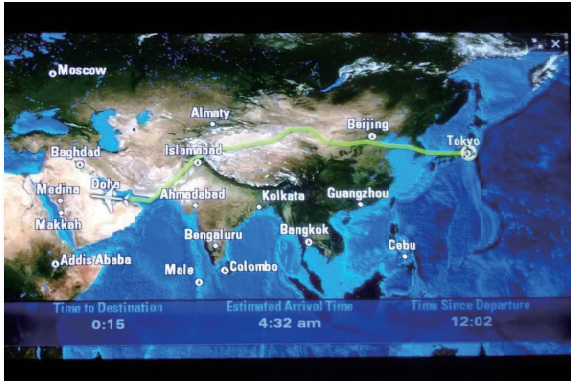
帰国後、私自身が協働的に活動することを意識して取り組んでいる。学校は組織である。頭では理解しているが、振り返ると個人で仕事を抱え込んでしまう場面も多かった。教職員間はもちろんのこと、保護者や地域、教育機関等、相手と日常的に対話をし、自分も開示しながら信頼関係を築いていく。誰もが予測できないことが次々と起こる時代。どれが正しくて間違えているかという判断ではなく「どのように柔軟に適応していくか」や「どうすることがより良い方法につながるのか」という意識をもって対話を繰り返していくと、ひとつひとつのビジョンが具体的にイメージされるとともに役割が明確になり、目標に向かって個々が主体的に行動する結果につながる体験をした。今後も対話を通して相手のパワーを引き出せるように精進していきたい。

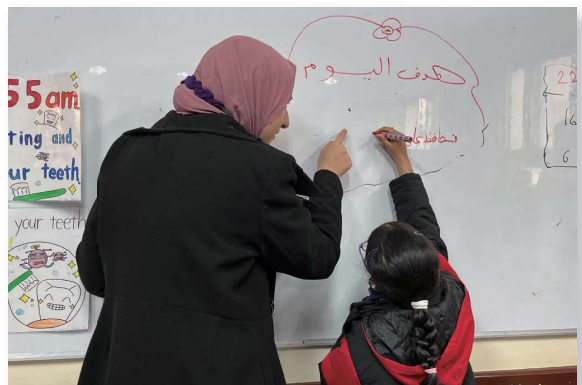
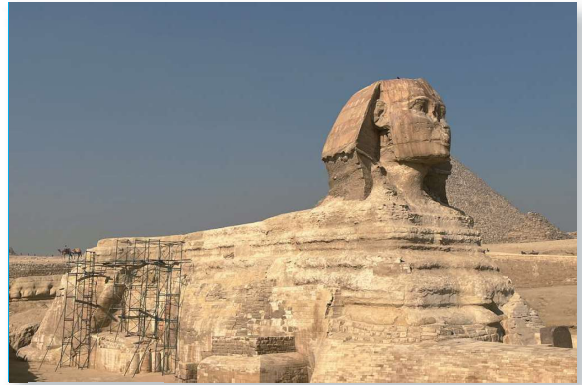
今後、私が更に力を注ぎたいのは人材育成である。未来社会を生きる上で、真のグローバル人材の育成は不可欠であり、その中でも国際社会の一員となる子供たちに必要な力は、①自分で決める力②自分の言葉で表現する力③他者と協働する力と考える。この力を育むためのひとつの取組として、子供と世界をつなげるきっかけ、対話を通じた気づき、自分の考えを表現する活動を取り入れた教育課程を協働的に編成していきたい。世界の食糧事情と連動した食品ロス、異常気象による自然災害や地球温暖化について考える機会など、その地域の特性と関連させていく。そして、子供たちが持っている力を伸ばすためにどんな経験を積ませるか、どんな人との関わりがより効果に繋がるか様々な方と対話を重ねたい。また、ピア・サポートやコーチングの要素を取り入れた活動も取り入れ、子供たちの心を育てていく。教育課程の中で計画的に発達段階に合わせた取組をすることで、相手の立場にたって考える思いやりが育まれ、協働的に活動する基盤がつけられると考える。

研修に参加することが決まった時、夢が叶った!とゴールにたどり着いたような気持ちになっていたが、参加後の今、新たなスタート地点に立っていることにワクワクが止まらない。子供たち一人ひとりが幸せを感じて生きていく世界を心の底から願い、私ができる小さな一歩を続けていきたい。

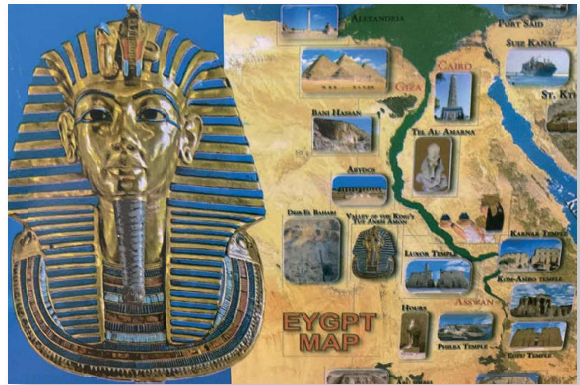
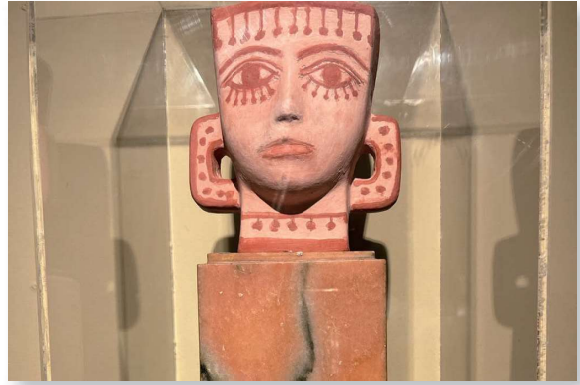
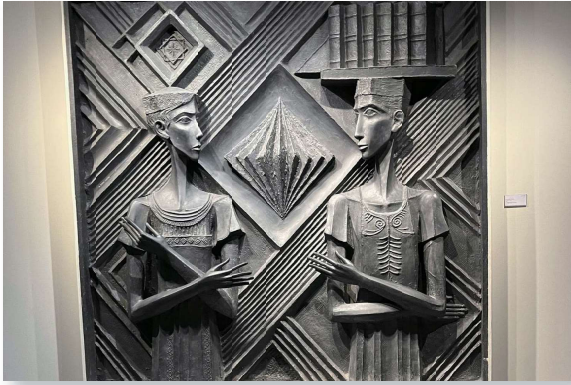
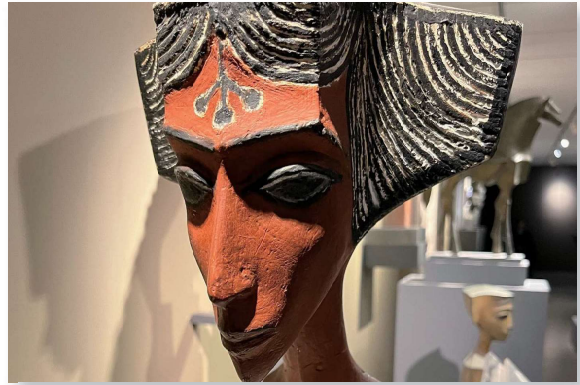
(授業資料)











氏名	所属	職名	担当業務
永洞 純一	札幌市立二条小学校	教頭	

1. ご自身がこの研修を通して探究したテーマについて、また、その探究から得た学びや気づきをお書きください。

探究テーマ：世界を知り、自分を振り返り、人のために活躍できる力の育成

気づき・学び：

- エジプトの宗教：イスラム教9割・キリスト教1割（空港内にブレイルーム、男女別のクワイエットルーム、アスワン地方に残っている親族婚）
- ナイル川とピラミッド遺跡の関係
- エジプトで活躍する協力隊員（公民館・小学校・小児科病棟）
- エジプトで進める社会教育→コミュニティ、SNS活用、日本語教育とアニメーター、通訳の夢
- 集う・つなぐ・学ぶ→人との出会い、協力を一つの文化に、人間関係
- 侍がスフィンクスの前で記念撮影（不平等貿易交渉後帰国途中）
- 人口構成の比較（日本とエジプト）、有償資金協力・南南協力、年間降水量51mm
- すべて大切なことは砂場で学ぶ、エジプトの未来
- エジプト・日本の比較（平均年齢・面積・地理・気候）

2. 1の学びや気づきは、本研修におけるどのような経験や体験から得られましたか。

- 通訳やガイドさんからの話
- 公民館・EJS・カイロ大学小児科病院で活動する協力隊員の方の話
- JICAエジプト事務所、教育省担当者からの説明
- 現地ランゲージスクール訪問
- ギザ観光・考古学博物館見学

3. 研修を通して、「今、この時代に、国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

同じ地球上で人々が暮らしていくために、すべての人々が関わっていくことが大切なSDGs。少しでも多くの人にその認識が必要であることを伝えていく必要がある。

4. 年度内から次年度の業務において、開発教育・国際理解教育推進のために自分が取り組みたいことについて、主な3つを挙げてください。(所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定など)

- エジプトに関わる国際理解教育(エジプトフォトランゲージ・海外協力隊の活動)
- エジプトに関わる参加型教材の作成・実践
- 児童を対象にした開発教育や校内研修での研修会報告

5. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか?主な3つを挙げてください。

- JICA北海道でのエジプト研修報告(参加型報告会)
- JICA北海道でのコーナー掲示(エジプトの観光地・訪問先・協力隊員の活躍)
- 所属する札幌国際理解研究会での研修報告

6. 本研修への参加を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容(報告会など)。その際、使用した資料があれば、添付をお願いいたします。

*下記資料参照(開発教育教材資料)

7. その他所感(研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか?どのような教育の場を作っていきたいか?など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。)

国際理解教育/開発教育とは、互いの文化や考え方を知ることによって違いを理解し、相手を尊重し、受け入れ、共に協力していく態度を育てる教育だと考えている。世界に目を向けると、さらに様々な人々がいて、多種多様な考えがあるということに気付き、それが逆に自分自身を知るきっかけとなる。

学習指導要領においては、総合的な学習の時間で扱うテーマ例として「国際理解」が扱われているが、外国語活動や英語として、国際理解教育が実践されている例も少なくない。カリキュラムが整備されていない、また、教科書や教材が十分でないため、実践が難しいという状況もある。教師自身が、まず国際理解教育/開発教育の大切さを再認識することが大切である。子どもたちが外国の方々と交流したり、開発教育など世界の現状や課題を自分事としてとらえられる体験的な活動を通して、異文化理解を進めていきたい。そのためには各教科

習においても国際理解に関わる単元を引き出し、国際理解に関わる研究協議会やJICAなどの機関を活用し、学習を推進していく必要がある。

SDGsへの取組も叫ばれて久しいが、併せて平和に関する教育の充実も含め、子どもたち自ら平和な社会の形成に参画していくことが望ましい。世界を知り、そして、今、自分の近くにいる周りの人たちと協力して高め合って生活できることが大切だと考えられる。こうした教育が行き届けば、学校からいじめや暴力はなくなり、平和な社会(学校)が築かれていくと考える。

この度の研修で得られた学びを各関係機関と協力し発信し、地域の国際理解教育・開発教育の推進につなげていきたい。

(開発教育教材資料)

1. 単元名(活動名)	エジプトを知ろう！	
2. 対象	小学校児童	
3. 教科領域との関連性	総合的な学習の時間	
4. カリキュラム開発の視点	A：多文化社会	文化理解・多文化共生
	B：グローバル社会	相互依存
	C：地球的課題	人権・環境
	D：未来への選択	市民意識・社会参加
5. 単元目標	エジプトに関するデータや写真から、自国と比較して、共通点や相違点に気づくとともに、エジプトに親しみを持ち、そこに住む子どもたちも同じように生活していることを実感することができる。 【関心・意欲】 ○エジプトの子どもたちの生活に関心・親しみをもつ。 ○エジプトの子どもたちの生活と自分たちの生活について考えようとする。 【技能・表現】 ○伝えたいことや考えたことを発表し、ワークシートに記入し、友達の考えもしっかり聞くことができる。 【知識・理解】 ○エジプトと日本の相違点だけでなく共通点にも気づき、つながりがあることに気づく。	
6. 単元について (教材観・単元設定の理由 ・開発教育の視点など)	外国に住む人々をより身近に感じられるよう、エジプトの同年代の子どもたちに焦点をあて、エジプトの子どもの生活と自分たちの生活の様子を比較する中で、違いや同じことに気づき、また、同じであっても違う次元の問題があるということに気づかせたい。また、クラスの友達と話し合いや交流、振り返りを通していく中で、自分自身のことを理解し、開発途上国に対する偏見や思い込みを持ってきたことにも気づかせたい。 授業内では、子どもたちの交流が活発となるように、グループ学習を基本とし、各時間において子どもたちに考えさせたいテーマを含む資料や写真(動画)を用いて、しっかり考えさせていきたい。また、そこからいろいろなことを感じ、誰でも意見を述べやすい雰囲気づくりにつとめ、お互いの考えを共有し、違った考えを持っていてもそれを認め、逆にそれが価値あることだとして考えていけるような雰囲気づくりをしていきたい。	

7. 授業展開 (写真選択の意図)	①フォトランゲージ(3枚の写真からストーリーを作る) 複数枚の写真からストーリーを作る活動を通して、エジプトの自然、文化、人々の生活についてのイメージを作る。 【テーマ：学校①】日本と同じような一斉授業の様子。先生が二人いることにも気づかせたい。塙に囲まれた学校。靴箱。一見、日本と同じに見えるが日本式の教育を取り入れていることを取り上げたい。 【テーマ：学校②】計算問題に取り組む子どもたち。学級会の様子、清掃活動があることにも気づかせたい。特活が進められていることを補足する。 【テーマ：建物】モスク、マクドナルドの看板、近代的な建物など街の様子を知る。 【テーマ：交通】道路が渋滞している様子、三輪バイク、大型バスなど日本との違いや同じところに気づかせたい。 【テーマ：マーケット】お土産物屋が並ぶ様子から世界有数の観光地であることに気づかせたい。 【テーマ：観光】ピラミッド、スフィンクス、ナイル川など観光地の様子。 【テーマ：ここはエジプト?】エジプトと言えば、砂漠の様子を思い浮かべるが、大きな建物、海、畑も見られる。 【テーマ：日本とのつながり】6年生にお願いし、プレゼントとした折り鶴をプレゼント。カイロで活躍する海外協力隊員。6年生が病気の予防プロジェクトとして作成したポスターをカイロ大学附属病院小児病棟にプレゼント。 ②インタビュークイズ 子どものインタビューをもとにした3択クイズを通して、エジプトの子どものたちの日常生活や学校生活の様子を知る。 ① 訪問した学校の校庭には、バレーボールネットが張られていた。大切にしているものは、勉強と家族と答えてくれた。 ② 将来のこと、試験のことが心配だと話していた。また、別な子は、自分の言ったことが変えられることが怖いとも話していた。 ③ 8人にインタビューを行ったが、4名が将来の夢は警察官と答えている。その他、サッカー選手、サイバーセキュリティ、メディア、演劇など。 ④ 夢は、サッカー選手。日本のようにユーチューバーという声は、一切なかった。 ③世界と日本の取り組み 世界的な取り組みであるSDGs(持続可能な開発目標)の項目と内容を資料で確認し、日本とエジプトの達成状況を比較する。 ※今後、SDGsを「自分ごと」として捉え、自分の暮らす地域、日本、世界の出来事を考えるきっかけとしていきたい。
8. 参考資料 (参考文献)	*「開発教育ハンドブック～参加型学習で世界を感じる」 BEAR 開発教育協会,2012 *『「生きる力」を育む 国際理解教育実践資料 JICA地球ひろば,2019 *スタディーツアーを生かした国際理解教育／開発教育教材集 石狩管内国際理解教育研究協議会,2009 *PRESS RELEASE : SUSTAINABLE DEVELOPMENT REPORT 2022 *ANN ニュース動画 「日本式小学校」中東に広がる…エジプトで51校

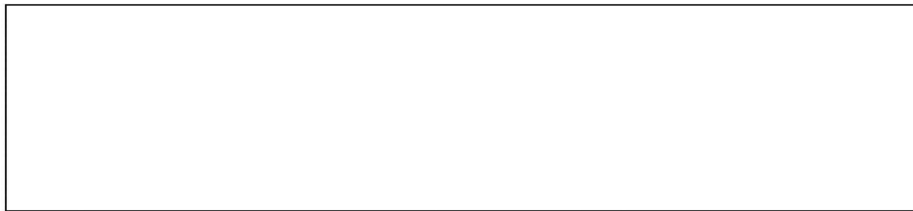
3枚の写真から物語を作ろう！

年 組 名前

エジプトの3枚の写真を見て、お話を作ってください。写真の中に写っている風景や物、人物などをよく見てそれらをできるだけお話の中に入れてください。また、写真から分かる人々の暮らしやエジプトの様子もお話の中に書きこんでください。

主人公はだれでも構いません。エジプトの人にするなら男性は、アリさん、女性、レイラさんにしましょう。

1枚目の写真



2枚目の写真



3枚目の写真



フォトランゲージ 使用写真

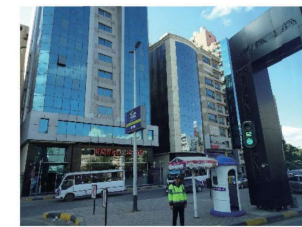
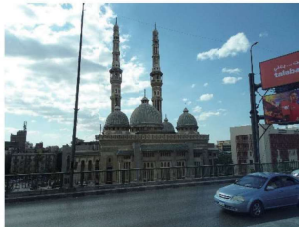
【テーマ：学校①】



【テーマ：学校②】



【テーマ：建物】



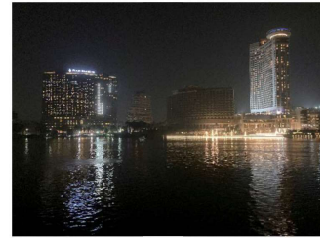
【テーマ：交通】



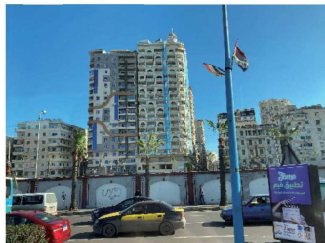
【テーマ：マーケット】



【テーマ：観光】



【テーマ：ここはエジプト?】

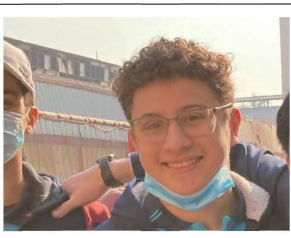


【テーマ：日本とのつながり】



インタビュークイズ

【エジプトの中学生のインタビュー】

	① ハッサンさん：17 歳の男の子です。この学校には、小学校から通っています。毎日とても楽しいです。学校では、バレーボールをして遊びます。ハッサンさんの大切にしているものは、何でしょう？ ア. 勉強 イ. 家族 ウ. スマホ
	② アハメドさん：17 歳の男の子です。学校は、とても楽しいです。友達もたくさんいます。ただ、一つ心配なこともあります。アハメドさんが心配していることは、何でしょう？ ア. 将来 イ. 家族 ウ. 部活
	③ アリさん：16 歳の男の子です。学校では、クラブ活動がとても楽しいです。アリさんの将来の夢は、何でしょう？ ア. 学校の先生 イ. 警察 ウ. 医者
	④ ラシャドさん（左側）：16 歳の男の子です。友達といろいろ話をするのが楽しいです。ラシャドさんの夢は何でしょう？ ア. サッカー選手 イ. ユーチューバー ウ. 弁護士

問 題	① ハッサンさん	② アハメドさん	③ アリさん	④ ラシャドさん
答 え				

比べてみよう！日本とエジプト SDGs

JAPAN

OECD Countries

▼ OVERALL PERFORMANCE

COUNTRY RANKING

JAPAN

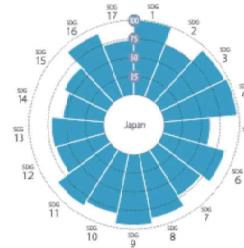
19 / 163

COUNTRY SCORE



REGIONAL AVERAGE: 77.1

▼ AVERAGE PERFORMANCE BY SDG



▼ SDG DASHBOARDS AND TRENDS



EGYPT, ARAB REPUBLIC OF

Middle East
and North Africa

▼ OVERALL PERFORMANCE

COUNTRY RANKING

EGYPT, ARAB
REPUBLIC OF

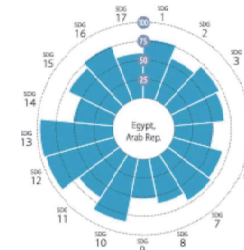
87 / 163

COUNTRY SCORE



REGIONAL AVERAGE: 68.7

▼ AVERAGE PERFORMANCE BY SDG



▼ SDG DASHBOARDS AND TRENDS



氏名	所属	職名	担当業務
竹田 洋	山形県川西町立大塚小学校	校長	学校経営全般

1. ご自身がこの研修を通して探究したテーマについて、また、その探究から得た学びや気づきをお書きください。

探究テーマ: ひろがる、ひろげる国際理解教育

気づき・学び:

エジプトにおける教育は、今まさに変革と発展を遂げている。また、国民や地域が一体となって未来に向けた経済・文化両面からの生活向上へ向けた取り組みが進んでいる。そこには、エジプトのおかれた地域としての歴史と、文化や宗教・地政学的な課題も感じられた。一方、子どもたちは決して恵まれたとは言えない生活環境にあっても、明るく・たくましく前向きに学習や生活に取り組む様子が見られた。また、エジプト日本学校 (EJS) における教育実践やE-JUSTにおけるの向学心あふれる学生の様子からも、一人一人の幸せを追求するという「ウェルビーイング」の考え方がこれからの世界的スタンダードであることを確認できた。一方、日本の教育はエジプトが求める先進性や優位性・有効性があるのか、またそのような教育理念がきちんと全国津々浦々まで行き渡っているのかといった疑問もわいてきた。まさに「学びに向かう人間性等」が指導の柱として取り入れられてきている昨今、日本がエジプトから学ぶことも多いのではないかと感じた。

2. 1の学びや気づきは、本研修におけるどのような経験や体験から得られましたか。

- ESJを現在の51校から100校へと増加していくことを官民あげて取り組んでいること。加えて特別活動を国内の全学校に取り入れていくという、規模の大きさとスピード感を、教育省担当者 (PMU1 Project Management Unit) とのセッションから実感することができた。
- 特別活動の取組 (掃除・手洗い・学級活動など) から、イスラム教を主体とした文化・生活環境や政策的な違いがありながらも、日本で実践されている民主的な考え方や協力して生活を作り上げていくスタイルの重視など、未来のエジプトを構築する上で必要と判断した内容で教育実践を進めていこうとする推進力を感じることができた。
- E-JUSTで学ぶ大学生の生き生きした様子を、学生との小グループによるセッションや学内見学から感じ取ることができた。特に、この大学・施設で学ぶことができることに対する誇りと、卒業後の自分の未来に大きな希望と意欲を持っている学生が多数いることは、個人や地域・国家を越えた発展的な可能性が大きく広がっていると思った。
- 研修の合間に見ることができたエジプトの生活環境 (住宅事情や交通事情) や経済状態 (マーケットの様子や観光地の治安等) の状況から、エジプト社会の抱える公共心や公德心への課題・民主主義意識の醸成などへの取組の必要性を感じることができた。

3. 研修を通して、「今、この時代に、国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

現在、ウクライナとロシアの間で戦争状態が続き、世界的な規模で安心・安全に関する問題や食糧や資源に関する不安が広がっている。加えて、3年目となるコロナウイルス感染症への対応は、国や地域を越えた対応が現在も続いている現状にある。このような、大きな課題があふれる現代社会において、互いの国や地域の現状を理解し、課題に協力・協調して対応していくことの重要性は高まるばかりと言える。一方、先進国と発展途上国の間には、少なからず経済的・歴史的・民族的な違いや格差が見え隠れしているのも事実である。解決するための要素として、それぞれの立場や現状を越えて相手を思いやる気持ちは大切な考え方になってくる。

未来を生きていく子どもたちにとって、この考え方を学び、発展的に新しい価値観を生み出していく「国際理解教育」「開発教育」は重要性を増すばかりである。また、それらを推進していくには、高い知見を有した教員が必要不可欠であり、適切に指導できる環境整備も重要であると考えられる。加えて、今回の研修で、コミュニケーションを取り合う手段としての英語教育の重要性を改めて感じた。エジプトの中学生・高校生の英語力の高さは日本に比べてかなり高いと感じた。指導方法や指導機会の充実など、系統立てた英語教育の充実についても考えさせられた。

4. 年度内から次年度の業務において、開発教育・国際理解教育推進のために自分が取り組みたいことについて、主な3つを挙げてください。(所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定など)

- 校内において児童に対する校長講話や、職員に対しては研修の機会を設けて情報共有・研修を進めていく。
- 県小学校外国語教育研究会や地区校長会において、また地区ICT教育推進委員会やなどの機会を通じて、国際理解教育・開発途上国の課題や多様な文化の理解促進等について情報発信や教員への指導を行う。
- 本校における国際理解教育に関する年間計画を見直し、総合的な学習や学級活動、児童会とも連携した実践的な学習ができるようにしていく。

5. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか？主な3つを挙げてください。

- パネルやポスターなどの掲示物を提供いただき、国際理解教育やSDGsの考え方に児童が触れる機会を提供いただく。
- 学校においていただきJICA事業(国際ボランティア等)のお話をさせていただく。
- 授業で、国際理解教育の内容にアドバイザーとして協力いただく。

6. 本研修への参加を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容(報告会など)。その際、使用した資料があれば、添付をお願いいたします。

1月6日の3学期始業式において、全校生に「エジプトについて学んでみよう」と題して簡単な講話を行った。1年生から6年生までと発達段階に幅があったため、講話の内容を中学年向けとして行ったが、児童からは「エジプトに行ってみたくなった」「もっといろんな国のことを勉強してみたい」などの感想があがった。

また、1月25日にはオンラインによる報告会「Tokkatsu-エジプトの未来を創る教育の挑戦に学ぶ」を本校の職員研修に位置づけ、参観視聴を行った。特に、講師の國學院大學教授・元文部科学省初等中等教育局視学官 杉田 洋氏による基調講演「エジプトの日本式教育TOKKATSUの現状と可能性」は、示唆に富む大変有意義な内容で、「特別活動に対する見方が変わった」「学校行事の重要性を改めて認識した」などの感想を教職員から聞くことができた。



7. その他所感(研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか?どのような教育の場を作っていきたいか?など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。)

今回「2022年度JICA教師海外研修(教育行政コース)」に参加してエジプトに向かい、改めて教育現場の努力と同時に、行政における後押しが世界共通で大切であることを認識した。特に、教育制度の改革や財政的な支援は、児童生徒のより良い教育を進めるうえで、国全体に広めていくスピード感と周知徹底ぶりに大きな力を及ぼしていることを見る事ができた。

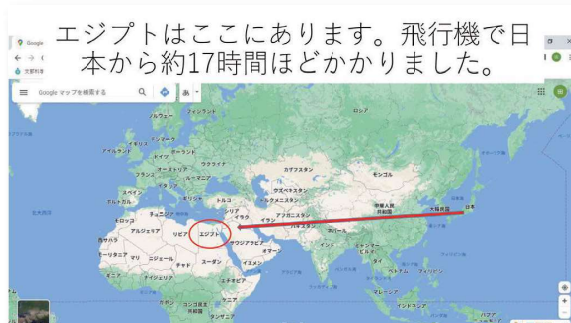
今後は、できるだけ若い教員・実践者に国際理解教育について学ぶ機会を提供していきたいと考える。おそろく、現在の教員不足や多忙を極める学校教育環境の中では、長期の研修や海外渡航等は難しいと思われるが、学校管理職として最大限の応援を行い若手教員・実践者のサポートを推進していきたいと思う。

最後に今回の派遣研修の機会をいただいた皆様・関係スタッフの方々に感謝申し上げます。

3学期 始業式

エジプトについて学んでみよう
2023. 1. 6

むずかしいことばがありますが、わからないことは先生にきいてください。



エジプトはここに 있습니다。飛行機で日本から約17時間ほどかかりました。

人口約1億人・ほとんどが砂漠・ピラミッドとスフィンクス、ミイラなどが有名です。



中東に位置する国で、日本のCDA（政府開発援助）が導入されています。



近代化が図られて、新首都の建設や経済・文化面での発展に向けて様々な取り組みが進められています。



便利な生活や快適な都市作りをめざして、インフラの整備や公共事業に伴う様々な工事が行われています。

課題も多くありそうです。決まりを守ることや、みんなで話し合うことです。



一人一人がゴミを自分で片づけることができれば、町がもっときれいになるように思っています。



交通ルールをみんなで守ったり、安全の意識が高まれば、交通事故は減っていくように思っています。

国づくりは教育が大切・学校でしっかり勉強しようと取り組んでいます。



日本の勉強のやり方を取り入れて、新しい学校を運営し始めました。



今までなかった、朝の会や当番活動を取り入れて、みんなが交代でリーダーになって活躍します。

国語（アラビア語）・算数・理科・英語のほかに、学級会や学校行事なども始めました。



国語・算数・英語などの教科の勉強は、日本と同じように学習しています。今までは先生の話を聞いて、言われた通りにする学習が多かったそうです。



最近では、グループ学習や話し合い・教え合いの学習が取り入れられ、協力して勉強を進めています。皆さんの学習スタイルと似ていますね。

世界中には様々な環境で生活している人がいます。私たちは世界の出来事を学び（国際理解）協力・連携・支援の心（思いやりの心）をしっかりと育てたいですね。



イスラム教という宗教やアラブの文化には、皆さんの知らないことが色々あるかもしれません。勉強してみてください。



図書室をみると日本の学校と比べて本が少ないように感じます。読書に対する習慣や考え方も日本との違いがあるかもしれません。

さあ3学期の始まりです

- ・新しいことを学びましょう。
- ・不思議だと思ったことを調べてみましょう。
- ・友だち、家族、地域の方に思いやりの心で接しましょう。
- ・元気に生活しましょう。

氏名	所属	職名	担当業務
新井 誠司	和洋九段女子中学校高等学校	高等学校教頭	教務・進路・入試広報・21世紀型教育推進等

1. ご自身がこの研修を通して探究したテーマについて、また、その探究から得た学びや気づきをお書きください。

探究テーマ: 学校外の人や組織とつながり続ける持続可能なシステムとは？

気づき・学び:

つながりを作り、つながり続けるために必要なものは「情熱（使命感）」と「ワクワク（楽しむこと）」であり、システムの前にマインドが大切だと実感した。まずは大人が情熱を持って「楽しむ」ことが大事で、その「ワクワク」を生徒たちが感じ取り、生徒が自走しはじめることで力は無限に増幅していく。そういう意味では、教員がワクワクを感じられる学校外の場に出ていくこと、そして管理職としては「出ていきやすい環境を整えること」が重要である。

エジプトに古くからあることばに「Life is full of give and take.」というものがあるそうだ。恒常的につながりを持ち続けるためには「Win-Win」の関係・「Win-Win-Win」の関係を作っていくのがよい。どちらかがどちらかを一方的に支援する、何かをしてあげる、という関係では長続きしない。また、無理をして自分だけで何とかしようとするのではなく、お願いしたい人に情熱を持って伝えれば協力してもらえることが多い。そして「つながり続けたい」と思ってくれる人が増えていけば、より大きな力となっていく。

周りとは協力しつつ、つながりながら互いにとってのプラスになる関係作りを行い、良好な関係の中で生徒たちの成長を促していけるシステムを構築できると良いと考える。

2. 1の学びや気づきは、本研修におけるどのような経験や体験から得られましたか。

エジプトを訪問して初めての訪問先であったター公民館のギドさん、バサントさんなどのお話の中から得られた。ギドさんの理念…「Gather・Connect・Learn」＋「Cooperate・Act」＝「学びを（共に進む人々と協働しながら）形作り、実現していくこと」に多くの方が賛同し、その取組に使命感を持っている様子、また、各々の中に「好き・楽しい」が存在し、ター公民館がそこに関わる人々にとって居心地の良い場所となっていることも伝わってきた。

そして、自分1人で何とかしようというのではなく、定期的に協力してくれる人々、それ以外にも学生や大学の先生に協力を仰ぎ、人同士がつながるハブ的役割をター公民館が持っているように感じられた。そして、ター公民館を起点とした大きな力が生まれていた。これは学校にも持ち込める素敵な形であり、本校が今取り組んでいる「Connected School構想」にも通ずるところがある。

3. 研修を通して、「今、この時代に、国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

世界中で様々な問題が起こりつづけ、私たちはそれらの情報をニュースやワイドショーを通して受け取っている。しかし、日頃、私たち大人はそれを「どこかの誰かに起こっている他人事」として受け止めることが多く、同情はするものの刹那的な感情とともに消費しつづけているように感じる。そこには「真実を知る」ということが抜け落ち、「その場限りのセンセーショナルな情報」を受け取り、忘却するといういびつな構造が存在している。

国際理解教育・開発教育はその土地にある問題だけでなく、住んでいる人の考えや生活そのものに触れることができ、更に「生の情報」を得ることで、そこに起こっている問題をより自分ごととして捉えることが可能になると考えられる。「真実の姿」を若く曇りなき眼を持っている時に受け取れることはとても重要で、「真実を見る目」を養う上でこれらの教育を若いうちに受けることは、将来的にも重要な役割を果たしているといえる。

また、若者たちが活躍する未来は、これまで以上に人とのつながりのあり方が多様になり、海外の人々との関わりも増えていくであろう。当然、各々が持つ文化や宗教、生活習慣などの価値観も多様になり、自分の中にある「当たり前」が通用しなくなるし、今まで以上に柔軟性が求められていくであろう。将来そのような多様性あふれる世界で生きていく若者たちが、国際理解教育・開発教育を受けることにより、柔軟性や寛容性など自分とは違う価値観を受容する「心の器」を大きくしていくことが可能になると期待できる。

時間が有限である以上、すべての物事を体験することはできない。そのような中で国際理解教育・開発教育は非常に有効なものとなる。「生の体験」を大切にしながら、赴くことができずとも可能な限り現地の方の声に耳を傾ける機会を設けること、それも叶わない場合、JICAを通じて渡航された方々をはじめとした「現地で見聞きした生の情報を伝えてくれる方」（今回お話をうかがったカイロ大学小児病院の看護師で海外協力隊の加藤なつみ氏の話は、生徒が聞いても心に響くであろう内容であった）からお話を聞く機会を作るのが良いと考える。

また、実際に体験をする際に「学校で」行うということも大切な部分である。学校（またはその関係する組織）でプログラムされたものであれば安全・安心を担保した上で各地の現状を知ることができるし、自分1人では知ることのできなかつた、また、観光旅行に行くだけではたどり着くことのできない「真実」に触れることもできる。

以上の点から、これからの時代に、学校教育において国際理解教育・開発教育を推進していくことは非常に有益であり、生の情報に多く出あえるチャンスを提供できるようにすることが肝要である。

4. 年度内から次年度の業務において、開発教育・国際理解教育推進のために自分が取り組みたいことについて、主な3つを挙げてください。(所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定など)

- 2022年度春または2023年度夏に行われる本校教職員研修において「特別活動」について考える時間を取り、その中でエジプトの事例を紹介する時間を設ける。
- 2022年度の春期講習でエジプトを題材にしたPBL型授業を行う。
- ター公民館のバサントさんと協力し、本校生徒とエジプトで日本語を学んでいる学生さんのオンライン交流会を行う。(時差もあるので、実施時期も含め要検討である)

5. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか?主な3つを挙げてください。

- 今回、北海道から参加された杉島 亜紀氏の提案を受け、オンライン勉強会／報告会を皆で協力しながら実施する。(協力できるメンバーはブレイクアウトセッションのファシリテーターを中心に行う)。
- 他校の生徒も巻き込んでエジプトの学校との交流会を行う。(英語が通じる学校とは英語で。難しい場合はアラビア語の通訳をお願いして実施したい)
- 長野から参加の高野 芙美氏と協力して発表会が実施できると良いと考えている。さらに、横浜から参加した住田 昌治氏、櫻木 萌季氏をはじめ、他地域の方ともセッションを行っていききたい。実施の際にはJICA東京やJICA横浜の皆様にもご協力いただきながら、エジプト以外の国の情報もご提示いただき、比較しながら進められると考える材料が増えてよいのではないかと思います。まずは皆さんとプレストしていきたい。

6. 本研修への参加を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容(報告会など)。その際、使用した資料があれば、添付をお願いいたします。

- 学内外での報告会は行えていないが、2022年度春または2023年度夏の教職員研修で今後の教育を考える上での材料として提供する予定である。
- 国際理解教育の実践として、2022年度の春期講習でエジプトに関するワークショップを実施する予定である。
- 報告会とは違うが、本校の2023年度中学入試(「PBL入試【総合型】」)の導入部に現地で見聞してきた内容を盛り込んだので、それを添付する。

7. その他所感(研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか?どのような教育の場を作っていきたいか?など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。)

【これからのビジョン・育てたい生徒像】

今回、私がエジプトで体験してきたこともそうであったように、「ホンモノ」に触れることによって生まれる価値の大きさを考えた時、それに勝るものはない。生徒たちにもぜひ「ホンモノ」に触れる機会をできるだけたくさん作ってほしいと願っている。

まずは今後も私自身が常に「行動者」でありつづけ、それを見た生徒たちが「学校の外にも楽しい世界がありそうだ」「大人が楽しんでいるのだから私たちも楽しめる何かを探しにいきたい」と思えるようなワクワク感を伝えていきたいと考えている。

そして、外に出て様々な体験をしてきた生徒たちが集い、体験から得た情報や思いを共有し「自分は何をすべきか」を考えられるようになってほしい。そして、最終的には「自分の軸」を持ち、「行ったことのないところに住む人の心に寄り添える想像力」を持った心豊かな人物になってもらいたい。

体験できること、行ける場所、関われる人には限界がある。そのような中でいつの時代にも大切なのは「想像する力」であろう。世界中にある問題を自分ごととして捉え、「世界の中にある自分」「問題の中にある自分」を実感しつつ、起こっている問題に対して「自分が起点になっているかもしれない」という意識を持って行動できるようになれば、今ある問題を少しずつ改善していくきっかけになるはずだ。

学校のプログラムも「良質な体験」「考えるヒント」「複合的なつながり」「豊かな想像力」を意識しつつデザインし、生徒たちの自由度も高めながら構成していきたい。

【日本の教育を見直す】

今回、日本式教育を取り入れているエジプトに渡航し、視察を行う中で、外から日本の教育を見つめ直すチャンスを得たので、それについても記しておきたい。

Tokatsuモデルとしてエジプト流にアレンジされている取組ではあるが、誇りを持って日直に取り組み、クラスをリードする役割を担っている小学生の姿を見るにつけ、日本の教育の中では「当たり前」のものとして取り入れられている日直や掃除、学級会などの取組自体に子どもたちの力を育むための要素がたくさんあることに気づかされた。しかしながら、日本国内においては一部形骸化し、「やらされていること」「嫌々行っていること」になっているようにも感じられる。

例えば、本校ではクラスのまとめ役として学級委員という役割があり、年度の初めにクラス内の選挙によって2名が選ばれ、各授業での号令やHR・SHRでの司会進行などを行っている。そのため、残念ながら日直はホワイトボードを消したり日直日誌を書いたりするのがもっぱらで、クラスの中でリーダー役として前面に出る役割を担うことはない。そのため、日直は「たまにまわってくる面倒な仕事」となっている。しかし、輪番制で全員がリーダー的な役割を体験することは本人の成長に加えて、そこからの気づきから生まれる集団内での配慮や協力にもつながっていきそうである。

委員会や行事の意味づけなど「当たり前」に行っていたことを見直し、意義を再確認することで「意味づけられた役割を全うする」という生徒のやりがいを生み出すことができると考えている。

2023年度 PBL入試(総合型)

令和5年2月1日

和洋九段女子中学校

集中タイム(2分)

- 背すじをのばしましょう
- おなかの力を使って、鼻からゆっくり息をすいましょう
- おなかの力を使って、鼻からゆっくり息をはききましょう
- 「鼻から出入りする息」に集中しましょう

「今」にすべての気持ちを向けましょう

今日の目標

- 1、いっしょにいるのは「なかま」
「PBL入試」を思いっきり楽しもう!
- 2、帰ってからご家族と今日の内容について話し合おう!



自己紹介タイム(5分)

- 1、呼ばれたい名前(名札に書きましょう)
- 2、今日の目標/今の気持ち

☆発表を終えたら、みんなで「はく手」をしよう!
☆話している人の方を向いて話を聞こう!

クイズタイム

とつ然ですが、
私は年末ある国に行ってきました!

クイズタイム

写真を見て、
国名を考えてください!





答え

エジプト



検さくと発表の練習をしよう(10分)

☆タブレットを使って「エジプト」について調べてみよう

◎検さくキーワード「エジプト ○○」

→○○の部分は自由です!

【検さくと発表の練習をしよう】

エジプトにも「困っていること」がある

ギドさん

【こまっていること① 住民の場合】

ノラ犬・ノラねこが多く、
ふんなどで町がよごれてしまう!

☆「自分でできること」を考えよう／おともだちに伝えよう

では、ここから本題です

小学校の先生→

エジプトにも「こまっていること」がある

【こまっていること② 学校の先生の場合】

生徒たちは新しいものが好きだが、
伝統的なことにも目を向けてもらいたい



日本でも同じ？

こどもたちは新しいものを好むが
伝統的なものも大切にしてもらいたい

今日のトリガークエスチョン

「あなたが大切にしたい日本の伝統文化」を
最新の技術を使って
持続可能な(ずっと続けていける)ものにしよう

PBL入試の流れ(ここから約80分)

- 1、自分で意見を作ろう(20分)
- 2、グループで発表しよう(12分)
- 3、グループで1番の意見をえらぼう(8分)
- 《休けい》(10分)
- 4、協力してグループの意見をよりよくしよう(20分)
- 5、みんなの前で発表しよう(10分)

1、自分の意見を作ろう(20分)

- ・タブレットを使って情報を集めよう
- ・複数の中から、自分の意見を決めよう
- ・必ず「～だから〇〇」というように理由を
できるだけたくさん考えよう

1、自分の意見を作ろう(20分)

「あなたが大切にしたい日本の伝統文化」を
最新の技術を使って持続可能な(ずっと続けていける)ものにしよう

- ・タブレットを使って情報を集めよう
- ・複数の中から、自分の意見を決めよう
- ・必ず「～だから〇〇」というように理由をできるだけ
たくさん考えよう

1、自分の意見を作ろう(20分)

「あなたが大切にしたい日本の伝統文化」を
最新の技術を使って持続可能な(ずっと続けていける)ものにしよう

- ・「あなたが大切にしたい日本の伝統文化」は何？
なくなるとしたら理由は？
- ・どんな技術で持続可能にする？
- ・「そんなの無理だよ!」な内容でも、理由がしっかりしていれば
むしろプラス!
- ・「自分も関われる具体的な内容」を考えよう。

2、グループ内で発表しよう(12分)

- できるだけ大きな声で、ゆっくり発表しよう
- 原こうから少し目をはなして聞いている人の方を向こう
- ☆発表を終えたら、みんなで「はく手」をしよう!
- ☆聞きながらうなずくことも大切!
- ☆お友だちの意見の「大事なところ」をメモしておこう!

3、グループで意見を1つ選ぼう(8分)

- 相手のよいところを理由を示して伝え合おう
- だれの発表が一番よいか多数決で決めよう
- 同じ票になったら、もう一度意見を出し合おう

《休けい》

- 休み時間なので、飲み物を飲んでもOKです!

4、グループの意見をよりよくしよう(20分)

- 発表原こうを作る人
- 付け加える理由や具体例を調べる人 など、役わりを分たんして、自分たちの意見をよりよいものにしていこう

5、全体の前で発表しよう(10分)

- できる限り原こうから目をはなして、聞いている人の方をたくさん見て話そう
- みんなになっ得してもらえよう堂々と発表しよう
- ☆発表を終えたら、みんなで「はく手」をしよう!

2023年度 PBL入試(総合型)

家に帰ったら、今日の内容について
ご家族と話し合ってみてください!

みなさん、よくがんばりました!

令和5年 2月1日 和洋九段女子中学校

氏名	所属	職名	担当業務
櫻木 萌季	神奈川県立横浜国際高等学校	教諭	国際バカロレア・交通安全・生徒指導・文化祭等

1. ご自身がこの研修を通して探究したテーマについて、また、その探究から得た学びや気づきをお書きください。

探究テーマ：「行動すること」を目標にした授業展開

気づき・学び：

- ①開発教育の内容を海外修学旅行や姉妹校交流の既存の枠組みを上手く活用して取り入れていきたいと思った。
- ②日本でSDGsをテーマにした授業を実践しているとき、生徒がまだ知らない行動の方法やクリエイティブな行動の方法を求めてきたが、エジプトについていえば日本のよくある手法であるポイ捨てをしないことやビーチクリーン等をそのまま紹介し、普及啓発に努めることでも十分意義があると思った。
- ③地球温暖化を食い止めることができるのかどうか。

2. 1の学びや気づきは、本研修におけるどのような経験や体験から得られましたか

- ①空気、交通状況、トイレ、お金を要求してくる子ども等授業では伝えきれないリアルが現地にはあった。しかし、どんなに素晴らしいエジプトの授業をしても、この1週間のエジプト現場研修にはかなわない。
- ②街中のあちこちにゴミが散乱していた。バスの車窓からは直接見るができなかったが、帰国後調べてみたところ、アレクサンドリアの海岸線はゴミだらけであった。
- ③カイロ界隈の交通量のあまりの多さを見て。

3. 研修を通して、「今、この時代に、国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

グローバル化が進み、世界中の人達とコミュニケーションをとるには英語力が重要である。このことは言うまでもないことであるが、英語が世界共通語であることを痛感した研修だった。

英語が母国語でないという点では日本とエジプトは共通するが、私の想像以上にエジプト人は英語ができた。研修の最初のター公民館で「なぜ英語が話せるのか？」と質問すると、「学校で勉強した」と返答された。日本でも中学・高校と英語の勉強をしてきたが日本人の多くは話せない。その後、エジプト日本学校(EJS)を視察してみると、英語・数学・理科の授業はオールイングリッシュで授業が行われており、Sara Taqy-Allah Experimental Language Schoolでは全ての授業がオールイングリッシュで行われていると伺った。日本とシステムが違った。

今回の研修では通訳や英語の教員がいたこと、またエジプト側に日本語が流暢な方が多かったので救われた部分がある。しかし、通訳抜きで英語とアラビア語のみしか通じないような状況であれば、私が訪問先で知りたい情報を知り得ることはできなかったし、エジプトの人達とつながりをつくることもできなかっただろう。

私の主観であるが、日本の国際理解教育は、「外国につながりがある人が日本国内に増えてきて彼らとどのよ

うに共存していくか」という国内の多文化共生の部分に重きがおかれているように感じている。一方で、グローバルな世の中になり、将来的に子ども達が就学や仕事等で海外へ行く機会がある。そのようなとき、異国の地で子ども達は臆することなく異文化の中に溶け込んでいけるだろうか。生徒の語学力を高めることや異文化の懐に入っていく術を身に付けていく国際理解教育も重要だと感じた研修だった。

4. 年度内から次年度の業務において、開発教育・国際理解教育推進のために自分が取り組みたいことについて、主な3つを挙げてください。(所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定など)

- 地理の授業でエジプトでの体験を報告することはもとより、エジプトでの経験をもとにしたワークショップを作り、披露したい。
- 次年度のSDGs同好会の活動を、最初の数ヶ月はインプット（SDGsについて理解を深める）、残りはアウトプット（目標を1つ選び、その目標の達成に向けたアクションを起こす）という形にし、同好会として会員全員の足並みを揃えた活動とする。また、同好会から部活動への昇格を目指す。
- 他校の「SDGs部」「SDGs同好会」のような部活または同好会と交流をはかる。(2023年2月5日(日)に神奈川県立横浜水取沢高等学校のボランティア部と交流会を実施した。)

5. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか?主な3つを挙げてください。

- JICA横浜で本研修を踏まえた報告会や研修会等を実施する。
- 本研修の参加者の1人である新井 誠司先生を講師として横浜国際高校にお招きし、SDGs同好会の部員に「2030SDGsゲーム」を体験してもらう。
- 2022年の3月まで教育委員会の生涯学習課という部署に在籍していた。生涯学習課では、公民館担当者コースという公民館職員向けの研修を毎年実施している。ター公民館の事例は日本の公民館を考える上でとても良い題材だと思うので、南信乃介氏を講師候補として古巣に働きかけてみたい。(実際に大東文化大学の社会教育の講座で南信乃介氏が講師を勤めていた。)

6. 本研修への参加を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容(報告会など)。その際、使用した資料があれば、添付をお願いいたします。

- 1月10日(火) 年明け最初の地理総合の授業で、エジプトでの海外研修の報告をした。こちらの話を一方的に聞くだけだと生徒は退屈してしまうので、クイズ形式にし、クイズの点数の高い生徒数名にエジプトのおみやげをプレゼントした。
 - 1月20日(金) のSDGs同好会の放課後の活動で、エジプト海外研修の報告をした。(報告内容は地理総合とほぼ同様である。)
- *生徒への報告は、地理の教科書と関連した物見遊山的な内容の報告となった。

7. その他所感(研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか?どのような教育の場を作っていきたいか?など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。)

高等学校においては、教員自身に国際理解教育や開発教育を推進したいという想いに関わらず、教員の専門教科・専門科目や学校の特色により、国際理解教育と開発教育の推進のしやすさは左右される。教員の専門教科が地理歴史や英語であったり、勤務校がグローバル教育やSDGs等の研究校であったりすれば、推進しやすい環境である。一方で、教員の専門教科が数学や体育であったり、勤務校がICTや理数教育の推進校等であったりすれば、積極的に推進していくには難しい環境である。

そこで、教員自身の専門教科や学校の特色にとらわれない推進の1つの方法が「SDGs部」「SDGs同好会」のような部活または同好会を設立し、顧問になることである。主な活動内容は、SDGsの研究、SDGsの普及啓発、SDGsの達成に寄与するために行動することである。

設立の利点は主に4点ある。1点目は、教員自身の教科や学校の特色にとらわれないことである。2点目は、学習指導要領に縛られることなく教員個人の裁量でできることである。3点目は、授業以上に多くの時間が使えることである。4点目は、生徒とともに行動できることである。

設立の欠点は、主に3点ある。1点目は、教員の業務量が増えることである。活動計画の組み立て、前例がない業務、生徒のプロジェクトのサポート等、業務は多岐に渡る。横浜国際高校SDGs同好会の顧問は現在2名であるが、多くのプロジェクトチームがあり、またプロジェクトチームとは別に単発のイベントやフォーラムに参加することもあるので、顧問2人で回していくのは厳しい現状がある。先日交流した横浜氷取沢高校のボランティア部の顧問の先生からも同様の話を伺った。横浜氷取沢高校のボランティア部の部員数は50人以上である。ワンマンで部活動を運営しており、同時多発的にプロジェクトチームが動くため、膨大な業務量であると感じた。2点目は、他の教員から賛同を得ることが難しいことである。新たに「SDGs部」「SDGs同好会」のような部活または同好会を設立すれば、こちらに予算も顧問も一部割かれるため、既存の部活動の予算と顧問の定数が減ることになる。快く思わない教諭は一定数おり、少なからず批判を受ける覚悟をする必要がある。3点目は、公立学校であれば人事異動があるので、熱意のある顧問がいなくなれば途端に活動が沈静化することである。

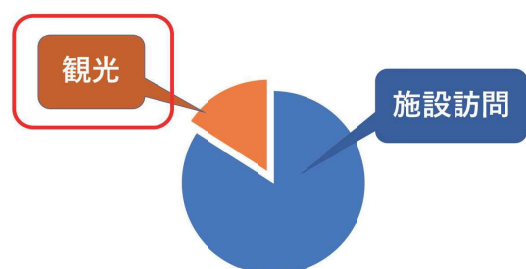
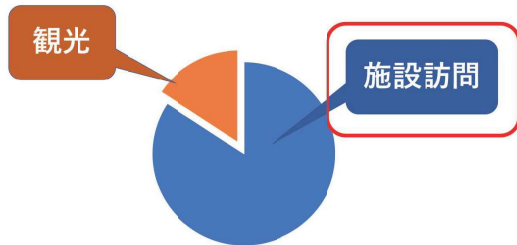
「SDGs部」「SDGs同好会」のような部活または同好会は全国的にはまだまだ少数のため、私は他の教諭にはない稀有な経験をしていることになる。「SDGs同好会」での経験を中学校や高校の教諭等に上述した利点と欠点を含めて発信し、新しい国際理解教育・開発教育の推進のあり方を提示していきたい。

السلام عليكم



12月23日～30日 エジプト







エジプトクイズ



Q1 エジプトの通貨は？

- ☒ ア エジプト・ポンド
☐ イ エジプト・リアル
☐ ウ エジプト・ドル



*実物を回します

Q2 エジプトの人口は？

- ☐ ア 約6000万人 ☐ イ 約8000万人
☒ ウ 約1億人 ☐ エ 約1億2000万人



Q3 エジプトに日本でいう道路交通法のようなものはある？

- ☒ ア ある ☐ イ ない

Q4 ここはどこでしょう？





Q 5 エジプトのムスリムは厳格？

ア 厳格である

イ 厳格ではない



祝!初!!



ハンハリーリ市場



Q 6 この服(ガラベヤー)は最初120ドルといわれたが、最終的にいくらで購入できた？

ア 1050エジプトポンド

イ 850エジプトポンド

ウ 650エジプトポンド

エ 450エジプトポンド



・20USドル→2643.6円
*1ドル = 132.18円

・450エジプトポンド→**2151円**
*1エジプトポンド = 4.78円

Q 7 最近エジプトに来訪した都道府県のリーダーは？

ア 吉村洋文大阪府知事

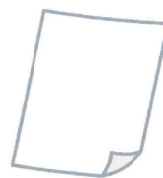
イ 黒岩祐二神奈川県知事

ウ 小池百合子東京都知事

Q 8 これはみんなも知ってる英単語の語源になったもの。この英単語は何？



paperの語源



パピルス



*実物を回します

Q 9 物売りがやってきた。

ア 欲しいものなら
買った方がいい

イ 欲しいものでも
買わない方がいい



この商品の値段を比較してみよう



エジプト考古学博物館

↓
1枚で20エジプトポンド



物売り

↓
12枚で20エジプトポンド



Q 10 櫻木Tは20分のラクダ体験をいくらでできた？

ア 10USドル

イ 20USドル

ウ 30USドル

エ 40USドル



【 エジプトで学んだこと① 】

- 行く前エジプト地理の教員としてまだ来訪したことのない国について、自分の先入観や偏見で説明してやらないか。
- 生徒たちが海外へ行ったときに異文化の中で生きていける国際理解教育の必要性

【 エジプトで学んだこと② 】

- 地球温暖化を食い止めることができるか。
- SDGsをテーマにした授業を実践しているとき、生徒がまだ知らない行動の方法やクリエイティブな行動の方法を求めてきたが、エジプトでは日本のよくある手法をそのまま紹介しても十分効果があると思う。

ご静聴ありがとうございました！



氏名	所属	職名	担当業務
住田 昌治	学校法人 湘南学園	学園長・常任理事	

1. ご自身がこの研修を通して探究したテーマについて、また、その探究から得た学びや気づきをお書きください。

探究テーマ：教育における不易と流行

どの国にも、どの地域にも歴史・文化・風土・環境等の違いがあり、その土壌に根付いた教育がある。何を守り、何を手放すのか？何を続け、何を变えるのか？そんなことを考えながら全国を回っている。さて、エジプトではどうだろう。地球上で初めて人類が誕生し、日本よりもはるかに長い歴史を持つ国に、日本式教育が受け入れられるのだろうか？そして、それは、本当に必要なことなんだろうか？

気づき・学び：

- エジプトが「トッカツ」に求めているのは「人格の形成・協調性・協力・自律性・思いやり」だということ。それが日本の良さであり、教育の目的でもあることを再確認した。
- 教員間のコミュニケーション・保護所や地域との連携はできている。
- 蔵書の数でその学校の力が分かると言われている。国も同じかもしれない。エジプトの底力は間違いなく歴史と文化にある。(新アレキサンドリア図書館より)
- 無秩序の中の秩序は日本にはない文化。これがエジプトらしさであり、文化。
- エジプトの未来を創る教育は、エジプトに埋まっている。
- イスラムの教えをベースにした日本式教育でなければ、エジプトで受け入れられない。それは、どこの国でも同じで、日本の教育で教育改革が現場に浸透しないのはそのため。
- 教育に対する考えや哲学の違いがある。どれが正しいか正しくないかではなく、どの方法を選ぶか。「トッカツ」がエジプトの考え方に合った方法なのか？それを吟味する判断材料は少ない。
- 従来のエジプトの教育にもたくさん良い部分があるのだと思う。まず足元を見る必要がある。どんな子どもを育てたいのか。どんな社会をつくっていききたいのか。どうなると幸せなのか。国からではなく、国民から意識を変えていくことが変化は早い。そういう意味では、ター公民館の活動を全国展開していくことが早道かも知れない。
- テーマとは直結しないが、「大量生産、大量廃棄」に加担してしまったことへ猛省している。

2. 1の学びや気づきは、本研修におけるどのような経験や体験から得られましたか。

- 訪問各所における説明
- 訪問各所における意見交換・子供の反応や言葉
- 施設見学や町の様子、人とのかわりから感じたこと

3. 研修を通して、「今、この時代に、国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

世界がSDGs達成を目指しているときに、世界の国々ではどのように意識されているのか知ることは大切なことだ。持続可能な社会づくりは、すべての国が目指していることだと思うが、その考え方やアプローチは違うと思う。そもそも、自国優先主義や利害関係の存在、価値観の相違などにより、持続不可能性が益々進展してしまう可能性も高い。そんな中で、国際理解教育や開発教育、国際交流や国際協力の果たす役割は大きい。今後、急激な人口減少・少子高齢化の中で海外からの労働力に頼る場面も多くなる。異質な他者や多様な考え方は海外で知ることではなく、国内で知ること増えてくる。そんな中で、画一的な考え方やお仕着せの方法は様々な問題を引き起こすことになる。

4. 年度内から次年度の業務において、開発教育・国際理解教育推進のために自分が取り組みたいことについて、主な3つを挙げてください。(所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定など)

● 海外の学校や教師との交流推進

海外研修の実施(小・中・高)、姉妹校との交流再開、海外とオンラインでの交流授業

● 全国での講演で紹介(1月11日には北海道の藤女子大での講義で取り上げる予定) 学内では新年顔合わせ、全学教研など、全学教職員が集まる場での情報提供、授業での紹介

● ユネスコセクシュアリティ教育の推進

神奈川県ユネスコスクールネットワークでの取り組み、湘南学園でのジェンダーフリー教育

5. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか?主な3つを挙げてください。

● 何よりも「百聞は一見に如かず」ですから、海外への教職員派遣について広報し、推進する。また、協力隊の年齢上限を周知する。(69歳までだと知っていたら、参加する人はいると思う。)

● 協力隊参加経験者の学校現場での活躍支援。協力隊参加経験者が埋もれていたり、変にプライドを持って浮いていたりすることがある。経験を生かして正しく活躍してもらえるよう支援する。経験者のコミュニティが閉じないようにオープンにする。

● エジプトからの視察や研修に協力する。(エジプトに限らないが、多くの自治体や学校が受け皿になるといい。日本と言っても様々なので、日本式教育も定まったものはない。)

6. 本研修への参加を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容(報告会など)。その際、使用した資料があれば、添付をお願いいたします。

- ① 1/6 神戸市教頭会研修会でエジプトの日本式教育について紹介
- ② 1/7 湘南学園「新年の集い」でエジプト研修について報告 自校の教育について振り返る
- ③ 1/10 北海道の大学向けのオンライン講義の中でエジプトの日本式教育について紹介
- ④ 1/18 埼玉県所沢市ESD調査研究協議会でエジプトの日本式教育について紹介
- ⑤ 1/19 湘南学園全学食育推進委員会にてエジプトのトッカツと食育について紹介
- ⑥ 1/20 横浜市立幸ヶ谷小学校6年生へのSDGs授業の中でエジプトの生活や教育について紹介
- ⑦ 1/21 高知教育研究会でエジプト研修について紹介
- ⑧ 1/26 静岡県校長会冬季研修会でエジプトの日本式教育について紹介
- ⑨ 1/27 神戸市事務職員研修会でエジプト研修について紹介
- ⑩ 1/30 熊本市校長会研修でエジプトの日本式教育について紹介

湘南学園においては、全学教職員対象に研修の紹介、エジプトの社会、文化、歴史、風土、教育などについて紹介し、日本の教育の素晴らしさを伝えるとともに、自校の教育を振り返り、大切にしたいことをしっかり見つけて共有することを伝えた。また、海外の教育ばかりに目を向けて「出羽守」になることなく、また「隣の芝生は青い」と言っていないで「自分の庭の芝生を青くする」ことが大切だと話した。さらに、それぞれの国に歴史と風土、文化に根差した教育があるように、それぞれの学校にも脈々とつながっている教育がある。それを大切にしつつ、今の時代に活用してさらに発展していくようにすることがこれから必要な教育改革だと締めくくった。

外部での講演や研修、授業においては、日本式教育を取り入れているエジプトの様子と今後の発展について考えを伝え、日本では特活をどのように扱っているのか問うようにしてきた。日本の教育の良さを見直すことの必要性を伝えたが、反応はあまりなかった。私もそうだったが、「百聞は一見に如かず」話を聞くだけではピンと来ないのは理解できる。今後、多くの教育関係者が海外に目を向けて、海外研修に出かける教員が増えていくことが必要なのだと思う。海外研修によって、何を学び、何を考えたかを伝えるより、何を感じ、どのような自己変容があったのかを語ることが必要なのだと思う。

7. その他所感(研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか?どのような教育の場を作っていきたいか?など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。)

海外に行くと、なぜか自分の行動が変わる。人の目を気にしないようになる。これまでも、何度か海外に行き、その国の空気を吸い、様々なものに触れ、人に会い、コミュニケーションをとり、新たな経験をして新たな価値観を得たことによって、行動に移すスピードが上がりました。価値観は経験によってつくられます。日々、変わらぬ環境で変わらぬ経験を続けていては、新たな価値観はつくられません。また、新たな価値観に出会うことも少なくなります。

今後も、海外研修があれば積極的に参加したいと思うし、教職員にもチャンスがあれば参加できるよう応援したいと思う。

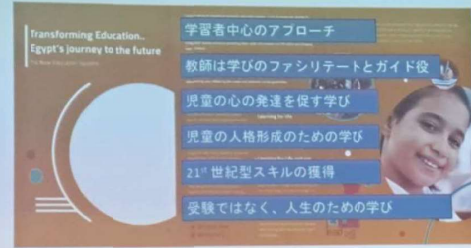
自身のウェルビーイングのためには、内向きや枠内、狭い価値観に閉じこもっては期待は薄いです。自身のウェルビーイングを実現することが、他者のウェルビーイング、組織のウェルビーイング、社会のウェルビーイング、世界のウェルビーイングへとつながっていきます。それぞれの人がウェルビーイングを実現できるような教育の在り方を研究し、実現していくことが持続可能な社会づくりには欠かせません。「どうすれば世界は幸せになるのか?」「まず自分は幸せなのだろうか?」「自分の周りの人は幸せなのだろうか?」「自分の学校や組織の人は幸せなのだろうか?」…問いながら、その実現に向けて、自分、他者、それぞれの学校や組織でケアと対話を通して答えを出していくような取組が必要です。

私は、学園長として湘南学園をESDの推進拠点として、ウェルビーイングを社会に拡散・浸透させていくとともに、主として校長研修を通して学校をエンパワーし、持続可能な学校から持続可能な社会を創るという好循環を生み出すために力を注ぎたい。

エジプト教育省にて 12/25



2018年に開始したエジプト新教育制度

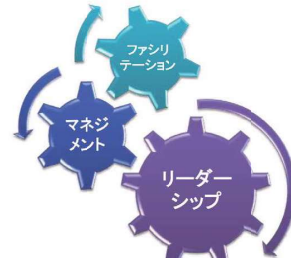


小学校低学年向けのエジプト新カリキュラム

曜日	08:00-08:45	08:45-09:30	09:30-10:15	10:15-11:00	11:00-11:45
火	学際的な学びの時間中の「アラビア語」	学際的な学びの時間中の「算数」	休憩	英語	学際的な学びの時間中の「アラビア語」
水	学際的な学びの時間	トッパル	学際的な学び	休憩	学際的な学びの時間中の「アラビア語」
木	宗教	学際的な学びの時間中の「アラビア語」	休憩	学際的な学びの時間	学際的な学びの時間中の「算数」

どんな管理職研修？

管理職研修で必要なこと



リーダーシップで大切なこと



管理職研修のキーワードは？

自分を知る
他者を知る
つながる

氏名	所属	職名	担当業務
高野 芙美	長野県教育委員会事務局学びの改革支援課 高校教育指導係	指導主事	WWLコンソーシアム構築支援事業、 海外留学、教育課程外国語

1. ご自身がこの研修を通して探究したテーマについて、また、その探究から得た学びや気づきをお書きください。

探究テーマ：他を知って自分を知る。エジプトの日本式教育の実践から改めて日本の教育について考える。

気づき・学び：

エジプトにおける「日本式教育」実践校の見学や、現場の教職員、JICAのスタッフや教育関係者との懇談は、改めて自分がこれまで取り組んできた教育活動の意義について考える機会となった。

エジプトの教育現場での研修をとおして、これまで自分が行ってきた教育活動にどのような意味があり、なぜそれが必要なのか、それにより子どもたちにどんな力を育むことを目的にしているのかについて改めて再認識する中で、日本の教育における「不易」と「流行」についても考えるきっかけとなった。

また、学校教育のあり方や教員と生徒の関係、保護者や地域との連携など、エジプトと日本は文化や価値観において違うことも多いが、学校づくりにおける課題や教員の生徒に対する想いは同じであることにも気づくことができた。

2. 1の学びや気づきは、本研修におけるどのような経験や体験から得られましたか。

訪問先で出会ったエジプトの教育関係者の方々が私たちの説明を聞く際の真剣な眼差しや、日本の教員研修制度や学校づくりについて次々と質問をする姿に、彼らの教育に対する熱い想いに感銘を受けるとともに、急速に進むエジプトの教育改革の中で現場の先生がたの葛藤や苦勞を感じた。

訪問したEJSで朝の会や学級指導、学級活動の他、清掃などを見学した際、日本の教員が視察に来るということで、前日までに相当な準備をされたのだと推察した。また、JICA協力隊員の方からこれまでの様子を伺った際には、新しい教育システムを導入するにあたり、保護者や地域の理解、教員の「指導観」の変換をどう図るかといった課題など、複雑な事情を抱えている現実も知ることができた。特に、Tokkatsuを担当する現場の教員は、自身も経験したことのないことを教えるわけであるので、相当の葛藤や苦勞を抱えているのだと感じた。

エジプトの先生方から、「生徒が掃除をすることについて、保護者にどう理解してもらったのか」、「日本の先生たちはどのような研修をしているのか」など、懇談ではエジプトの先生方から次々に質問が出た。真剣に私たちの答えに耳を傾ける姿に、既存の概念を打ち破り、職員が「チーム学校」となって結束し、新しいものを導入することに果敢に挑む姿や、学校づくりに対するエネルギーに感銘を受けた。私たち日本の教員もその姿に学ぶべきことが多いと感じた。

エジプト日本学校 (EJS) よりも前に日本式教育を取り入れたパイロット校である公立のSara Taqy-Allah Experimental Language Schoolで出会った男子生徒のインタビューがとても印象に残っている。彼らはTokkatsuの導入前と導入後を経験しており、自分の変容について語ってくれた。Tokkatsuを通して、リーダーシップや時間の有効的な使い方、家でも掃除をするようになったこと、そして街中のゴミが気になっていると話してくれた。「ゴミ拾いはした?」と尋ねると、「街をきれいにしたいけれど、まだ実行できていない」と正直に答えてくれた。

エジプトは、子どもの増加にインフラの整備や質の高い教育の確保が追いつかず、全体的に教育の質が低下した。このことを受け、JICAの支援を受けながら社会情緒的スキルを含めた基礎教育における特活などの日本式教育の特徴を活かしながら、国を牽引する社会的リーダーの育成に力を注いでいる。EJSの先生に「どんな生徒になってもらいたいのか」との質問した時、ある先生が「学校で教わったことを社会で実践できる人になってもらいたい」と答えてくれた。インタビューで話してくれたことは、エジプトの全ての高校生のうちのわずか10人の声に過ぎないが、彼らは、「日本だから」ということではなく、純粋にTokkatsuの良さを実感し、家庭や地域で学んだ事を実践しようと考えている。彼らへのインタビューを通して、この子たちはこれからのエジプトの社会を変え、未来を創るリーダーになっていくのだろうと感じた。改めて、学校で何をどう教えるかということが、その国の社会の創造に大きな影響を与えること、そして人を育てる教員としての私たちの仕事の尊さと責任の重さを感じた。

3. 研修を通して、「今、この時代に、国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

開発教育とは、教育をとおして世の中の不平等や格差などの課題を正しく理解し、子どもたちがその課題を自分ごととして捉えるマインドを育むことだと考える。そのためには、子どもたちが日常の生活の中で、自国のことだけでなく、世界で起こっていることに対する関心持ち、自分たちが暮らす社会で起こっている問題と自分はどうかわり、その解決のために自分は何ができるかという当事者意識を育むことが大事である。その際、子どもたちに「だれが、世界をどう見せるか」がとても重要であり、その役割を私たち教員が担っているのではないかと感じている。

今回の研修をワンフレーズで表現するなら、New Perspectiveである。渡航前は、頭を空っぽにして先入観を持たずにエジプトを見てこようと思ったが、やはり現地に到着すると道路を無秩序に走行する車や歩行者、路上のごみの散乱などに衝撃を受けた。目の前の現実を日本の「当たり前」というフィルターをとおして見ていたのである。時間が経つにつれ、不思議なことに「騒音」と感じていた街中のクラクションの音が美しい夕日が沈むナイル川の景色と調和して、心地よいサウンドに変わっていた。街中のゴミの散乱が「あり得ない」という感覚から、「なぜ街にゴミがあるのか」という疑問に変わり、街中で歩くエジプト人の行動を興味深く観察するようになっていた。

私たちが異文化や異なる価値観に出会った際、衝撃を受けることは多々ある。大事なことは、子どもたちが「異なるもの」に出会ったときに抱く「衝撃」が「拒絶」にならないよう、私たち教員は、「なぜ違うのか」、その理由をもっと知りたいと子どもたちが思うように彼らの興味関心を導くことだと考える。

世界がますますボーダレスになり、考え方や価値観が全く違う人と生活することが当たり前の時代がやってくる。現在、ウクライナとロシアの戦争状態が続き、多くの命が失われている。世の中の争いは互いを正しく理解できていないことから始まると考える。私たち大人も、「違い」は恐れるものではなく、「違い」を正しく知ることでお互いを認め合うことが大事である。「違い」に出会うからこそ、自分や自国の習慣や価値観について見直すことにもつながると考える。

教育に携わるものとして、子どもたちには、「違い」を体験し、探究し、そして楽しむことの尊さや重要性を伝え

ることが大事であると考え。そのためには、まずは、私たち教員自身が多文化の中に身を置き、多様な他者との対話し、協働することを体験することが必要であり、今回のエジプト研修で自分が見てきたことや体験したことを誰かに伝えることは、その最初の一步であると感じている。

4. 年度内から次年度の業務において、開発教育・国際理解教育推進のために自分が取り組みたいことについて、主な3つを挙げてください。(所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定など)

- 特別活動について他校種の先生交流会も兼ねた今回の「エジプトにおける日本式教育」Tokkatsuプラスの報告会を行いたい。
- 教員志望の高校生向けの開発教育をテーマとしたワークショップ
- 初任者研修での講演

5. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか?主な3つを挙げてください。

- 今回参加したメンバーが各都道府県で実施する報告会やワークショップサポート
- 県内の高校生とエジプトの高校生とのオンライン交流
- 県内の先生とエジプトの先生との「特活」についてのオンライン座談会

6. 本研修への参加を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容(報告会など)。その際、使用した資料があれば、添付をお願いいたします。

- 長野県国際教育研究協議会実績発表会 審査員講評の挨拶
- 長野県国際教育研究協議会 機関紙「海の彼方に」(第47号) 寄稿

7. その他所感(研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか?どのような教育の場を作っていきたいか?など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。)

国の未来を創造するのは子どもたちである。子どもに価値観や規範を教えることは国の未来を創ることにつながることを実感した。現在、かなりのスピードでエジプトの教育改革が官民の協力のもと進んでいる。日本式教育の理念は果たして宗教や価値観が異なるエジプトで理解されるのだろうかと疑問に思っていた。私にとって予期せぬ発見は、学校における先生と生徒の関係が日本式教育の導入により、変わりつつあるということだ。以前は、教員は「絶対的権威者」だったが、掃除や学級会などが取り入れられたことにより、先生と生徒が互いに学び合える関係性の構築できつつあるとのこと。一人一人が大切にされる教育へのシフトが進んでいるとのことでは日本も大いに参考にすべきことだと感じる。

エジプトで出会った人々の「国を変えたい」と願う熱い想いが忘れられない。初日に訪れたター公民館で、住民の力で教育格差や地域の課題改善に取り組む方々の活動を見学した。懇談の中で、今回の研修に同行してくれた通訳の方の言葉を思い出す。「なぜエジプト人にとって公民館が大事か」について、「自分は日本で7年間大学の博士課程で学んだ後、エジプト社会を変えたい、日本で学んだことを母国エジプトで生かしたいと考え、カイロ大学で日本語翻訳学科を設立した。その中で、協調性や自律性、責任感を学ぶ日本式教育を取り入れてきた。今のエジプト社会には、学生が大学で学んだことを実践する場がない。社会に出たら高校生の時の考え方に戻ってしまう。子どもたちの考えや価値観を変えるためには、学校で学んだことを社会で実践できる公民館のような場所が必要なのだ」と彼女は熱い想いを話してくれた。この公民館にスタッフは若者が多く、自分の仕事の傍らボランティアとして公民館の活動を支えている。「なぜ?」と私たちの仲間が尋ねると、「自分の得意を生かして人のためになる。そうすることは当たり前である。」と答えてくれた。彼らの熱意と情熱はどこからやってくるのだろうと感じた。

2018年に一般の小学校のカリキュラムにTokkatsuが組み込まれ、同年に開講したEJSの数は、2022年度までに51校が開校している。日本式教育がエジプト社会に影響を与えるまで、まだまだ時間がかかるとのこと。改めて人を育てること、人の価値観を変えることは時間も労力もかかることだと感じた。また、皮肉なことに、日本では得られない達成感や満足感や教員としての誇りをエジプトで感じたことも事実であり、「なぜ日本では?」の疑問も残る。今回の研修は、単に「日本式教育」が他国で受け入れられていることを知った高揚感だけで終わるのではなく、エジプトの国を挙げた教育改革に関わる人々の姿から、日本の学校教育も何か変わらなければならないのではと焦りのような感覚も覚えた。

教員の超過勤務が問題となり、教師を志望する若者が減っているという現実を受け止め、教育の「当たり前」を見つめ直し、改めて未来の社会を創造する主体となる若者を育てる両国の教育現場は、今後どう変わらなければならないのか、真剣に考えなければと強く感じている。

氏名	所属	職名	担当業務
浅見 淳一	輪島市立河原田小学校	校長	

1. ご自身がこの研修を通して探究したテーマについて、また、その探究から得た学びや気づきをお書きください。

探究テーマ: More Active!

まずは自分自身がもっと貪欲になり、アクティブに学び、探っていきたい。

気づき・学び:

日本式教育—Tokkatsu—が、想像以上にエジプトにおいて取り入れられており、児童生徒たち自身がその成果を実感し、学校生活を越えた日常生活の中でも、学んだことを生かしていることに驚いた。全ての人たちが最初から積極的に取り入れたわけではなかったが、自国の風習・慣習にとらわれず、よいと思ったことは積極的に取り入れようとする彼らの柔軟性が、エジプトでの日本式教育の普及を後押ししたのではないだろうか。JICAやター公民館のギド館長をはじめとする日本式教育のメリットを信じて、粘り強く普及に力を注いできた方々のおかげでもある。

今回の研修で印象深かったことの一つに、小学生から大学生までのほとんどが英語を話せることが挙げられる。世界の多くの国々では、幼少期から、自国語の他に英語を話すことができるように教育されている。実際、エジプト日本学校(EJS)では、通常会話は自国語(アラビア語)であるのに対し、授業は英語で行われていた。小学校入学時には、英語が話せず苦労していた子も、数年経てば流暢に話せるようになっていたとのことだった。日本でも、小学校5・6年生で外国語科(英語科)、3・4年生で外国語活動が導入されているが、世界の人たちと話すためのツールとして、英語学習の重要性を感じた。

2. 1の学びや気づきは、本研修におけるどのような経験や体験から得られましたか。

EJSを視察し、子供たちの様子を見て、本当に生き生きと活動していることに感動を覚えた。その源は、日本式教育—Tokkatsu—にあると感じた。

Sara Taqy-Allah Experimental Language Schoolの視察では、女子高校生7名と話をした。その中で、彼女たちにTokkatsuに関する2つの質問をした。

1つは、「掃除」についてである。彼女たちは皆、「掃除」について肯定的であった。はじめは、掃除をすることに戸惑いもあったが、今では、「自分の居場所なのだから自分できれいにするのが当たり前だと思うようになった」とのこと。自分の家でも掃除をするようになり、家族が喜んでくれているそうである。

もう1つは、「学級会」についてである。それまで、よく知らなかった級友のことも、学級会を通して、どんな人かが分かるようになり、その結果、仲のよい友達も増えたそうである。

3. 研修を通して、「今、この時代に、国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

国際理解教育は、互いの文化や考え方を知ること、双方の「違い」を理解し、相手を尊重することで相互理解の態度を養う教育のことである。ロシアによるウクライナ侵攻が続く中、改めて国際理解教育の重要性を感じている。

開発教育もまた、開発をめぐる様々な問題を理解し、開発のあり方を考え、共生できる地域社会づくりに参加することをねらいとした教育である。世界で起こっていることを理解し、世界の現在と未来を見据え、適切な方向性を見出すことができないと、私たちの住む地球は、たちまち、誰もが生きづらい環境になってしまうだろう。

そんな今だからこそ、これらの教育が重要であり、一人一人の行動・実践に結び付けていかなければと考えている。

4. 年度内から次年度の業務において、開発教育・国際理解教育推進のために自分が取り組みたいことについて、主な3つを挙げてください。(所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定など)

- 1月下旬、全校集会で、自校の児童にEJSで学んだことを伝え、海外で認められている日本の教育のよさを認識してもらおうとともに、エジプトの小学生が意欲的に学習に取り組む姿を見て、今後の自らの意欲に繋げてもらいたい。また、自校の教職員に対しても、校内研修会を開き、EJSをはじめとするエジプトで学んだ全てのことを伝え、今後の指導に生かしてもらいたい。
- 2月下旬の輪島市校長研修会で、研修してきたことを伝達し、情報を共有するとともに、各校において、総合的な学習の時間等において生かしていただくよう依頼する。
- 次年度、輪島市学校教育研究会生活・総合部会において、研修内容を伝達し、市内全小中学校において、各部署が中心となって、その成果を役立ててもらいたい。

5. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか？主な3つを挙げてください。

- 自校で、SDGsについての学習及び取組を推進していきたい。その際、JICA北陸よりSDGsパネルを借用したり、JICA北陸を通じて、SDGsに詳しい講師を招聘したりすることも考えている。
- 自校の5・6年生の総合的な学習の時間において、環境教育を推進していきたい。その際、JICA北陸を通じて国際協力出前講座を開き、海外協力隊経験者を講師に招聘したいと考えている。
- 輪島市学校教育研究会生活・総合部会において、国際理解教育・開発教育について学んでいきたい。そのために、JICA北陸を通じて、国際理解教育・開発教育に詳しい講師を招聘したいと考えている。

6. 本研修への参加を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容(報告会など)。その際、使用した資料があれば、添付をお願いいたします。

4で記した全校集会と校内研修会を1月31日に行った。その際、JICA北陸の甲斐 翔子さんもお招きした。全校集会では、EJSで行われているTokkatsuについて、児童に紹介した。校内研修会では、それに加え、その他様々な施設を訪問して学んだことも教職員に伝えた。(両会での資料と写真を添付いたします。)

7. その他所感(研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか?どのような教育の場を作っていきたいか?など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。)

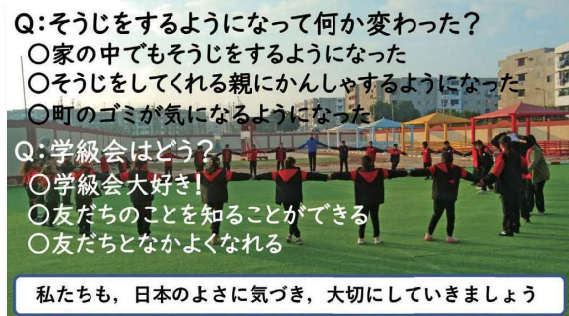
私は、開発教育の中で、現在、最も重要なのはESDであり、SDGs達成に向けて取り組むことが喫緊の課題だと考えている。JICA地球ひろば及びJICA北陸を訪問する機会があったが、展示物等の資料から、日本がまだまだ、その取組において後進国であることを再認識した。

今後、自校だけでなく、輪島市校長研修会及び輪島市学校教育研究会等、あらゆる機会を捉えて、SDGsに関する学習を推進するとともに、2030年までに目標を達成できるよう、地域と連携した取組を推し進めていきたいと考えている。

【全校集会資料】





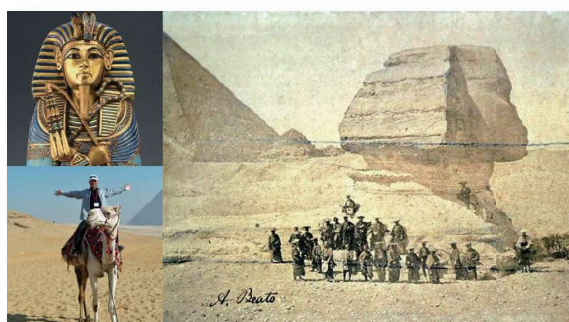
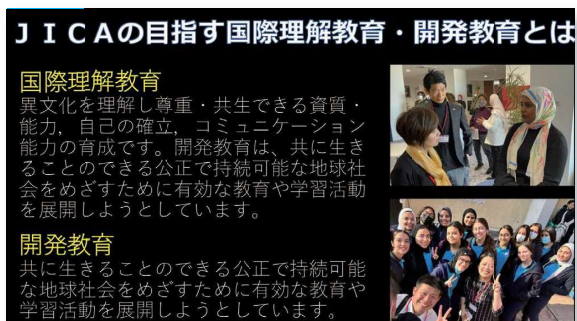


【校内研修会1資料】



参加者レポート

V



首都カイロに人工集中。新首都ニューカイロ建設へ



人口1億人、平均年齢24歳（日本は48歳）

広い道路には、横断歩道も信号もほとんどない



人と車が「阿吽の呼吸」で行き交っている



ター公民館



ギド館長

リナさん



特活実験的語学学校



جونيشى آلى



E J S エジプト日本学校

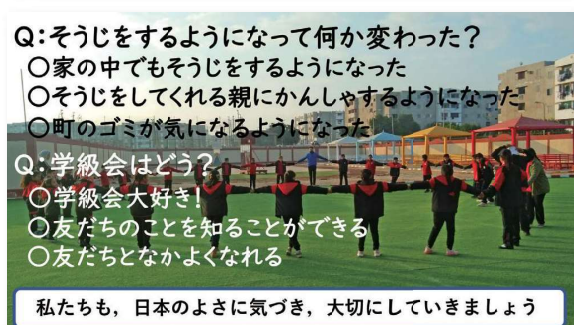


【校内研修会2資料】



Tokkatsu class (G5 学級会)





氏名	所属	職名	担当業務
伊川 昌弘	三重県教育委員会事務局 研修推進課 テーマ研修班	主任	教職員研修、情報教育、テーマ別研修

1. ご自身がこの研修を通して探究したテーマについて、また、その探究から得た学びや気づきをお書きください。

探究テーマ: 多文化理解を通じた考え方ごとの正解

気づき・学び:

私は、この教師海外研修を通してエジプトの文化に触れ、直接体験をすることができました。エジプトに行く前のイメージは「ピラミッド・神聖な場所・砂漠」でしたが、到着すると「道端のゴミ・クラクション・我の強さ」に変わりました。しかし、そのようなマイナスの印象も日を重ねるごとに変わっていききました。例えば、エジプトでは5秒に1回程度クラクションが鳴り響いていますが、それはバイクや車が接触しないように「自分の居場所を常にアピールしている」という意味で多くは使われています。日本でのクラクションの使い方とは少し意味が異なります。また、友人宅の前であらかじめ決めておいた回数を鳴らすことで迎えに来たことを知らせるという使い方もあるようです。携帯電話が普及していなかったころの名残なのかも知れません。交通事情からエジプトの文化に想いを馳せるとエジプト人の我の強さ、よく言えば素直に自分を表現することのできる国民性なのではと考えるようになりました。

そのようなエジプトでの学校教育ですが、2016年以前は重視される子どもの能力は学力が中心、授業スタイルは教師によるトップダウン型一方通行型であり、学び方も試験のための暗記学習が中心で試験が終われば忘れてしまう学びが多かったと聞きました。そのような中、来日し日本の教育活動を視察されたシーシ大統領が日本式教育（特に特別活動）に感銘を受け、エジプトの公立小学校で「Tokkatsu」として広まりました。学力偏重のエジプトの基礎教育に対し、日本式教育を取り入れることで主体性、協調性、社会性、規律などの醸成を促進し、「人間性」や「健康な身体」もバランスよく育成する「全人的教育」モデルを普及させました。我々が視察したエジプト日本学校（EJS）ではエジプトの中でも先進的に日本式教育が取り入れられており、子どもたちは学級会や掃除、日直当番といった活動を通して協調性や社会性を学んでいる様子でした。

しかし、そういった良さが成果としてある一方、日本では自分の気持ちを表現することが苦手と感じる子どもたちも多く、みんなに合わせる・空気を読むことが求められる場面も多くあります。日本式教育を取り入れることで、エジプトの人々の「素直に自分を表現する力」の障壁にならないよう日本式教育とエジプトの人々に根付く文化とを融合させる視点が必要なのではないかと感じました。エジプトの人々と共に教育について考え、ゆくゆくは日本式教育の逆輸入もやってみたいと感じました。

2. 1の学びや気づきは、本研修におけるどのような経験や体験から得られましたか。

ター公民館で活動する熱意ある人々の話、EJSでの日本式教育の視察、一緒にエジプトへ行った日本の教育関係者のみなさんやエジプト人のガイドさんのお話から学び、経験しました。

3. 研修を通して、「今、この時代に、国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

今回、この研修を通して改めて日本のことを考えるきっかけとなりました。特に日本の将来性について考えたとき、人口や平均年齢について危惧する点があります。日本の平均年齢は43歳、出生率は1.3人。対してエジプトは平均年齢23歳、出生率は3.6人と非常に若く人口も右肩上がりです。今後、日本が更に成長するためには諸外国の人々の力が必ず必要と感じています。現在でも私の住む三重県には自動車関係の仕事で南米を中心に様々な国から来県し定住されている人々がいます。また、そのような人々が集うネットワークや地域コミュニティも発展し、南米系のレストランやスーパーなども年々増えています。当然ながらそこで暮らす子ども達もたくさんおり、地元の公立小中学校に通っています。

慣れない土地での学習やコミュニケーションに戸惑う児童生徒も多く、いじめや不登校の問題もあります。今回の海外研修では異国の文化に直接触れ、経験できるものでした。現地で実際に人々の話を聞き、その意味や背景を知ることで行く前のイメージや先入観が変わり、新たな視点で彼ら現地の人々の行動を見ることができました。この経験を活かし、日本の学校でもそれぞれの子ども達のルーツに寄り添い、背景を知ることによって文化や宗教の違いから生じる価値観や考え方の違いを子どもたちと共有していくことが大切だと感じました。

4. 年度内から次年度の業務において、開発教育・国際理解教育推進のために自分が取り組みたいことについて、主な3つを挙げてください。(所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定など)

- 次年度テーマ別研修内の多文化共生教育に関わる研修で、今回の海外研修で得た知識や経験を研修講師として報告する。
- 情報教育研修の中でICTを活用した協働的な授業案作成のワークショップで、今回のエジプトについてテーマを掲げて多文化共生教育について学ぶ機会を提供する。
- 担任として教育現場に戻った際には、今回の海外研修で学んだエジプトの文化やイスラム圏の歴史などについて、授業を通して子ども達に伝えていきたい。また、イスラム圏のみならず外国にルーツを持つ子ども達に寄り添い、共感できるクラス作りに貢献したい。

5. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク（国際協力推進員）や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか？主な3つを挙げてください。

- 今回の研修で一緒にできた全国各地の先生方と今後もつながり、国内の様々な地域文化の紹介などをクラス単位で行うなど国内の多文化共生教育について授業をしてみたい。
- EJSと日本の学校をオンラインでつなぎ、特活やそれ以外の日本式教育について紹介するとともに、日本の子どもたちがエジプトの文化に触れる機会を作りたい。
- JICA中部と協力し、今回の海外研修で得た学びや価値観を地球ひろばなどで発表し、多文化共生教育の推進に努めたい。

6. 本研修への参加を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容（報告会など）。その際、使用した資料があれば、添付をお願いいたします。

今年度はまだ報告会などで共有する場の設定がなく、来年度以降の教職員研修にて今回の内容を報告していきます。

7. その他所感（研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか？どのような教育の場を作っていきたいか？など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。）

今回の研修を通して、今までの自分が海外へのイメージや先入観で考えを固定化していたことに気がつきました。実際に現地に赴くことで言動等の見える部分だけでなくその背景にある文化や考え方に触れ、一方的なものの見方ではなく他視点からの見方や想像する力を養うことができました。これらの経験を活かし、教育現場に戻った際には、エジプトの文化やイスラム圏の歴史などについて、授業を通して子ども達に伝えていきたい。また、イスラム圏のみならず外国にルーツを持つ子ども達に寄り添い、共感できるクラス作りに貢献したい。

氏名	所属	職名	担当業務
石動 徳子	神戸市教育委員会 学校教育部学校教育課 こども日本語サポートひろば	指導主事	外国人児童生徒支援

1. ご自身がこの研修を通して探究したテーマについて、また、その探究から得た学びや気づきをお書きください。

探究テーマ：人とつながる 人をつなげる 人を活かす

気づき・学び：

新カリキュラム、また日本式教育を導入し、変化の真っ只中にあるエジプトの教育。一般校への普及に向けて、また保護者や教員の理解を得る上で課題も少なくないと思うが、限らないパワーを感じた。特に、各訪問先のリーダーが優秀で熱意にあふれていた。困難も伴うが、今が最も重要な局面なのではと感じた。そのエジプトの教育を目の当たりにしたことで、自分自身も日本の教育理念、特に特別活動において育まれる資質能力を再認識することができた。実際、これまでの自分の実践を振り返ると、特別活動を行う上で内容や流れに囚われていて、その先にある、「子どもたちにどんな力をつけたいのか」を見失っていることが多かったように思う。今回の気づきを自分の中にとどめず、神戸市の先生方にも共有したいと考えている。まずは、エジプトの教育を理解することで日本の教育を見直し、そして、エジプトの先生方と共に教育理念や課題などについて話し合い、高め合う機会をつくっていければ、互いにとってプラスになるのではと感じた。

また、現在の所属先で私は外国人児童生徒等支援に携わっている。日本の教育現場を知らない新渡日の子どもたちが編入し、どのような戸惑いや困り感をもつのか、今回の研修を通して具体的にイメージすることができた。保護者にとっても同様である。清掃活動や日直、学校行事などの内容だけでなく、ねらいや期待される効果を丁寧に伝える必要があることを、日本の先生方と共に再確認する機会を持ちたい。さらには、特別活動において育まれる「人格形成」「社会参画」「自己実現」について、ことばの力を支えることで外国人児童生徒にも同様に重視されるべきであることを先生方と共有したい。他にも、エジプトにおいて肌感覚で感じたイスラム観を先生方に伝えることで、日本で生活しているムスリムへの理解にもつながるであろう。

2. 1の学びや気づきは、本研修におけるどのような経験や体験から得られましたか。

JICAエジプト事務所や教育省での取組状況、経緯や今後に向けてなどについて説明を受けた上で、エジプト日本学校(EJS)に訪問し、理念と具体的状況を関連付けて理解することができた。特に、1、2時間ではなく、半日を通して見学できたことで、日常に近い形で様子を知ることができた。また、現場の先生方への日本の実践発表や質疑応答、校長先生による自校の説明を通して、課題や学校運営・学級経営の工夫について具体的に知り得た。帰国後には、杉田洋氏(國學院大学教授;元文部科学省視学官)の講演や論考などを拝聴・拝見し、日本の特別活動についても再考することができた。このような現場訪問や先生方とのディスカッション、杉田先生のお話を通して、日本とエジプトの教育において、違いだけでなく共通点にも目を向け、今後も共に高め合うことができるのではないかと考えた。

また、ター公民館やEJS、エジプト・日本科学技術大学(E-JUST)、Sara Taqy-Allah Experimental Language School(※独自に日本式教育を取り入れている公立学校)などにおいて、リーダーをはじめ、現場で携わっている方々の熱意を強く感じた。現在、短期間で教育が動いている要素として、彼らの存在は大きいと考える。自分自身も教育への向き合い方において大変刺激を受けた。

イスラム観については、自身が以前、海外協力隊として生活していたセネガル共和国とも比較対照しながら、街並みや人々の様子から伺い知ることができた。ただ、JICA 専門家の方のお話にもあった「イスラムの教えは日本の倫理観にも近い」という視点は、これまでの自分にはなかった。改めて、イスラム観について学ぶ意欲につながった。

3. 研修を通して、「今、この時代に、国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

SNS やニュース、情報番組で世界情勢や文化を知ることが多い昨今、どうしても国や現地の人々をカテゴリー化してしまいがちである。それ自体は悪くないのかもしれないが、この場合偏見やマイナスイメージを持つことが多い。やはり人との対話や直接的な関わりの中でその言動の背景にあるものを推し量ることや、自分たちの生活や考えを振り返ることが、本当の異文化理解、他者理解につながると考える。また、違いだけでなく共通点にも目を向け、同じ人として共に歩もうとする姿勢が大事だと、今回の研修を通して再認識することができた。

この異文化理解、他者理解の視点は、国外はもちろん国内においても、ますます重要性が高まると予想される。少子高齢化に伴い外国人人材が増加する中で、受入れ体制などハードの面だけでなく、私たち個々の多文化共生、多様性への理解などソフト面も重要である。

そのため、国際理解教育や開発教育を通して、実際に目で見て対話の中で感じたことを伝え、子どもたちや先生方と共有することが大事だと考える。その際、実際に現地へ訪れた者とそうでない者との温度差をつくらぬよう十分配慮し、自分事として捉えられるよう工夫が必要である。

4. 年度内から次年度の業務において、開発教育・国際理解教育推進のために自分が取り組みたいことについて、主な3つを挙げてください。(所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定など)

- 1月25日のオンライン報告会へのリマインド(今回は特に、国際理解教育に関心のある先生だけでなく、管理職や特別活動研修グループの先生方にもアピールをする)
- 所属先や、市内の教育実践研修グループ(外国語・国際、特別活動、学級経営など)に向けての報告会
- 上記2点を出発点とし、先生方や子どもたち同士をつなげる機会を設ける。(例:互いの教育について。できれば継続的にやり、はじめは広い分野から始め、徐々に何かテーマを設けてディスカッションする。／エジプトの子どもたちとの交流を通じた異文化理解(できれば、エジプトにルーツを持つ子どもが在籍する市内の学校と)／海外協力隊との交流を通じて、6年社会の国際協力についての学習を深める。など)

5. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク（国際協力推進員）や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか？主な3つを挙げてください。

- JICA関西での報告会や実践発表（可能であれば、京都・大阪の同研修参加者と共に）
- 市内教員研修におけるJICA関西との連携（来年度、通常の日本語指導者養成研修に加え、多文化共生や異文化理解をテーマとした研修を検討している。その際、今回の海外研修も踏まえると共に、JICA関西の皆さんの知見をお借りしたいと考えている。）
- 報告会などを実施する際に、国内にいるエジプト出身の方（例えば、JICA研修員や現在連携している大学の留学生など）にも参加いただけたら、日本からの視点だけでなく、エジプトからの視点も投げかけてもらえるのではないかと考えている。

6. 本研修への参加を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容（報告会など）。その際、使用した資料があれば、添付をお願いいたします。

4の2点目に挙げた報告会において、以下の内容を予定している。単なる報告にとどまらず、今後に向けて発信する形で伝えていきたい。（2023年2月4日時点）

「〇〇から見えるエジプト・日本の教育」

- エジプトの概要
- 日本式教育を取り入れることになった経緯
- なぜ、〇〇を？
- 日本の「〇〇」について
- エジプトにおける）具体的な内容や方法、困難点や成果
- 今後に向けて

※〇〇は特活（特別活動）を指しており、報告会を進める中で示していく。

※使用予定のスライドについては、別紙参照。

7. その他所感(研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか?どのような教育の場を作っていきたいか?など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。)

持続可能な社会の創り手として、世界の共通課題を多くの人々と共有するとともに、自分たちの生活の中で何ができるか、何が必要かを考え行動することが求められる。国内においても、様々な国の人々と生活を共にすることが増加すると予想される。このように、国外国内に関わらず、今後さらに多様な人々との関わりが増えるのではないかと予想される。また、関わりの中で、他者への共感力や多角的な見方・考え方、自分自身を俯瞰する態度などが必要ではないかと考える。

現在、国内で外国人児童生徒が増加する中、彼らと共に学校生活を送ることで、周りの子どもたちもこの段階から多様な価値観に触れることができ、上記にある共感力や多角的な見方・考え方などを伸ばすことができると思う。つまり、外国人児童生徒を「支援する」対象としてだけでなく、私たちも彼らから学びながら共に生活することが大事なのではないかと考える。

幸いにも、自分は現在、市内に経験や知見を伝え広げやすい立場に置かれている。教員研修や各校への訪問などにおいて、以上のような子どもたちの将来を見据えて大事にしたい視点を伝えていきたい。

その中で、より具体的に理解していただけるよう、今回の研修で訪れたエジプトや海外協力隊として生活したセネガルで体感したことを踏まえながら、発信していきたい。



〇〇から見えるエジプト・日本の教育 ～ 2022年度 JICA教師海外研修(教育行政コース)より～



神戸市教育委員会 学校教育課 学校教育課
こども日本語サポートひろば 石動 徳子



…なぜエジプトが日本の教育を取り入れたか？
そして、何をどのように？

本日の流れ

1. エジプトの概要
2. 日本式教育を取り入れることになった経緯
3. なぜ、「〇〇」を？
4. 日本の「〇〇」について
5. 具体的な内容や方法、困難点と成果
6. 今後に向けて



エジプト概要 → 経緯 → なぜ〇〇？ → 日本の〇〇 → 具体的な内容／困難点と成果 → 今後に向けて

1. エジプトの概要【外務省HPより】

名称: エジプト・アラブ共和国
面積: 約100万km² (日本の約2.7倍)
人口: 約1億233万人
言語: アラビア語 (英語が通じる場合もあり)
宗教: イスラム教、キリスト教コプト派 など



エジプト概要 → 経緯 → なぜ〇〇？ → 日本の〇〇 → 具体的な内容／困難点と成果 → 今後に向けて

1. エジプトの概要【外務省HPより】

産業: 製造業、小売・卸売、農林水産業、不動産

GDP: 3,631億米ドル (2020年世銀より)

一人あたりGDP: 3,549米ドル
(2020年世銀より)

失業率: 7.9%

(2020エジプト中央動員統計局 (CAPMAS) より)



エジプト概要 → 経緯 → なぜ〇〇？ → 日本の〇〇 → 具体的な内容／困難点と成果 → 今後に向けて

1. エジプトの概要【外務省HPより】

日本との関係

- ・貿易: 日本への輸出…自動車等輸送機器、一般機器など
日本からの輸入…天然ガス・石油、石油関連製品、衣料、食品など
- ・JICAの支援 (代表的プロジェクト):
エジプト日本科学技術大学設立、カイロ大学小児病院建設、スエズ運河橋建設、大エジプト博物館、カイロ地下鉄4号線 など



エジプト概要 経緯 なぜ○○? 日本の○○ 具体的内容／困難点と成果 今後に向けて

1. エジプトの概要

大エジプト博物館
2020年開館予定
2023





出典: JICAホームページ

エジプト概要 経緯 なぜ○○? 日本の○○ 具体的内容／困難点と成果 今後に向けて

☆ エジプト料理 あれこれ ☆



※日本のエジプト料理店にて

エジプト概要 経緯 なぜ○○? 日本の○○ 具体的内容／困難点と成果 今後に向けて

2. 日本式教育を取り入れることになった経緯

エジプト概要 経緯 なぜ○○? 日本の○○ 具体的内容／困難点と成果 今後に向けて

2. 日本式教育を取り入れることになった経緯

2015年 日本エジプト首脳会談
エジプトのエルスシーシ大統領が日本の教育に関心



出典: 外務省HP

【背景】
「アラブの春」以降、政情不安や経済低迷等…国の未来を担う子どもたちへの教育が大きな課題

2016年2月
「エジプト・日本 教育パートナーシップ (EJEP) 締結」

エジプト概要 経緯 なぜ○○? 日本の○○ 具体的内容／困難点と成果 今後に向けて

2. 日本式教育を取り入れることになった経緯

エジプトでは一般的に…

重視される子どもの学力	学力中心
授業方法	講義形式が中心
教師の存在	権威的
1クラスの児童生徒数(平均)	(規程では) 40人 (実際には) 70~80人
教室設備	1つの机・いすを複数名で使用

エジプト概要 経緯 なぜ○○? 日本の○○ 具体的内容／困難点と成果 今後に向けて

3. なぜ「特活」?

エジプト概要 経緯 なぜ○○? 日本の○○ 具体的内容／困難点と成果 今後に向けて

3. なぜ「特活」?

求められたのは
「規律や協調性などの人格形成を重視する日本式教育」

- ・はじめは、道徳で → 宗教を授業で行うエジプトでの導入は難しい。
- ・訪日したエジプトの視察団が東大での特活の話に関心、実際に訪問した学校でも。
- ・経費負担や教員への負担が少なく、分かりやすい活動を → 掃除等から試行

エジプト概要 経緯 なぜ○○? 日本の○○ 具体的内容／困難点と成果 今後に向けて

4. 日本の「特活」

エジプト概要 経緯 なぜ○○? 日本の○○ 具体的内容／困難点と成果 今後に向けて

4. 日本の「特活」

・育まれる資質・能力
「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」




ちがいが多様性を受け入れ、共に生きる

社会の中で役割や責任を果たしながら生きる

行動目標、意思決定、よりよい自分づくり

「人づくり」に寄与

エジプト概要 経緯 なぜ○○? 日本の○○ 具体的内容／困難点と成果 今後に向けて

4. 日本の「特活」

・育まれる資質・能力
「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」

・活動内容
(小) 学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事
(中) 学級活動、生徒会活動、学校行事

・キャリア教育の要としての役割も




エジプト概要 経緯 なぜ特活? 日本の特活 具体的な内容/困難点と成果 今後に向けて

5. エジプトの「TOKKATSU」における具体的な内容や方法、困難点と成果

エジプト概要 経緯 なぜ特活? 日本の特活 具体的な内容/困難点と成果 今後に向けて

5. エジプトの「TOKKATSU」における具体的な内容や方法、困難点と成果

2015 日本・エジプト首脳会談
2016 エジプト・日本教育パートナーシップ表明
2017 (フェーズ1) 対象校でTOKKATSUモデルの実践
2018 35校でEJS新規開校
2019 全国にミニ特活の導入が明文化
2020 12校で「TOKKATSU+」を導入
2021 48校でEJS新規開校
2021~2027 (フェーズ2) EJS51校にTOKKATSUモデルの普及
2022 EJS51校にTOKKATSUモデルの普及
2030 全国に日本式教育モデルを普及

エジプト概要 経緯 なぜ特活? 日本の特活 具体的な内容/困難点と成果 今後に向けて

5. エジプトの「TOKKATSU」における具体的な内容や方法、困難点と成果

①エジプト・日本教育パートナーシップ
②エジプト国民の日本人への尊敬の念
③熱心で優秀なエジプト人(教育省、特活オフィサー、パイロット校の教員)
④現地でのサポート(JICA専門家、海外協力隊、スーパーバイザー、通訳など)

短期間で取り入れられた要素

エジプト概要 経緯 なぜ特活? 日本の特活 具体的な内容/困難点と成果 今後に向けて

5. エジプトの「TOKKATSU」における具体的な内容や方法、困難点と成果

週1回(45分)、「ミニ特活」として導入
※ミニ特活 日直・学級会・学級指導

エジプト概要 経緯 なぜ特活? 日本の特活 具体的な内容/困難点と成果 今後に向けて

5. エジプトの「TOKKATSU」における具体的な内容や方法、困難点と成果

特別活動

日直 学級会 学級指導 掃除 児童会活動 学校行事

時間を守る 手洗い 歯磨き 学校運営 朝学習 体力測定

エジプト概要 経緯 なぜ特活? 日本の特活 具体的な内容/困難点と成果 今後に向けて

5. エジプトの「TOKKATSU」における具体的な内容や方法、困難点と成果

日直

Before
・「Class Leader」…賢い子、声の大きい子、教員に好かれている子が指名され、長期的に務める。
・なれたがらない子も多い。

導入時
・呼称「Daily Class Coordinator」
・全員が順番に「クラスの皆のためにみんながなれたがる役割に…」

After
・与えられた役割から生まれる自己有用感
・「指示する立場」と「指示される立場」を双方体験する大切さ
・リーダーとしての素養を全員が経験

【課題】
・「本当にみんなが出来るの?」
・「教員の威厳が守れるの?」

エジプト概要 経緯 なぜ特活? 日本の特活 具体的な内容/困難点と成果 今後に向けて

5. エジプトの「TOKKATSU」における具体的な内容や方法、困難点と成果

日直

After
・与えられた役割から生まれる自己有用感
・「指示する立場」と「指示される立場」を双方体験する大切さ
・リーダーとしての素養を全員が経験

エジプト概要 経緯 なぜ特活? 日本の特活 具体的な内容/困難点と成果 今後に向けて

5. エジプトの「TOKKATSU」における具体的な内容や方法、困難点と成果

学級会

Before
・教員の提案に対し子どもが質問や意見を述べるかたちでの話し合い
・最終的な決定は教員の判断

導入時
・話し合いの主体は子どもたち
・コミュニケーションは子どもたちの間で
・最終決定は、子どもたちの相違(多数決は避ける)

After
・学校は勉強だけでなく「友達と一緒に創る居場所」にも
・「変化の主体」を実感する子どもたち
・集団としての子どもたちの潜在能力に気づく教員

【課題】
・学校は「進学のため勉強するところ」
・主体性が求められず、子どもにとって楽しみの少ない授業

エジプト概要 経緯 なぜ特活? 日本の特活 具体的な内容/困難点と成果 今後に向けて

5. エジプトの「TOKKATSU」における具体的な内容や方法、困難点と成果

学級会

Before
・教員の提案質問や意見での話し合い
・最終的な決定は教員の判断

導入時
・学校は勉強だけでなく「友達と一緒に創る居場所」にも
・「変化の主体」を実感する子どもたち
・集団としての子どもたちの潜在能力に気づく教員

After
・学校は勉強だけでなく「友達と一緒に創る居場所」にも
・「変化の主体」を実感する子どもたち
・集団としての子どもたちの潜在能力に気づく教員

【課題】
・学校は「進学のため勉強するところ」
・主体性が求められず、子どもにとって楽しみの少ない授業

エジプト概要 経緯 なぜ特活? 日本の特活 具体的な内容/困難点と成果 今後に向けて

5. エジプトの「TOKKATSU」における具体的な内容や方法、困難点と成果

掃除

Before
・掃除は「清掃員」の役割。蔑視
・人の捨てたゴミを拾う理由はないという考え
・子どもにとって掃除は「罰」

導入時
・まずはゴミ拾いから
・掃除の真意は社会参画の疑似体験
・教員も一緒に掃除
・「みんなの為」は「自分の為」

After
・学校に対する「帰属意識」の強化
・教員も一緒にすることで、学校における教員への認識の変化
・家庭やコミュニティの行動変容にまで波及

【課題】
・保護者からの猛烈な反発
・むしろ「資金的な課題」との認識

エジプト概要 経緯 なぜ特活? 日本の特活 具体的内容/困難点と成果 今後に向けて

5. エジプトの「TOKKATSU」における

掃除 具体的な内容や方法、困難点と成果



After

- ・学校に対する「帰属意識」の強化
- ・教員も一緒にすることで、学校における教員への認識の変化
- ・家庭やコミュニティの行動変容にまで波及

エジプト概要 経緯 なぜ特活? 日本の特活 具体的内容/困難点と成果 今後に向けて

6. 今後に向けて

エジプト概要 経緯 なぜ特活? 日本の特活 具体的内容/困難点と成果 今後に向けて

6. 今後に向けて

エジプト

教育省の方より

教職員の理解を得て進めるにはどうすればよいでしょうか?

(みなさんなら、どう答えますか?)

エジプト概要 経緯 なぜ特活? 日本の特活 具体的内容/困難点と成果 今後に向けて

6. 今後に向けて

エジプト

・全国への普及(約1万8000校)…2030年をめどに

管理職の理解 教員の理解 保護者の理解

変化に伴う困難をどう乗り越えるか

形だけでなく、理念を理解して実践されるか 予算

→特活オフィサー(エジプト人)、スーパーバイザー、JICA専門家、海外協力隊(日本人)

エジプト概要 経緯 なぜ特活? 日本の特活 具体的内容/困難点と成果 今後に向けて

6. 今後に向けて

日本 自身の特別活動について振り返ってみると…

例えば、運動会 掃除



内容や当日までの流れにとらわれていて、その先にどんな力をつけたのか、その学習活動の価値は何なのか、認識が足りなかったのでは?

日常的なもので、やっていた当たり前に捉えていた…

エジプト概要 経緯 なぜ特活? 日本の特活 具体的内容/困難点と成果 今後に向けて

6. 今後に向けて

日本

サッカーW杯などの日本人サポーターがごみを拾う姿…学校教育の掃除が生かされていると思いますか?

学校の先生より

(みなさんなら、どう答えますか?)

エジプト概要 経緯 なぜ特活? 日本の特活 具体的内容/困難点と成果 今後に向けて

6. 今後に向けて

日本

試合後(たとえ負けでも)、ごみ拾いをする日本人の行動が世界で称賛

物を大事にする心 “来たときよりも美しく” 普段から汚れないように使う

現在 私たちが力を注いでいることは、子どもたちの将来につながっている

エジプト概要 経緯 なぜ特活? 日本の特活 具体的内容/困難点と成果 今後に向けて

6. 今後に向けて

共に

日本・エジプト、教員同士でセッション

可能性の一つとして…

子どもたち同士の交流 (エジプトにつながる子のある子の在籍校も)

異文化理解に関する教員研修

海外協力隊との交流 (6年社会科「世界のなかの日本とわたしたち」)

参考資料:

- ・JICAエジプト事務所「エジプトにおける協力」
- ・JICA人間開発部基礎教育第二チーム「エジプト特別活動を中心とした日本式教育モデル普及・発展プロジェクト」
- ・中島基恵氏(JICA専門家)「特別活動を中心とした日本式教育モデル発展・普及プロジェクト」概要説明資料
- ・杉田洋氏 特別論考「エジプトでのTOKKATSUの現状と可能性」(日本特別活動学会紀要 第26号 2018.3)
- ・京都大学 教育学研究科 2020レクチャーシリーズ第8回 杉田 洋氏(國學院大学 人間開発学部 教授) 主催:グローバル教育展開オフィス 2021年2月19日
- ・小学校編「特別活動指導資料」国立教育政策研究所
- ・外務省HP



氏名	所属	職名	担当業務
馬谷 陽子	京都市教育委員会	指導主事	京都市立開建高校開設準備室・高校英語

1. ご自身がこの研修を通して探究したテーマについて、また、その探究から得た学びや気づきをお書きください。

探究テーマ：「Tokkatsu」を現地の人たちはどう受け止めているのか

気づき・学び：

エジプト日本学校 (EJS) の教員や児童たちのTokkatsuの捉えとTokkatsuを知らない(経験したことのない)人たちのTokkatsuの捉え(サンプルはかなり少ないので、その一例でしかないが)に微妙な溝を感じた。Tokkatsuという教科に対して、懐疑的な人たちの意識は、「反対」というよりも「なぜわざわざ?」「何のために?」と感じている部分が多いのではないかと。また、こういった意識を持つ人たちがいる中でTokkatsuの導入を進めるのは、「反対」の人の意見を変えるよりもむしろ難しいのではないかと実際に現地のTokkatsuを経験したことがないという高校生と話した時に感じた。

2. 1の学びや気づきは、本研修におけるどのような経験や体験から得られましたか。

EJSでは、教員・児童ともにTokkatsuを前向きに捉え活動されている様子が見られたが、EJSでないSara Taqy-Allah Experimental Language Schoolに高校から通っていると言う生徒たちと話したとき、「なぜそれが必要なかわからない(わざわざTokkatsuを取り入れる必要性を感じない)」というような冷めた意見も耳にした。(彼女たちはTokkatsuを経験していない)例：自分たちで掃除をすることについては、「掃除をする仕事の人があるし、そもそも掃除の必要がないように綺麗に使うようにしている」。話し合い活動についても「特にTokkatsuでなくても話し合いはしている」等。

Tokkatsuを導入することに対して否定とまではいかないが「なぜ?」という意見に対して(おそらく、生徒に限らず保護者やEJS以外の教員等からもそういう反応が多いのではないかと推測)どう答えるのかに苦慮しておられるのだろうと感じた。

3. 研修を通して、「今、この時代に、国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか?

グローバル化が進み、行き交う情報量も膨大にはなったが、日本の教育現場での異文化理解はまだまだ進んでいないと感じている。また、コロナ禍がその傾向に拍車をかけてしまったとも感じる。ただ、これまでもだが、人口が急激に減り続ける日本において、特に若年世代は、今後、どこにしようと他国の人たちと関わらずに生きていくことはほぼほぼ不可能になるであろうし、そういった時代の流れの中、異なる文化的背景を持つ人たちと真に協働するとはどういうことかを考えるための入り口として国際理解教育や開発教育が果たす役割はやはり大きいと感じた。

また、個人的には、英語（外国語）の教師として、翻訳AIの発達が進み、もはや「英語（外国語）を学ぶ」必要すらなくなるのではないと言われる中で、英語（外国語）という教科の役割は、単なるツールとしての言語を教える場ではなく、言語を文化として捉え、異なる文化的背景を持つ人たちと「英語」（とは限らないが）という共通言語を用いてコミュニケーションをとり、相手を慮りながら互いの理解を深めていくことができる力をつけていく場としての役割がより大きくなっていくと考えている。ただし、そもそもそういった人たちとコミュニケーションを取りたいという意欲がなければ英語（外国語）という教科の学びに向かう意欲が起こるはずもない。国際理解教育や開発教育には、そういった意欲を生徒たちの中に喚起できるような「教材」が豊富にあるため、英語（外国語）の教師としてそれらの「教材」を活用しないという選択肢はないと考えている。

4. 年度内から次年度の業務において、開発教育・国際理解教育推進のために自分が取り組みたいことについて、主な3つを挙げてください。（所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定など）

- 京都市教委高校担当（行政）向け報告会
- 高校生（希望者）向けエジプトスタディツアー企画（EJSでのボランティア活動）
- 高校生と国際支援活動をされている地元NPO/NGOとの連携活動の促進

5. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク（国際協力推進員）や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか？主な3つを挙げてください。

- 高校生（希望者）向けエジプトスタディツアー企画（EJSでのボランティア活動）
- 高校生向けワークショップ・交流会・座談会の実施
（協力隊OVの方との交流、現在派遣中の方とのオンライン交流等）
- 高校生が日本でできる国際支援のための新たな活動を考える（会）

6. 本研修への参加を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容(報告会など)。その際、使用した資料があれば、添付をお願いいたします。

- 京都市教育委員会 学校指導課 高校担当 行政係員会議にて研修概要報告を実施
- 京都市立塔南高等学校(京都市立開建高等学校開設準備室所在地)にて今回の訪問校の1つであるEJS(EI-Shorouk 2)の子どもたちに贈るカード作り企画を実施(希望生徒対象)



カード作り企画
参加生徒募集チラシ



カード制作中

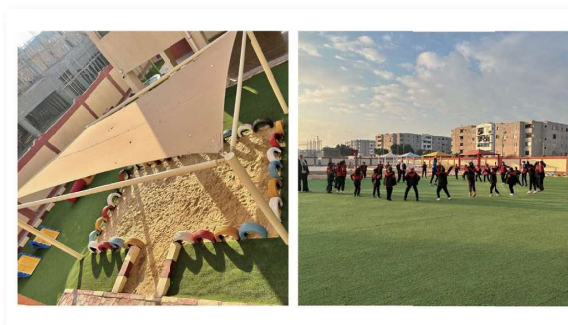
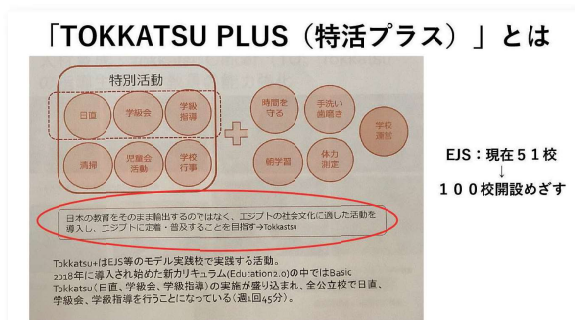
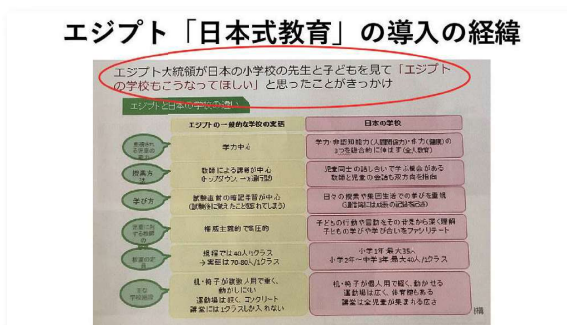


製作したカード

7. その他所感(研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか?どのような教育の場を作っていきたいか?など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。)

高校英語の教員として、これまでも生徒たちが日本以外の文化に興味・関心を少しでも持ってくれればと思いながら授業をしてきたが、今回の研修を経て、一人でも多くの高校生を海外に送り出したいという気持ちが一層強くなった。若いうちに異なる文化、異なる価値観に出会うことは、将来のキャリアを考えていく上でも大きな糧になることは間違いない。そして、その違いが大きければ大きいほどその影響も比例して大きくなると感じている。今は日本国内にいながらオンラインで様々な国の人たちとコミュニケーションをとることが簡単にできる。しかしそれは、直接その場所に行って五感で感じる経験や、その国、その土地の人たちと直接何かを共にする経験に代えられるものでは決してない。海外に対する興味・関心の高さ(或いは低さ)は、生徒によって様々だが、どういった思いを持つ生徒であれ、「一度海外に行ってみようかな」と思えるような仕掛けを考えたい。また、生徒がそう思った時に、行動に移せるよう背中を押せる存在でありたいし、環境を作りたいと強く思う。

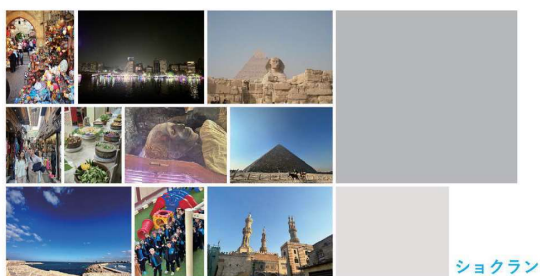
仕掛けの1つとして考えるのは、少しでも多く現地の人たちと触れ合えるような海外(できるなら開発途上国)スタディツアーの企画である。そこには必ず現地の人たちと何か協働できるような内容を含ませたい。私が今回の研修を特別と感じた理由の一つが、現地の人たちとの交流の多さである。ター公民館のボランティアの人たちや子どもたち、EJS等現地小学校の子どもたちや高校生、そして熱心に私たちの話を聞いてくれた先生たち等々、単なる観光旅行では得られなかったであろう交流を1週間足らずという短い期間の中でも本当にたくさんできたことで、エジプトとの距離、エジプトの人たちとの距離が自分でも信じられないくらいに一気に縮まった。飛行機でも半日以上かかる遠く離れた国、そして文化も日本とは全く異なる国であるエジプトであっても、こんな気持ちになれるという経験をぜひ高校生にも味わってほしい。そして、様々な文化的背景を持つ人たちとであっても願いが同じであれば協働できるということに気づいてくれると嬉しい。そんなツアーを多くの高校生の手の届くところにあるように準備し、実践し、広めていきたい。





今後実現させたいこと

- ・エジプトスタディツアー〈開建・希望者〉
(EJSでのボランティア活動含む)
- ・カイロー日本 オンライン交流会
(ター公民館, カイロ大学日本語専攻生等)
- ・EJSとの交流
(現地JICA協力隊員とコラボ)



氏名	所属	職名	担当業務
山本 昌平	大阪市立新興中学校	教務主任、研究主任、指導教諭	

1. ご自身がこの研修を通して探究したテーマについて、また、その探究から得た学びや気づきをお書きください。

探究テーマ：社会と学校のつながり

気づき・学び：

政治と教育と学校のバランスについて一番学びが深かったと思う。28日のSara Taqy-Allah Experimental Language Schoolでの時間、坪内さんと課題面に関する話をしたことが気づきが多かった。

- 日本はおいしいとこどり文化、エジプトはコピペ文化。Tokkatsuの実施も子どもたちの様子を見取りながら進めるというよりは時間ベース。できていなくても時間で切るようなことも多い。先生たちも認知的な時間に価値を置いているため、なかなか理念の共有や良さを実感する場面を作ることができない。それがゆえに進まない部分があることもあること。
- 学校管理は軍管轄であること。それがゆえにTokkatsuが軍事国家的な側面で導入されているのではと感じる人も少なくないらしいということ。
- 砂場遊びは導入されているが、それ以外の遊びは導入されていないこと。導入を提案しても保護者、学校にニーズがないということ。小学生も15分しか休み時間がない。自由な時間の中で生まれる学びについて焦点化されていない。
- 新しいことを導入する時にどうすれば良いのかという悩みは共通していたが、実施する上でのコンセンサスの取り方が教育の場合は難しい。工業社会において日本も他国から技術をたくさん真似したがそのどれも売り上げや利益に直結するものだった。つまり、成果が早い段階で見えてくるものである。一方教育の成果は時間がかかる。よってよりコンセンサスを取ることが難しい状況下にあるのだろう。

2. 1の学びや気づきは、本研修におけるどのような経験や体験から得られましたか。

- 坪内さんの話
- EJSを具体的に見学ができたこと
- ター公民館での社会教育の様子と比較できたこと
- Sara Taqy-Allah Experimental Language Schoolの朝の学活を見学して
- 教育省(PMU1)の理念の話を伺って
- E-JUSTの中でRonriの説明を聞いて

3. 研修を通して、「今、この時代に、国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

環境格差や地域格差はもちろん、政治的な側面から教育のあり方や役割が大きく変わることを感じる研修となった。すべての子どもたちに教育の価値を提供するようにするためには社会制度の問題やインフラ、生活水準の向上、コミュニティの醸成など至る面から整えていくことが大切になる。また、日本がエジプトに貢献している施設を見ると、他国に対して貢献していることがあることも理解できた。その担い手や共に豊かな社会を創るという感覚を次世代に感じてもらえるような教育することは非常に大切なことである。

途上国において遊びの重要性が認知されていない。これはひいていえば「教育の中に起こるマイクロアグレッション」だと捉えている。もちろん現地に赴き、体験することに優るものはないが、教育において価値がないと捉えられているもの、むしろ悪のような扱いをされているもの、この認識が変容されれば、多文化理解や国際理解の一つの一手になるものにつながるのではと感じるからである。心の部分での垣根をとることや、新しいものを導入するための産みの苦しみといった経験を得ることができる。この産みの苦しみは今、発展を目指す全ての国が経験することだと感じたので、日本の教育でもそのような体験ができるような環境を整えることが大切だということがわかったように思う。

4. 年度内から次年度の業務において、開発教育・国際理解教育推進のために自分が取り組みたいことについて、主な3つを挙げてください。(所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定など)

- 生野区のコミュニティと沖縄の公民館の活動をつなぎ、情報共有や交流をつくる。
- 他学年のPBL実践とつなぎ、校内の国際理解教育を推進する。
- 校内で報告会を実施する。

5. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか？主な3つを挙げてください。

- 非認知能力を育む遊びの形をター公民館のギドさんと連携して導入し、Tokkatsuで育みたい資質能力の育成に効果があるものを提供できるようにする。
- JICA大阪の方と報告会を実施する。その際、今回の参加メンバーの西日本の方とも連携して実施する。
- エジプトの教育と連携して遊びを通じた学びを推進する。

6. 本研修への参加を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容(報告会など)。その際、使用した資料があれば、添付をお願いいたします。

(報告会における) 私の担当はター公民館の社会教育における取組である。「教育には国を変える力がある」という信念の元、教育から社会を変える実践をおこなっていた。個人的にはエジプトの就学前教育の内容にはもっと改善できるものがあるのではと感じている。というのも非認知能力を含め、五感で体験する経験が幼少期には必要であると考えているが、エジプトでは英語やアラビア語を習得させることに価値が置かれ、非認知能力を育む遊びの時間が極端に少ない。遊ぶことで他者との関わり方を覚えたり、自分達でルールメイキングしたり、我慢を覚えたり、新しい楽しみを見つけたり、実にさまざまな効果が期待される。その内容をどのように社会全体で支えるかという視点において、公民館事業の価値が際立ってくると感じた。公民館では紙粘土のようなもので寿司や花をつくる遊びがあり、子どもたちが遊びで学べる環境があった。学校ではなかなか得られない体験であることが視察を終えることでわかった。このようなそれぞれの環境で足りないものを補い合えることが社会全体を通じてできる教育の1つのあり方だと感じた。一方で社会の認知も同時に進めていかないといけない課題である。日本では子どもが服を汚してくることもあるが、エジプトではそれが受け入れづらい背景がある。EJSでは唯一の遊びの時間として砂場遊びがあるが、その時間ではつなぎのような服の着用が必要である。同じくター公民館でも紙粘土の活動ではポリ袋を切って汚れないような配慮がなされていた。このような価値観の違いもすり合わせながら子どもたちの活動の機会を増やすことで社会教育の価値を創り、より良い社会を築いていくと感じている。

7. その他所感(研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか?どのような教育の場を作っていきたいか?など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。)

まず一つはこのつながりをここで終わらせない仕組みをつくることである。2023年7月29日(土)に那覇市繁多川公民館にてEdcamp NANIWAという教育イベントを実施することにした。沖縄の教育関係者・保護者・地域人材・小学校校長・大阪の教育関係者などが交流し、エジプトともオンライン交流会を実施する。

また、活動を通じて就学前教育や遊びが学びにつながるといった教育観については引き続きエジプトに貢献できないか考えている。

持続可能な社会をつくるためには、教員現場の当事者意識と、社会変革に対応できるマインドセットが不可欠であると感じている。このような交流を通じて自国の良さや課題を明確にし、仕組みの是正にアクションできる人材を増やすことが多文化理解の教育を進めていく土台になると思うので、内外に関わらず変容を起こすアクションをおこなっていく。

氏名	所属	職名	担当業務
泉 裕子	江津市教育委員会 学校教育課	指導主事	学力育成

1. ご自身がこの研修を通して探究したテーマについて、また、その探究から得た学びや気づきをお書きください。

探究テーマ：みんなにとっての“Well-being”とは？

気づき・学び：

- 教育が目指すのは、子どもたちそれぞれの未来を自分の手で切り開いていけるたくましさやしなやかな強さ、周りと協調しながら生きていく子ども達の姿。エジプトの先生方も同じ思いであることが今回分かった。→子ども達のWell-beingに繋がる資質。それらを育成する場所としての学校の意味は大きい。
- 世界の状況は国でそれぞれ異なっているからこそWell-beingの達成には、子ども達への教育が重要な意味をもつのではないか。
- 学校は子ども達にとってなりたい自分に挑戦し、かなえる自己実現の場。信頼できる大人に見守られながら、学校という小さな社会の中で子ども達は成功と失敗を繰り返しながら自分を形成していく。将来子ども達の生きるステージが実際の社会へと移ったとき、子ども達が自分の存在意義を感じ、自分をいかして社会に貢献し、自己実現していける資質の育成を学校教育、社会教育は目指している。
- 「なりたい自分」「住みたい社会」など自分の思いを認識しながら、エージェンシーを発揮し、自分で行動しながら理想の姿、住みやすい社会にしていくことがWell-beingではないかと考える。

2. 1の学びや気づきは、本研修におけるどのような経験や体験から得られましたか。

エジプトで最も複雑な気持ちになったのは、学校に行かず路上で物を売る子どもや、観光客に近寄り「靴を買ってほしい」などとお金を求める子ども達の姿を見た時だった。この子ども達は生きるためのたくましさなどを生活の中で身に付けているとはいえ、子ども同士の純粋な交流や、対話を通しての学び、友達と協力することの難しさや楽しさなどを経験せずに大人になってしまうのだろうか、とふと考えた。

エジプトの先生が、子どもたちには将来自己決定をしながら、行動できるようになってほしいと話していたことを思い出した。日本もエジプトも同じ思いで教師は子ども達と接しており、人生の大きなゴールに「自己実現」があるのではないかと感じている。

未来を担う子ども達のWell-beingを、社会での「自己実現」や誰にとっても住みやすい社会を創造していくことと考えた時、教育や学校の意味は計り知れない。社会の一員として生きていくために必要なこと、例えば生活習慣、自己理解、自己実現していく経験、様々な人との協働、合意形成をする経験、社会的ルールの遵守などは学校と家庭が協力しながら進めていくことが必要だ。掃除、日直活動、話し合い活動、手洗い、歯磨きなどEJSで新たに導入されている日本式教育に共通しているのは、社会の中で様々な人たちと協働しながら支えあうのに必要なことである。日本の教育でも小さい頃から集団を意識し、そのなかで多種多様な体験を通して、協働する経験を重ねている。今回の研修でエジプトが目指している人づくりは「協働」「助け合い」「責任感」「公平」「思いやり」「心地よさ」など日本の教育が大切にしていることをベースとしていることが分かった。

さらに学校教育は子ども達の未来に焦点をあてた目指すべきゴールを社会と共有し、協働することが大切だと気付いた。今回訪問したター公民館ではエジプトでまだ浸透していない「社会教育」の理念を実現しようと、

地域の子ども達を集めてワークショップを開催したり、趣味を生かせる居場所づくりを進めたりしていた。このように地域の公民館が子ども達に積極的に関わる中で、子ども達は協力してくれる大人、地域の存在に気づき、安心して学ぶことや自己表現する心地よさを感じる。そんな温かい環境の中で子ども達が活動することで、学校で培った責任感や人のために動く経験を、次は自分の地域で発揮してみようと自己実現に向けて一歩前に踏み出すことができるようになるのではないかと感じた。

エジプトの路上にいた子ども達は将来の自分の姿をどのように思い描いているであろう。日本の子ども達はどんな未来を想像して、自分や日本にわくわくしているだろう。子ども達が未来に希望を見出し、夢やなりたい自分に少しでも近づくために、私たち大人はどんな心持ちで子ども達を支え伴走していけばよいのか、大人の役割を社会全体で共有していかなければならないと感じている。

3. 研修を通して、「今、この時代に、国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

今回の研修を通して、国際理解教育や開発教育を推進することは、予測困難な未来を生きる子ども達が自立して生きていくために必要な資質・能力を育成するために3つの意味があると感じた。

1つ目は、「世界を知ることは自分の視野を広げる、多角的な視点を得る」ことにつながるということである。

カイロの街に立つと、日本の常識は通用しない世界が広がっていた。車線や横断歩道、信号のない道路で行きかう車や歩行者、常にクラクションを鳴らしている車やバイク、渋滞している車の隙間を歩いて商売をする人、お金を欲しいと近づいてくる大人や子ども。今までの当たり前が通用しない目の前の状況を受け止めるために、私は今までとは別の視点で解釈しなければならなかった。カイロの当たり前を受け入れるために様々な視点から解釈せざるを得ない場面に出会えたことで、物事を見る視野を広げるきっかけができたように感じている。このように今までの自分の価値にはなかったことに直面する経験を重ねていくことで常識にとらわれない柔軟な考え方ができるようになるのではないかと考えた。

このエジプトでの研修を経験するにあたり、仲間の一人が「頭を空っぽにして」と話していた。私にとってエジプトは全く未知の国だったが、この言葉のおかげで先入観やイメージに左右されことなくエジプトのユニークさ、人の温かさ、純粋さを感じることができた。エジプトに対するマイナスイメージがなかったわけではない。しかしそのマイナス部分も含めて私自身がエジプトをまるごと受け止めることができたことで、頭を空っぽにして、物事をフラットに見ることの大切さを実感した。先入観に左右されず、様々な違いがあることを前提とし、広く豊かな心で多角的な視点をもって人々と協働できれば、そのスキルは今後歩んでいく人生の強力な味方になるに違いない。

2つ目は「日本を改めて知る、捉えなおす」きっかけになるということである。

今回の研修でエジプト政府が特別活動を柱とする日本式教育をエジプト全国で推進している実際を知ることができた。シシ大統領来日時、小学校での話し合い活動の様子、日直や学級会で全ての子ども達に様々な役割を経験するチャンスが平等にあること、また子ども達だけで登下校できる安全な日本社会の環境、親子の信頼関係など、日本の教育に感銘を受けたことからエジプトで日本式教育がスタートした。

日本の学校で「掃除する」、「日直や係活動をクラス全員で分担する」、「より良い学級にするために学級会で話し合う」、「時間を守って生活する」などどれをとっても日本の学校や社会での当たり前が、海外で高く評価さ

れ、エジプトの教育や人づくりに一役買っているという事実。日本人として日本の教育に誇りを感じると同時に、私たちの日常にあふれている素晴らしいものに改めて気づかされた。しかし「掃除ってなぜするのだろう?」この問いに子ども達が納得できる説明をできる人はどのくらいいるだろうか?仲間との協力、役割への責任感、身の回りの清潔に保つことの大切さ、みんなで気持ちよく生活するために協働すること、このような掃除の意義をエジプトでの掃除活動から学んだ。このような当たり前は私たちの日常にたくさんあるだろう。今後はそれらの意義を再確認し、言語化しながら子ども達と教師が共通の認識をもって教育活動をしていくことが必要だと感じている。

そして3つ目は「国際社会の一員であることへの気づき、世界へ貢献する気持ち」につながるということだ。研修の中で公民館や教育省、EJSで日本の学校教育や教育システムがエジプトの役に立てていることはとてもうれしいことであった。しかし実際エジプトで研修が進み、エジプトの皆さんのその情熱や苦悩という実際を感じる度にエジプトでの教育活動がきれい事だけではないことも分かった。先生方の離職率の高さ、学校内での日本式教育の理念の理解に差があることなど、自分自身も学校で感じる同じようなジレンマがエジプトの教育現場にもあると知り、ぐっとエジプトの教育課題が自分事になった。「エジプトのために、子ども達のために、何か私にできることはないだろうか?」と自分レベルで貢献したい気持ちが芽生えてきた。

このように子ども達も自分と外国との結びつきを自分事として感じることであれば、主体性が芽生え、課題を解決するにはどうすればいいのだろう、と新たな問いが生まれくるだろう。国際社会の一員として「自分には何ができるのだろう?」「自分だからできることは何だろう?」と自分理解をベースに考え、主体的に行動することにつながっていく。このようにある物事が他人事から自分事になれば、子ども達はわくわくしながら自分に問い続け、自分にできることを模索し、主体的に行動し始める。実際私も今回の研修中、たくさんの問いが浮かび、自分に何ができそうかと考えた。グローバル社会と言われるこの時代に生きている私たちは、自分を世界の一員だと認識し、世界の事実に向き合っていく必要がある。世界とつながることで便利になったこともたくさんあるが、主体的に世界と関わることで、良いことばかりではない事実も知り、世界全体で協働しなくてはならないことに気付く。国際理解教育は世界の今を知り、その中にいる自分を発見し、自分にできる次の一步を踏み出すためにとても大きな意味があると強く感じている。

私はこの研修に行く前、この世界は私の知らないことで溢れているのだろう、と漠然と感じていた。実際、私はこの研修でたくさんの知らなかったことに会うことができた。体験を通して知らないことに会うことで興味や疑問が連鎖し、あれもこれも知りたくなった。今私の心は「楽しい!」でいっぱいだ。研修に行ってから、ずいぶん時間が経った今もなお、私は「楽しい」に包まれている。知ることは楽しいこと。これは私がエジプトに行って実感したことである。だからこそ子ども達には、様々なことを体全体で体験しながら、知らないことに会うこの「楽しい!」をぜひ感じてほしい。体験から得られる「楽しい!」は人を動かす原動力だ。「楽しい!」は子ども達が未来を主体的に切り開いていくための鍵だと確信している。

4. 年度内から次年度の業務において、開発教育・国際理解教育推進のために自分が取り組みたいことについて、主な3つを挙げてください。(所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定など)

- 市校長会、指導主事会等での情報共有
- 管理職有志の会での勉強会へ情報提供
- 市広報への掲載

5. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク（国際協力推進員）や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか？主な3つを挙げてください。

- Zoomでの研修参加者とJICA担当者で報告会
- 国際理解教育の授業
- 教職員向け報告会、ワークショップ

6. 本研修への参加を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容（報告会など）。その際、使用した資料があれば、添付をお願いいたします。

- エジプトでの日本式教育推進の実際の様子、特別活動の捉えなおし、体験することの意義（教員有志の会、他市小学校校内研修）

7. その他所感（研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか？どのような教育の場を作っていきたいか？など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。）

教師は子ども達の教育環境の中でも大きな影響のある環境そのものの一つである。教師は日々接する子ども達に意図しなくとも自分のメッセージをたくさん発信していることを自覚しなければならない。そのメッセージが、個々の違いを前提とし、「正しい」「正しくない」の判断基準だけではなく、物事を多角的に捉え、物事の深部を見ようとする姿勢でありたい。そのような環境の中でこそ子ども達は安心して自分を表現したり、自己実現に挑戦できたりするのではないだろうか。

また、外国から日本を捉えることや、世界の実際からは多くの新たな学びを得ることができる。世界に触れるということは、新たなことを知ったり、新しい価値観に出会ったりするチャンスだ。しかし実際に子ども達が外国に行くことや、世界で起こっていることを自分でキャッチするには限界がある。しかしグローバル社会の中で生きていく子ども達には、世界とのつながりを感じることは大切なことである。だからこそ、教師である私たちがその重要性を理解しながら、自分の経験を伝えたり、子ども達に学びきっかけやチャンスを作ったりすることがとても重要になってくる。

世界の知らないことを知ると「わくわく」が止まらない。そんな「わくわく」を子ども達にもぜひ感じてほしい。そんな「わくわく」のきっかけを子ども達に投げかけ続けられる教師でありたい。

氏名	所属	職名	担当業務
小川 由有	福岡県教育センター	指導主事	若年教員研修・中学校外国語

1. ご自身がこの研修を通して探究したテーマについて、また、その探究から得た学びや気づきをお書きください。

探究テーマ: 外から見た日本の教育「規律や協調性などの人格形成を重視する日本式教育」

気づき・学び:

【自分でも気付いていなかった日本の教育の良さ】

- ① 学校生活を通して自分たちで使う場所を自分たちできれいにする習慣を、多くの子供たちが自然に身に付けている。その当たり前の意識が、ワールドカップにおける日本人サポーターのゴミ拾いをして会場を後にする姿や、日本の街がきれいに保たれていることにつながっている。
- ② 規律や協調性を大事にすること（役割分担しながら、お互いに協力して何かを作り上げたり、決まりを守りながら学校生活を送ること）で、子供たちみんなが安心して生活することができる学校づくりを目指している。それが（保・幼）小・中・高と段階が進むにつれ自然と身に付いている。一方その課題として、当たり前になりすぎて、教師も子供も、決まっているからする、みんながしているからするというようにその目的や意義・重要性を見失っている側面も見られる。また、子供たちにとって意義があると思って取り入れられている学校行事等が多すぎて教師がそれをこなすだけで手いっぱいになっている現状もある。さらに、子供は協調性を重視するあまり、「出る杭は打たれる」という雰囲気、他人と違うといけなような気がするなど、個性を発揮しにくくなっている。

【これから私たち日本の教育が目指すべきこと】

世界が認める日本人としてのふるまい(ワールドカップや東北大地震で見られたような日本人の行動)は誇りに思うべき。これからは、日本の教育の課題解決のためにも(次項※を参考)自分で決めて行動する、自分自身で人生を切り拓くことができる人材を育成する。そのためにはやはり子供が主体となって学校生活を送ったり学習したりする必要がある。EJS in Nasr Cityの先生に「子供たちがどんな大人になったらいいと思いますか?」と尋ねると「やりたいことを自分で決めて自分で行動できる人になってほしい」という回答が返ってきた。エジプトも日本も目指す子供の姿は同じである。エジプトは今平均年齢24.1歳(日本は48.6歳)人口増加率2.0%(日本は-0.2%)日本式教育が浸透し若者が勢いづけば、祖先はピラミッドを作った人々。とんでもない力を発揮するに違いない。私がエジプトで出会った人々の目はキラキラしていて、こんなことが知りたい、やってみたいという貪欲さ、希望に満ち溢れていた。私たち日本人も負けていけない、共に頑張っていこうという気持ちが沸き上がった。

※平成25年6月に閣議決定された「第2期教育振興基本計画」における日本の危機的な状況

- 少子化・高齢化の進展による社会全体の活力の低下
- グローバル化の進展による我が国の国際的な存在感の低下

(「特別活動 指導資料 楽しく豊かな学級・学校生活を作る特別活動 小学校編」文部科学省国立教育政策研究所 教育課程研究センターまえがきより抜粋)

2. 1の学びや気づきは、本研修におけるどのような経験や体験から得られましたか。

【私の目に映ったエジプトの教育の現状—教師や子供の声から見てきたこと—】

掃除の導入

町はゴミで溢れ、誰も拾う人はいない。エジプトから乗った飛行機を降りる時、座席の周りにはゴミが散乱している。掃除は職員がすればいいという保護者がいるという現状の中で、掃除を取り入れたことで、行動が変化してきた子供が増え、教師や保護者の意識の変化が起こり始めている。

- 子ども達が自分の部屋を掃除するようになり保護者が好意的に変わってきた。【EJS in Nasr Cityの教師の声より】
- 掃除をしてくれていた親に感謝するようになった。街にあふれているゴミが気になるようになった。きれいにしようと呼びかけたい気持ちになった。(まだ実行には移せてないが)【Sara Taqy-allah Experimental Language schoolの高校生インタビューより】

※この学校は公立学校で誰もが入れる学校、7年前から先進的に日本式教育を導入

朝礼・時間割の導入

順番を待てない、ファストフード店で並んでいる列にどんどん割り込んでくる子ども達に悪いことをしている意識はない。なぜなら教えられていないから。「何事も早い者勝ち」という、割り込んででも前へ行きたがる習慣があるエジプト人の一面だと日本大使館の方が教えてくれた。そんなエジプトの学校に、朝礼(※)や時間割を取り入れたことで子供の行動や意識に変化があった。

- 朝礼の時間を決めることで遅刻が減った。整列をする時、早く来た人から並ぶのではなく、身長の高さに合わせて並ぶことで早いもの順という意識が少しずつ変化してきた。【教師の声より】
- 時間通りに動くことで自分の時間を管理することができるようになり、計画的に自分の時間を使うことができるようになった。【高校生インタビューより】

※朝礼：高校生は、中庭に集まって全校集会のような形で朝の連絡を行っていた。

日直・学級会の導入

日本式教育が取り入れられる前は、学級での仕事は教師が指名する子供だけに与えられる特別な役割だったが、日直や学級活動を取り入れるようになってから、子供の行動や意識に変化があった。

- 学級で計画したクイズ大会について話し合う子ども達。その日の当番で司会をした二人は、学級全体の意見を上手に引き出しながら、最後はみんなの意見を取り入れた折衷案を提案。手を挙げない子に「あなたは思う？」と聞いたり、特別支援の子の意見も上手にファシリテートしながら、みんなが参加できるよう進めていた。【EJS in Nasr Cityの5年生の学級会より】
- 自分の役割を果たすというクラスや学校での仕事ができ、学校生活に満足感を感じるようになり、スッキリした気分、満たされた気持ちで帰宅するようになった。【高校生インタビューより】
- 「学級会好き？」と尋ねると「大好き！友達のことをもっと知ることができるし、仲良くなれるから。」と答えてくれた。【高校生インタビューより】

3. 研修を通して、「今、この時代に、国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

【中学校外国語教師として】

英語を6年間（これからは10年間）学んでいるにも関わらず話せない日本の現実は一変的で、日本の英語教師の意識改革が必要。帰りの飛行機で出会ったエジプト人の親子（夫の仕事の関係で日本に住むらしい）と話して、母親に言われた一言「日本の子ども達は英語話せる？ 話せるなら日本の公立学校に子どもを入れられるのに…」英語教育の課題を突き付けられたような気持ちになった。

【一教師として】

日本のことしか知らない子供たちにとって、異文化理解は他の国を知ることの大切さやおもしろさを与えるきっかけ作りになると同時に、当たり前だと思っている日本の良さを知るチャンスになる。

言葉も文化も異なる私たちが、日本式教育を取り入れるということを通して一つにつながったような気持ちになった。お互いの違いを理解しあうこと、そして教育を通して、お互いの国が伸び合っていくことが、国際理解教育、開発教育の意義・価値ではないかと思う。

4. 年度内から次年度の業務において、開発教育・国際理解教育推進のために自分が取り組みたいことについて、主な3つを挙げてください。（所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定など）

- 福岡県教育センター内での職員または学校現場での報告会や研修会（情報共有・特別活動の意義）
- JICA九州と連携した報告会（開発教育・国際理解教育推進）

5. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク（国際協力推進員）や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか？主な3つを挙げてください。

- エジプトをはじめ、海外の子供たちと日本の子供たちをつなぐオンライン交流会（国際理解教育）
- 海外に派遣されている隊員と中学生のオンライン交流会（キャリア教育・開発教育推進）
- ター公民館で行われているオンライン日本語学習会に参加（取得した日本語教師免許を生かして）

**6. 本研修への参加を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容(報告会など)。
その際、使用した資料があれば、添付をお願いいたします。**

(報告予定)

- 特別活動の意義。何のために日本の教育は特別活動を取り入れているのか？私たち教師自身や子供たちが、なぜ掃除をするのか、なぜ話し合い活動をするのか、なぜ学校行事があるのか等を分かった上で取り組むことがとても大切だということ。

(参考文献)

- ・「特別活動 指導資料 楽しく豊かな学級・学校生活を作る特別活動 小学校編」
文部科学省国立教育政策研究所 教育課程研究センター
- ・「エジプトでのTOKKATSUの現状と可能性」國學院大學 杉田 洋

7. その他所感(研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか？どのような教育の場を作っていきたいか？など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。)

日本には得られなかった経験、エジプトで実際見てきたからこそ分かったこと、日本の教育の良さや課題、これから私たちが取り組んでいくことを、学校現場に伝え、広げ、つないでいく。

氏名	所属	職名	担当業務
西表 りか	沖縄県教育庁生涯学習振興課	生涯学習班長	班の統括

1. ご自身がこの研修を通して探究したテーマについて、また、その探究から得た学びや気づきをお書きください。

探究テーマ: 人の想いをつなぐ、それぞれの役割について～ギドさんに学ぶ想いのつなぎ方～

気づき・学び:

- 特活に懸ける、大統領の熱い想いと、それを意気を感じて全力で支援する日本とエジプトの絆の深さ。
- 幼い子達のオールイングリッシュでの授業に、エジプトの勢いを感じた。エジプトの子どもたちや教師は完璧主義で、間違ふことを恐れるような気風であったが、オールイングリッシュで授業に挑むエジプトの教師から、我々日本人が学ぶことの方が多いのでは。日本ではまだ、「英語を話せる」人を「すごい!」なんて言うが、中学校で習った英語を遣い回しているだけでもある程度通じるのだから、我々もそろそろ意識を変えて、「完璧でないけど話せる」くらいの気概を持ちたい。
- 同じく、エジプトの教師の素晴らしいところは、自分が受けてもいない[Tokkatsu]という教育を、教えているところである。
- 昼夜絶え間なく鳴り続けるクラクションは必要だというガイドさんの言葉に耳を疑ったが、鳴らし方でコミュニケーションをとっているそうである。運転中、クラクションを鳴らさないと事故が起こり、かえって危険だそう。また、横断歩道のない道路を、老若男女が命がけて渡る光景に目を疑ったが、エジプト在住の日本人によると、「めちゃくちゃに見えて、実は秩序があるんです。」とのこと。そんなエジプトの人々のたくましさや、私たちはどこかに忘れてきたような気がする。今回の旅は、その「忘れ物」を取りに行った気がする。
- あちこちゴミだらけの現状は、[Tokkatsu]の可能性に期待する。数年後に限らず、「子どもが変われば大人も変わる」と。
- エジプトは「学力中心・教師によるスクール形式の授業・試験のための暗記が中心」から、「学級会・学級指導・日直・遊びを通じた学び・掃除・保護者参加活動・朝自習・朝の会・帰りの会・職員会議・校内研修」等、様々な日本式教育へと転換しようとしている。非認知能力を伸ばすことの大切さも感じている。
- 「さすが!!」と思ったのは、ガイドさんが「橋を一つ作るのは、28日くらいでできます。あつという間ですよ。なにせ、ピラミッドを作った人たちの子孫ですからね。」と、自信に満ちあふれた顔で話していたこと。アイデンティティを大事にしている、自尊心が高いのだと思った。そんなエジプトに招いていただき、光栄に思った。
- JICAの活動の素晴らしさに改めて気づいた。エジプトにおける取組のみならず、JICAは開発教育支援事業において、十分な教材を開発し、門戸を広げているというのに、忙しさにかまけてスルーしていたと反省した。今回の研修を教育活動に還元しようと思う。まず私たちがすぐに手がけるべきはそこなんだと思う。新しくプロジェクトを起こすのも良い、エジプトの良さを伝えるのも良いが、JICAの行う事業をうまく学校教育、社会教育に取り入れていくことが先決かと思う。

「ター公民館」について

モハメッド アブデルミギード氏(ギドさん)のこと

- 母国の課題は“教育”が変わると思え、その鍵を握る施設として「公民館」に着目した。
- 「地域のすべての人々が集まり、ともに学び、つながる場所」、そんな公民館の特徴がエジプトの教育に必要と考えた。
- 「ター」はアラビア語で「学び」「協力」「つなぐ」を意味する単語の頭文字。

公民館を作ろうと思った訳

- エジプトには、モスクや映画館、舞台、カフェなど、集まる場所があったが、子どもから高齢者まで誰でもが行ける拠点というのがなかった。一部の特権階級の人たちしか入れないサロンなど、格差がある。だからこそ、誰もが行けてそこで何かチャレンジできる。また、若い頃、思うように学べなかった人が学びなおすことができるような場所が必要。(識字率のアップ→職を得る)
- ギドさんの熱い想いは、沖縄県那覇市の繁多川公民館を運営する、NPO「1万人井戸端会議」のみなさんを動かし、様々な人々の協力を得て、実現していく。
- 公民館を運営する中で、ギドさんの熱い想いがたくさんの人々に伝わり、サードプレイスの子どもたちの居場所の確保や、若者が自分の趣味に打ち込み、発表できる機会や場の提供など、地域のニーズに合った取り組みを行っている。

2. 1の学びや気づきは、本研修におけるどのような経験や体験から得られましたか。

- ター公民館
- JICAエジプト本部訪問や、学校見学等における説明等
- 様々な方との関わりや、教育省、大使館訪問等

3. 研修を通して、「今、この時代に、国際理解教育や開発教育を推進する意味や重要性」とはどんなことだと感じ、考えましたか？

正直、今回の研修に参加する前は、日本の良さを改めて理解する旅になるのではと思っていたが、逆だった。今は危機感すら覚える。

Sara Taqy-Allah Experimental Language School で女子高校生の生き生きとした表情や、「いつか必ず日本に行きたいから、大学に行って、もっと日本のことを勉強したいです。」と、熱く語る様子を見て、また、アレキサンドリアにあるエジプト日本科学技術大学での恵まれた環境で勉学に励む学生を見て、果たして日本の学生はこの現状を見て何を感じるのだろうかと思った。「あなたの国は、こんなに素晴らしい施設や、仕組みを、他国に作り上げているのですよ。提供しているのですよ。その国では、日本に憧れ、いつか日本に行くためにお金を貯め、語学を勉強し、瞳を輝かせた学生が頑張っているんですよ。どう思いますか？日本に生まれて、水道をひねれば水が出る、そんな生活を当たり前だと思いませんか？世界には学校にも行かせてもらえず、日に何往復も水くみをしなければならない子どもたちがたくさんいます。今すぐ日本の『当たり前』には感謝すべきことだと気づかなければ」と、私自身が気づいた。

日本の子どもたちにもっと、国際理解教育を推進することによって、日本の子どもたちは自分を俯瞰してみることが必要だと思う。日々の当たり前に感謝を忘れてはいないか。自分もこの旅で忘れ物をもらうまで、忘れていた。

4. 年度内から次年度の業務において、開発教育・国際理解教育推進のために自分が取り組みたいことについて、主な3つを挙げてください。(所属機関における情報共有、研修、企画、学校経営方針・教育目標や重点努力事項の改定など)

- SDGs達成のための教育推進事業において、JICAと連携した研修会を企画したい。
- 学校現場においては、社会に開かれた教育課程を実現すべく学校経営に努めたい。社会のニーズありきで学校が受け身になるのではなく、子どもが大人になったとき、どのような社会になっていて、そこで彼らが活躍するためにはどのような力を育むべきなのかを考え、いつも「地域社会に何かをやって貰っているのが当たり前」ではなく、「自分は地域社会のために何ができるのか」を考える子どもを育成したい。そういった「感謝」の気持ちが、国際理解教育／開発教育を推進する鍵になる。相手のために思って、押しつけや自己満足で国際理解は叶わない。
- また、「Society 5.0を担う人材をどうやって育成するか」は、教育における喫緊の課題の一つである。それと同時に、学びに向かう力などの非認知能力の育成も急務である。一概に国際理解教育／開発教育と言っても、多岐にわたるが、SDGsのゴールのその先に何が待っているのかを決めるのは「今」なんだということを、カリキュラムマネジメントに組み込んでいきたいと思う。各々の国が勝手に開発を進めるのではなく、人類が力を合わせるときが「今」であるということも。私は児童生徒や職員が大切に想うものを、自分も同じように大切に想う管理職でありたいと思っている。国際理解教育においても同じように相手の文化や伝統を敬い、理解することから信頼が生まれ、ともに理想とする未来へ歩むことが開発教育の基本であると思う。SDGsを自国の枠の中のみ活動としてではなく、同じ地球に棲む者同士、あらゆる自然と共存していくことを念頭に置き、JICAと連携しながら、あらゆるステークホルダーの協力を得て、国際理解教育／開発教育を進めていきたいと考える。

5. 本研修への参加を踏まえて、今後、JICA国内拠点や各都道府県のJICAデスク(国際協力推進員)や外部機関と一緒に取り組んでみたいことはなんですか?主な3つを挙げてください。

- 今回の研修で、知っているつもりで実はよく理解していなかったJICAの様々な取組について、各方面への周知の徹底を図る。
- 学校においては、「JICA〇〇校クラブ」のような活動の場を設定して、定期的にJICAから講師を招聘し、国際理解教育に関するアクションを起こしたい。
- 繁多川公民館とター公民館のプロジェクトやその他のプロジェクトに積極的に関わりたいと思う。何ができるのか具体的に相談したい。

6. 本研修への参加を踏まえて、所属機関において情報共有を行なった際の内容（報告会など）。その際、使用した資料があれば、添付をお願いいたします。

- 報告会については総務課が調整中（これから実施予定）
- JICA沖縄との定例の連絡協議会
- 課長とJICA沖縄施設を訪問し、コロンビアからの研修生と交流

7. その他所感（研修への参加を経て、持続可能な社会の創り手を育てる行政官・教育者のひとりとして、今後、どのようなことをしていきたいか？どのような教育の場を作っていきたいか？など、ご自身の理想やビジョンをお書きください。）

教育者として

- 「百聞は一見にしかず」子どもたちを実際にエジプトに連れて行って、交流や見学などの体験をさせると、必ずや何らかの「気づき」が生まれるだろう。そういうプロジェクトを生み出すこともとても良いことだが、実際、「誰ひとり取り残すことなく」包摂的に教育を行うと考えたとき、全ての子を海外に連れて行くのは困難である。やはり、そこは教師の腕の見せ所。いかにして「気づき」と「感謝」を与える教育ができるか、定年までの全ての教育活動において、私のテーマとする。

管理職として

- 今回参加させていただいたような素晴らしい研修に、学校の職員をどんどん参加させたい。背中を押して、国際理解教育/開発教育の裾野を広げたい。

行政として

- 私たちが知らないだけで、世の中にはきっとたくさんの「ギドさん」がいると思う。社会教育、生涯学習に携わるものとして、そういった多くの「ギドさん」たちを繋いで、活躍できるような社会を創っていきたい。

辰野さんの鳴らす鈴の音が、今も心地よく耳に残っています。JICAとGIFTの皆さんに身も心もゆだね、私たちのことをすべて受け入れてくれているという安心感の中で、事前研修から事後研修まで参加させていただきました。ただただ、感謝でいっぱいです。日々の業務に追われがちだけど、明らかに自分の中で変わったモノがあり、その気持ちを、これからどうやって形にしていこうか、とてもワクワクしています。また、研修会の持ち方について、自らが主宰する研修のヒントになる手法がたくさんありました。

参加したみなさん、関わっていただいた多くの方に心から感謝します。アッサラーム アレイクム。

VI

●
付録



教育関係者の皆様へ

国際理解教育／開発教育のための プログラム案内



付
録

VI



1 JICA国際協力エッセイコンテスト

2 国際協力出前講座

3 教員向け研修・セミナー

4 国際理解教育／開発教育のための教材

5 JICA地球ひろば訪問

独立行政法人 国際協力機構

世界のことを考えるきっかけに!

1 JICA国際協力エッセイコンテスト

対象: 中学生・高校生
募集期間: 5月~9月上旬 結果発表: 12月下旬

【活用法】 □ 夏休みの課題 □ 作文指導、小論文対策 □ 授業・特別活動、探究学習 □ 出前講座の事後学習

学校で習ったことやニュースで聞いたこと、
自分の体験から感じたことをエッセイで伝えよう!

JICAでは、開発途上国の現状や国際協力の必要性について理解を深め、自分たち一人一人に何ができるのかを考えることを目的に、中学生・高校生を対象としたエッセイコンテストを毎年実施しています。上位入賞者には、途上国で国際協力の現場を視察したり、現地での生活を体験できる海外研修が贈られます。夏休みの宿題や作文指導としてもご活用ください。

協 賛: 外務省、文部科学省、各都道府県教育委員会、
日本私立中学高等学校連合会など

詳しくはコチラ JICA エッセイコンテスト 検索

一人一人が小さな行動を続けることで、
いくつでも誰かが住みやすい国が
世界中に増えていくと思う。
中学2年(愛知県) 山田裕平

異質な生活の中に自分がある
「きふつと他様に楽しい行動」を
心がけるようにしていきたい。
高校2年(愛知県) 久保日向太

上位入賞者は、
海外研修の参加や
フェアトレード商品も贈呈!
応募者全員に参加費、多数の作品を
応募いただいた学校には学校賞を
贈呈します。



海外研修の様子(マレーシア)

いつもの教室で、世界を体験してきた講師と学ぶ!

2 国際協力出前講座

開発途上国の現場で国際協力に携わったJICAの関係者を講師として学校や地域などに派遣し、国際理解教育/開発教育にお役立ていただいています。現場で活躍した人材だからこそ貴重な体験談をお届けし、受講者の質問にお答えします。ご希望のテーマに合わせた講座内容を組み立てます。



国際協力出前講座

申込方法

1ヶ月前までに申込み 全国のJICA国内拠点、または各県の国際協力推進員(JICAデスク)にお問合せください。

申込書の送付

申込書は JICA国内拠点ホームページから

JICA 国内拠点 検索

活用法

- 総合的な学習の時間
- 道徳
- キャリア教育(進路選択の授業など)
- テーマ学習(文化や生活の事前学習など)
- 教員研修・PTA講習会 など

内 容

ご希望のテーマや内容に応じて、
講師を紹介します!

- 開発途上国の文化や生活を知る
- 開発途上国の暮らしから自分たちの生活を見つめ直す
- 国際協力を通して自分の生き方を考える
- SDGsについて学ぶ

対 象

小学生 ~ 一般

実施日・場所

実施日、時間ともご希望により調整可能です。
オンラインでの実施は要相談

費 用

講師への謝金と交通費のご負担をお願いします。謝金の目安は講師1人1時間あたりおよそ5,000円です。
詳しくはご相談ください。

世界を学ぶ授業づくりに!

3 教員向け研修・セミナー

● 教員向け国内研修

JICA国内拠点では、国際理解教育/開発教育に興味関心のある先生方を対象に地域に特化した研修を実施しています。

詳しくはコチラ JICA 教員研修 検索

● 教師海外研修

国際理解教育/開発教育に関心を持つ先生方を対象に、開発途上国を訪問して研修を実施しています。

研修後はその経験をもとに教材作成や授業実践を行います。

(一般教員向けコースと行政関係者および学校管理職向けコースがあります。)

詳しくはコチラ JICA 教師海外研修 検索

● 開発教育セミナー

JICA国内拠点および地球ひろばでは国際理解教育/開発教育に関する各種セミナーを実施しています。

詳しくはコチラ JICA 開発教育セミナー 検索

● 国際理解教育/開発教育指導者研修

国際理解教育/開発教育への興味・関心の高い先生方を対象に指導案作成・授業実践の更なるレベルアップに取組めます。研修後は国際理解教育/開発教育の推進のリーダーとして取組んでいただくことを目指します。

詳しくはコチラ JICA 指導者研修 検索



教材で学びを広げ、理解を深める!

4 国際理解教育／開発教育のための教材

JICAでは、国際理解教育／開発教育や総合的な学習の時間に役立つ教材を作成し、無料で提供しています。国際協力や地球規模の課題をテーマにした教材を、授業に合わせてご利用ください。

詳しくは [コチラ](#) [JICA 教材](#) [検索](#)

教材は、
JICA地球ひろばの
ホームページでも
ダウンロードする
ことができます。



映像教材



映像 小中高生向け／先生・教育関係者向け 世界につながる教室

ルワンダを舞台に「水と世界」「国際協力」が学べる映像教材です。2分～3分の短い映像なので、使い方・組み合わせは自由です。アクティブラーニング用の教材としてそのまま活用できます。授業で使うヒントも収録されています。

ルワンダ村部落に暮らす
ダニエリ君の一日



映像 パワーポイント 小中高生向け 地球ナビ

「地球ナビ」はSDGsの各ゴールについて、JICAの取組みも紹介しながら、データ、写真、クイズなどを駆使して分かりやすくまとめた動画コンテンツです。JICA地球ひろば1階にある体験ゾーンでは、大型スクリーンで楽しみながら学べます。



冊子教材



冊子 小中学生向け 共につくる 私たちの未来

学習指導要領にもある「持続可能な社会の創り手」の育成を見据え、子供たちの生きる力を育むために、JICAの国際協力を切り口にSDGsの取組みをまとめた教材です。



冊子 小中高生向け つながる世界と日本

途上国と日本とのつながり、世界共通の目標「SDGs」や国際協力について、クイズを交えながら分かりやすく紹介しています。「どうなってるの?世界と日本」のリニューアル版です。



冊子 教員向け 国際理解教育実践資料集

授業ですぐに活用できるよう、地球の現状や気候変動、需給バランスなどの諸問題に関する資料(データ、写真など)をまとめました。アフリカと自分たちのつながりや、教育の意味を考えさせるワークシートも掲載しています。



冊子 小中高生向け ぼくら地球調査隊

環境、保健、教育、食料、水問題など、私たちの身近に迫っている地球規模の課題について、アンガを読みながら学ぶことができます。

先生・生徒のお役立ちサイト



JICAでは、国際理解教育／開発教育の実践や授業で活用できる教材・素材等、様々な情報を提供する「先生・生徒のお役立ちサイト」を立ち上げました。学校で活用できる(生徒・教員向け)JICA開発教育支援プログラムも紹介しています。是非、ご利用ください。

詳しくは [コチラ](#) [JICA 先生・生徒のお役立ち](#) [検索](#)



JICA地球ひろば(東京・市ヶ谷)で、世界を体験!

5 JICA地球ひろば訪問

入場無料

団体訪問は
要予約

JICA地球ひろばでは、開発途上国の暮らしの現状や、地球が抱える課題、国際協力の実情などを見て・聞いて・さわって体験できる展示と、途上国での活動体験談や開発教育教材を使った参加型学習(グループワーク)を組み合わせたプログラムを実施しています。

修学旅行や社会科見学、総合学習等で、ぜひご利用ください!

プログラム例 120分

※プログラム時間と内容についてはご相談ください。

40分

・体験ゾーン見学
(探検シートをもとに
館内を見学)

20分

・JICAの事業や
日本の国際協力について説明

50分

・国際協力(青年海外協力隊等)の
体験談または
参加型学習(グループワーク)

10分

アンケート記入

ここに
注目!

地球案内人

開発途上国で活動した経験
を持つ地球案内人が、展示
を分かりやすくご案内します。

※体験ゾーンの展示は4ヶ月に1回程度更新されます。

活用法

- ☐ 社会科見学
- ☐ テーマ学習
- ☐ 修学旅行
- ☐ 教員研修 など

内容

ご希望のテーマや内容に応じて、
プログラム内容を組み立てます!

- 体験ゾーンの見学
- JICAと日本の国際協力について
- 国際協力(青年海外協力隊等)の体験談
- 地球体験学習
※テーマ:環境や命など
- 食事を通じた異文化理解

事前事後学習もご相談ください。

対象

小学校高学年 ~ 一般

人数

1名~80名程度

※団体での見学プログラムは要予約

実施日

通年 月曜日~日曜日
(第1・3日曜日、JICA地球ひろばの休館日を除く)

費用

無 料

JICA地球ひろば訪問

申込方法

1ヶ月前
までに
電話で予約

希望日時、訪問者人数、希望内容等をお伝えください。予約状況は、
JICA地球ひろばホームページの「訪問カレンダー」で確認できます。

地球案内人デスク直通フリーダイヤル

0120-76-7278 (TEL: 03-3269-9090)

申込書の
送付

申込書は JICA地球ひろばホームページから

JICA地球ひろば 訪問 検索

FAX または Eメールで送付してください。

FAX: 03-3269-3419 chikyuhiroba@jica.go.jp

JICA地球ひろば

市民参加協力事業(開発教育支援等)の全国拠点として、国際協力
に関心のある皆さまを応援するさまざまな事業を実施しています。

〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5

☎ 代表番号 03-3269-2911

✉ 地球ひろば推進課 mptgp@jica.go.jp

● 開館時間

体験ゾーン: 平日・土日祝 10:00~18:00
定休日 第1・3日曜日、年末年始

交流ゾーン: 9:00~21:30 定休日 年末年始

J's Cafe: 平日 11:30~14:00
定休日 日曜日、祝日、年末年始
(土曜日の営業はHPをご確認ください)

JICA図書館: 事前予約制
定休日 土日祝日、館内整理日(各月最終平日)、年末年始



※団体訪問等での駐車場の利用についてはお問合せください。

JICAのメールマガジンに登録しよう!

■ JICA地球ひろばメルマガ

JICA地球ひろばや関東近郊の
イベント情報などを隔週火曜
日に配信しています。



■ 開発教育メルマガ

国際理解教育/開発教育の
推進に向けて、実践に役立つ
情報を配信しています。



Twitter、Facebook、YouTubeでも最新情報を配信中!





発行

独立行政法人 国際協力機構 (JICA)

広報部 地球ひろば推進課

TEL:03-3269-9022

〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5 JICA市ヶ谷ビル

編集

JICA地球ひろば - 教員向け研修運営事務局

一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト (GiFT)

TEL:03-4577-6767

Email:jica-edu@j-gift.org

〒141-0021 東京都品川区上大崎2-15-19 MG目黒駅前ビル2階